

鳴門秘帖

上方の巻

吉川英治

青空文庫

夜魔昼魔
よまひるま

安治川尻あじがわじりに浪が立つのか、寝しずまった町の上を、しきりに夜よ鳥どりが越えて行く。

びつくりさせる、不粋ぶすいなやつ、ギヤーツという五位鷺いさぎの声も時々、——妙いんきに陰気いんきで、うすら寒い空梅雨からつゆの晩なのである。

起きているのはここ一軒。青いものがこんもりした町角まちかどで、横一窓の油障子あぶらしようじに、ボウと黄色い明りが洩もれていて、サヤサヤと縞目しまめを描かいている柳の糸。軒には、「堀川会所ほりかわかいしよ」とした三尺札さんしゃくが下がっていた。

と、中から、その戸を開けて踏み出しながら――

「辻斬りが多い、気をつけろよ」

見廻り四、五人と町役人、西奉行所の提灯を先にして、

ヒタヒタと向うの辻へ消えてしまった。

あとは時折、切れの悪い咳払いが中からするほか、いよいよ

世間森としきつた時分。

「今晚は」

会所の前に佇んだ二人の影がある。どっちも、露除けの笠に素草鞋、合羽の裾から一本落しの鎧をのぞかせ、及び腰で戸をコツコツとやりながら、

「ええ、ちよつとものを伺いますが……」

「誰だい」と、すぐ内から返辞があつた。

「ありがたえ、起きていますぜ」

後ろの連れへささやいて、ガラリと仕切りを開ける。中は、土間二坪つぼに床が三畳、町印の提灯箱やら、六尺棒、帳簿、世帯道具の類まであつて、一人のおやじが寂じやくねん然ぜんと構かまえている。

「何だえ、今ごろに」

錫すずの酒瓶ちろりを机こにのせて、寢酒なを舐なめていた会所守かいしよもりの久きゆう六ろくは、入いつてきたのをジロリと眺ながめて、

「旅の人だね」

「へい、実は淀よどの仕舞船しまいぶねで、木村堤づつみへ着きいたは四刻頃よつでしたが、忘れ物わすれものをしたために、問屋もんやで思おもわぬ暇ひまを潰つぶしましたんで」

「ははあ、そこで何かい、どこの旅籠はたごでも泊めてくれないという苦情だろう」

「自身じしんぼん番の証あかしふだ札あかしふだを見せろとか、四刻よつきやく客はお断りですとか、今日、大阪入りの初しよツばなから、木戸を突かれ通しじやございませんか」

「当り前まちおきてだ、町掟まちおきても心得なしに」

「叱言こゝろごとを伺こゝろごといに来た訳じやござんせん。恐れいりますが、その宿やど札どふだと、事のついでに、お心当りの旅籠を一つ……」

「いいとも、宿をさしても上げるが……」と久六、少し役目の形になつて、二人の風態ふうたいを見直した。

「一応聞きますが、お住居は？」

「江戸浅草の今戸いまだで、こちらは親分の唐草銀五郎からくさぎんごろう、わっしは待乳つちたいちの多市こぶんという乾分こぶんで」

「ああ、博奕ばくち打ちだな」

「どう致しまして、立派な渡世とせいかんぼん看板かんばんがあります。大名屋敷で使う唐草瓦からくさがわらの窯元かまもとで、自然、部屋の者も多いところから、半分はまアそのほうにや違いありませんが」

「何をいつてるんだ」側わきから、銀五郎が押し退のけて、多市に代つた。

「しやべらせておくと、きりのねえ奴で恐れ入ります。殊ことには夜や中ちゆう、とんだお手数てかずを」

「イヤ、どう致して」見ると、若いが地味づくりの男、落ちつき

もあるし人品じんぴんも立派だ。

「そこで、も一ツ、行く先だけを伺いましょう」

久六も、グツと丁寧ていねいに改まる。

「あて的は四国、阿波あわの御領ごりょうへ渡ります」

「阿波へ？ フーン」少しむずかしい顔をして、

「蜂須賀家はちすかけでは、十年程前から、ばかに他領者たりようものの入国を嫌つて、

よほどの御用筋ごようすじか、御家中ごかちゆうの手引でもなけりや、滅多めったに城下

へ入れないという話だが」

「でも、是非の用向きでござりますから」

「そうですか。イヤ、わしがそれまで糺ただすのは筋目違い。います

ぐ宿証やどしょうを上げますから、それを持って大川南の渡辺わたべすじ、土

筆屋和平へお泊りなさい」と、こより紙を一枚剥いで、スラスラと筆をつけだす。

その時その間、何とも怪しい女の影。会所の横の井戸側にしやがみ込んで、ジツと聞き耳をたてていた。

白い横顔、闇にツイと立ったかと思うと、

「どうも、ありがとうございます」

中の声と一緒に戸が開いて、さツと明りが流れて来た。途端に、のしお頭巾の女の魔魅、すばやく姿を消している。

「あ、お待ちなさい——」会所守の久六は何思ったか、あわてて、出かける二人を呼び止めた。

「え、何ですツて？」

唐草銀五郎に乾分こぶんの多市、出足を呼び返されて何気なくふりかえると、

「気をつけて行くことだぜ、物騒な刻限こくげんだ」

会所の久六が、手真似てまねでバツサリ、いやに小声で注意をする。

「フン、辻斬りかあ」多市が鼻ツ先で受けると、

「これ、冗談じょうだんに聞きなさんな」と、久六は叱るように、「今

し方もここへ見えた、見廻り役人の話では、刀試しじゃない物盗ものどりの侍さむらいで、しかも、每晚殺やられる手口を見ると、据物斬りの達すえものぎ者らしいというこつた」

「ご親切様……」銀五郎は丁寧えしやくに会釈えしやくをして、スタスタと先へ

歩きだした。

教えられた道すじどおり、堀川から大川河岸を西へ曲がる。所々に出水でみずの土手壊れくずや化けそうな柳の木、その闇の空に燈とうみよう明。一点、堂島開地どうじまかいちの火の見櫓ひみが、せめてこの世らしい一ツの瞬またたきであつた。

「親分」多市は、追いつくように側へ寄つて、

「自身番のおやじ奴めよけいなことを言やがったんで、何だかコウ背筋が少し寒くなつた」

「おや、てめえはさつき、フン辻斬りかアと涼しい顔をしていたじゃねえか」

「そりや、関東者の病やまいでしてね」

「出るなと思う奴やつはとかく出たがる。多市、今からてめえの腕前を頼んでおくぜ」

「鶴つる亀かめ、いい当てるといふことがあら。第一、うちの親分は至つてたのもしくねえ」

「なぜ」

「こんな時の要害に、永ながの道中、大枚の金をわつしに持たせておくんだからな」

「ばかをいえ、それほどてめえの正直を買っているんだ」

「エエ詰らねえ、明日あしたからは、少し小出しに費つかいこむこつた」無駄口を叩きながら、淀屋橋よどやばしの上にかかると、土佐堀とさぼり一帯、お蔵くら屋敷の白壁も見えだして、少しは気強い思いがある。

その二人は知らなかったが、堀川会所の蔭に潜ひそんでいた、のしお頭巾の女の影はまたいつの間にか後ろをつけて、怪しい糸を手た繰ぐつてくるのだった。

「おや？ ……」と、渡り越えた橋の袂たもとで、待乳まつちの多市、不意にギクリと足をすくめてしまった。

「親分、誰か来ますぜ、向うから」

「人の来るのに不思議はない。いい加減にしろよ、臆病者」

「だが、しっかり、目釘めくぎを湿しめしてしておくんなさいね」

「心配しんぱいするな」笑いながら、さっさと足を進めると、なるほど河岸かツぷちの闇から、チャラリ、チャラリ……と雪踏せったを摺する音。

近づいた時、眸ひとみを大きくして見ると、侍だ。はつきり姿の見え

ない筈、上下うえした黒ぞつきの着流しに、顔まで眉深まぶかなお十夜頭巾。

当時、宝曆ほうれき頃から明和めいわにかけて三都、頭巾の大流行り、男が

た女おんながた形、岡崎おかざき頭巾、露頭巾つゆ、がんだう頭巾、秀しゅうかく鶴頭巾、

お小姓こしょう頭巾、なげ頭巾、猫も杓子しやくしもこの風ふうに粹すいをこらして、

寒いばかりにする物でなくなつた。

チャラリ、チャラリと雪踏を鳴らして、今、銀五郎の左を横目
づかにすれ違つた黒縮緬くろちりめんの十夜頭巾は、五、六間けん行き過ぎて
から、そつと足の穿はき物をぬぎ、樹の根方へ押しやツた。

かなぐり捨てた羽織もフワリとその上へ——。

と思うと身を屈かがめて、双そうの眼まなこをやり過すごした闇へ——蠟色ろういろの鞞さや
は肩より高く後ろへ反そらしてスススと追すい縫がつたが音もさせな

い。

「ウム！」と据物すえものぎ斬りの腰、息を含んで、右手は固く、刀の柄つか糸かいとへ食い込んだ。

グイと前へ身をうねらせる。

斬やるな——と思えたが、銀五郎の後ろ構えを、多少手強てじわく思つたのか、そこでは抜かすにもう一、二間。

すると、場合もあろうに、すぐ足もとの土佐堀とさぼりで、ドボン！と真ツ白な水けむり、不意を食わせて凄じい水玉がかぶった。

「あッ——」と音を揚げたのは待乳の多市。そのほうよりは、後ろの死神に気がついて、

「親分ッ」と、銀五郎を突き飛ばしておいて、自分も宙を飛んで

しまった。

「ちえつ……」舌打ちして戻りかけた侍、ひよいと淀屋橋の上を仰ぐと、のしお形がたに顔を包んだ美しい女が、橋の手欄てすりに頬杖ついて、こつちへニツコリ笑ったものだ。

取って返しの勢いで、十夜頭巾の侍が、ぴたぴたと自分の影へ寄ってくるのに、橋の女は、その欄干かたに片かた肱ひじもたせて澄ましたもの。

馴れない頭巾ものと見えて、うるさそうに、解といて丸めて川の中へフワリと捨てた。——ついでに、下からさつとくる風と、頭巾くずれの鬢びんの毛を、黄楊つげの荒齒あらはでざつと梳といて、そのまま横へ差ししておく。

「女！」ズンと凄味すじこみのある声だ。

いうまでもなく今の侍、逃がしたほうの身代りに、斬らねば虫が納まるまい。

「あい、わたしのことですか？」

小褻こづまを下ろした襟えりかけ掛あだものの婀娜女はどこまでも少し笑いを含んで、夏なら涼んでいるという形だ。

「知れたこと、なんで邪魔いたした」

「邪魔をしたって？　アアそうか、今わたしが石をほうり込んだので、斬り損なつた飛ばツちりを持ってきたんですね」

「ウム、どこまでも承知でしたことだな」

「百もご承知、お前さんは、縮緬ちりめんぞツきじやいるけれど、辻斬

り稼かせぎの荒事師あらごとし——、そう知ったからこそ横よこ槍やりを入れたのさ。
悪わるかったかい」

「なんだと」

「お前まへみたいな素しろ人ろうと仕事に、あの二人はもつたいない。どこか、
河か岸しを代かえたらいいでしょう」

「ウム……、じゃてめえもあれをつけてきたのか」

「それもおまけに江戸からだよ。双す六ろくにしたって五十三次つぎ、根こん
よくここまでつけてきたところを、横よこからさらわれて埋うまるかど
うか、胸むねに手を当てて考えてごらん」

「読よめた、さては道中かた騙たりか美つ人つも局たせの」

「いいえ、これでも一本立ち、お前まへさんも稼かせ業よう人にんになるなら覚

えておおき、女^{すり}搦^み摸^{かえ}の見^つ返^なりお綱というものさ

「あつ、お綱か」

「おや、わたしを知ってるの」

おとし

「一昨年江戸へ行った時、二、三度落ち合つたことのあるお十^{じゆう}

夜^{やまごべえ}孫兵衛だ」

「まあ……」笑いまじりに寄つてきて、「それじゃ少し^{たんか}啖^か呵^がが過ぎたね、早くいつてくれりやあいいのに」

「なアに、こつちがドジを踏み過ぎている。それにしても、たいそう遠出をしてきたものだな」

「ちつと仕事が大きいのデネ」

「たしかに見込みはついているのか」

「お蔑^{さげす}みだよ、お綱さんを」

話してみると、ぞんざい口も、罪がなくって艶^{なまめ}かしくって、どこやら、国^{くにさだ}貞^{はだあい}うつしという肌^{はだ}合^あ。この美しさが、剃^{かみそり}刀の折れを指に挟^{はさ}んで働くとは、目の前にいるお十夜にも、思えば不思議な気にされる。

「いけねえ、うっかりすると魅^み入^いられそうだ」 冗^{じょうだん}談^{だん}に目をそらしたが、同時にはツとした色で、

「あ、向うから、また見廻り役人の提^{ちようちん}灯^{てい}が来るようだ。ええ、うるせえな」と舌打ちした。

「逃げるなら、私にかまわず行っておくれ」

「なに、慌^{あわ}てることはねえ、支度はあるんだから」と、お綱を手

招きして、橋の下を覗いたかと思うと、低い声で、

「三次——」と呼んだ。

返辞はなかったがその代りに、ギーと出てきた剣尖船、頬

冠りの男が黙々と動いた。

役方の提灯が来た頃には、お綱と孫兵衛をのせた剣尖船、

堀尻を南にそれて、櫓力いっぱい木津川をサツサと下つてい

る。

あがった所は住吉村、森囲いで紅がら塗の豪家、三次すなわ

ち主らしいが、何の稼業か分らない。湯殿から出て、空腹を満

たして、話していると夜が明けた。

「——お先に、今夜のお礼をいっておきますよ。わたしたち仲間

の紋切形もんきりがたで、仕事をするとその場から、パイと百里や二百里は飛びますからね——お前さんも、たまには江戸へ息抜きにおいでなさいな。本郷妻恋一丁目、門垣根もんがきねに百日紅さるすべりがあつて、插花はなの師匠の若後家と聞けばすぐ知れますよ。エエ、それがわたしの化身けしんなの」

お十夜にこういつて、お綱はその日昼いッぱい寝る。翌晩も、夜はブラリと出だして、昼寝する。なるほど、これではお嫁にならない性たち。

と思うと、四日目か、五日目。

朝風呂につかつて、厚化粧して、臙脂べにを点じて、髪も衣裳もそっくり直した見返りお綱。パチンと紺土佐こんどさの日傘を開いて、住吉

村から出て行つた。

どこへ行くのか、何を目星か、縦たてから見ても横から見ても、搦す摸もとは思えぬ品のよい御察人様。
ごりようにんさま

四天王寺の日除地ひよけち、この間までの桃畑が、掛け小屋御免ごやごめんで、道ど頓堀うとんぼりを掬すくつてきたような雑ざつ鬧とうだ。

日和ひよりはいいし、梅若葉のぼりに幟のぼりの風、木戸番は足の呼び合いに声を
 からしている。

名古屋なごちよう蝶八ものまねの物真似一座を筆頭つじのうに辻能ぶんごぶし、豊後節ぶんごぶしの立て看板。
 野天のてんをみると、江戸上りの曲のぼ独楽きよくこまに志道軒しどうけんの outlet。そうかと
 思うと、呑み棒、飴吹あめふき、ビイドロ細工、女力士と熊の角力すもうの見

世物などもある。

「さあ、いらはいいらはい。ナガサキ南京手品なんきんある。太夫さん、椿嬢ちんじよう、蓮紅嬢れんこうじようかけ合いの槍投げやりな、火を放つけて籠かご抜けやる。看板に嘘ない」

唐人ぶりが珍らしいので、この前がまた大変な人だからだった。「変つてやがる、べらぼうな入りだな、ちよツとのぞいて見ようかしら？　だが、待てよ……」

押し揉もまれながら迷つていたのは、笠を首にかけた待乳まっちの多市、片手で人を防いでいるが、片手は懐ふところ中の前を離さない。

親分の銀五郎は、今日も蜂須賀の蔵屋敷くらやしきと下屋敷しもやしきの方へおひやくどまいひやくどまい百度詣りだ。例の、阿波入りのため、便乗する関船手形せきぶねてがた、入に

国御免切手ゆうごくごめんきつて、二つを手に入れなければならぬので。

願書を出す、身元がいる、五人組証明をとられる、白洲しらすで調べをくう、大変な手数てかず。元は関船手形だけですんだ。こう厳密ではなかつた。それにはわけがある。阿波の鎖国さこく、徳川幕府の凝視ぎようし——。だから銀五郎の用があつた、押しても渡りたい密境だつた。埒らちがあくまで、多市は用なし、「たまにやブラついて来い」とおつ放されたが、懐中ふところにはちよつと重目おもめな預り物、後生ごしょうだいじ大事にかかえているので、肚はらから楽しむ気になれない。

「おつと、それどころじゃねえ」すぐ性根しょうねになつた。「この大金、もしものことがあつた日にや、お眼がねで供をしてきた正直多市たいちがどうなるんだ」とうとう南なん京きん手品あきらを諦めて歩きだした。

そして、西重門にしじゆうもんの側かわへ寄ろうとすると、楼門ろうもんの内から、ゾロゾロ吐き出されてくる参詣人の中で、

「アー」と軽い叫びがする。

ひよいと見ると、上品づくりのお嬢様。揉もみにじられた上、よろよると、のめつてきた。

「あぶねえ！」

思わず支ささえて、多市が手を出すと、ポンと日傘が来た。女の体は風鳥ふうちようのように、胸かすを掠かすツて後ろへ抜ける。

「ア、もし」

手に残された日傘をつかんで、多市が呼んだ。

女はもう五、六間。小走りに過ぎていたが、ふりかえって、二

ツコリ笑った。——そのニツコリがまたばかに絢爛けんらん、菊之丞きくのじょうの舞台顔を明りで見たよう。

「もし、これを、傘を——」

「ア」女は遠くでうなずいた。

「いいんですよ」

「あれ……」

味な気もしたがまだ解げせない。

「よかアねえ、女持ちだ、貰ったところで始末に困ら」と、身を動かした時初めて気がついた。

自分のふところから、晒木綿さらしもめんがダラリと二本はみだしている。
 二重ふたえに巻いた腹巻を、刃味はあじも凄く夕テに裂いた剃刀かみそりの切れ口。

「あ！ 畜生ッ」

逆づかみにした日傘をふつて、眼色をかえた待乳の多市は、ま
つしぐらに駈けだした。

「スリだ、スリだスリだ！」

「ちぼ！ ちぼッ！」

人の声だか自分の声だか分らない。西門にしもん唐門からもんのまわり、七
堂伽藍がらんを狂気のように走り巡った。と、出会がしらい頭に、猫門の前で、
バツタリぶつかった男が、

「おい、待ちな」と、軽く腰帯を取った。

「それどころじゃねえッ」

「まあ落ちつけよ、手配が肝腎かんじんだ、そうあがって騒いだところ

で、めつたに捕まるものじゃねえ」

「何だい、てめえは」

「これだ」ふところを覗かせた。紺房の十手がある。「目明し」と聞くと、多市は何思ったか、振りきって、また一散にそれてしまった。

「妙な奴だ、手配をしてやるといふのにズレちまった。はてな？ ……」目明しの万吉、また何か幻想を描いて、根よくそこらを歩きだした。

堂塔は淡くぼかされて、
 人がない天王寺の夕闇を、
 白い紙が舞っている。

日傘が一本落ちていた、——破れた女持ちの傘。

それを拾って、西門に立ったのが目明しの万吉で、

「ここだナ、ここで女がこう行って、弾はずみに、ポンと男へ傘をつかませたんだな。だが、何のためにだろう。アア手を空あかせて体と心のりようすき 罅ひ 隙き を狙ったのか」仕方しかた身みぶりりで、人の話と現場をしきりに考え合せている。

「とすると、こいつア上方のちぼ流でねえ、江戸の掏摸すりだ。定めし小粒でもないだろうに、盗やられた奴も変っている、何だつて俺をふりきって逃げたのか……ウーム、こいつあどうもそのほうがよつぽどネタになるかもしれねえ」

傘をほうって抜け道へ出る。堺さかい戻いりの町まち駕かご、島の内まで約束

したが、気が変つて五櫓やぐらの富十郎を一幕のぞき、ブラブラ歩いて帰つてきた。

「おや、あの男は？」と、その途中で、万吉の顔の筋がピンとした。待乳まちちの多市にまぎれなした、疲れてしよんぼりした影が、渡辺町の旅籠土筆屋はたごつくしやへスウと入った。

一息抜いたところで万吉は後ろからこつそり、

「ご免よ」と主あるじの和平に目じらせして、梯子下はしごの道具部屋にしやがみこむ。

「ふム、六日も前から泊っているのか、宿帳はこれだな、どれ：
：」ペラペラとめくつて、自分の耳みみたぶ朶をギユツとつねった。何か苦しい考え事をする時に万吉がよくやる癖だった。

「連れの、銀五郎というのは？」

「阿波へ入る用向きがあるとかで手形をとるため、毎日蜂須賀様のお役目筋へ手を廻していましたが、どうも御免切手が下りない様子で、今日は早くからお戻りでございました」

「そうか、ちよつと二階を借りてえな」

「ええ、よろしゅうございますとも」

「二番の部屋といつたつけな」裏梯子うらばしごを上がって隣り座敷へ、そつと細目の隙見すきみ、鰻うなぎなりに寝そべっている。

「多市、そう案じることとはねえ」という声は唐草銀五郎のほう。

「一晚派手にやったと思やあ三百両は安いもの、路銀は早打はやで取り寄せる。……だが、お千絵様ちえさまから頼まれた大事な手紙、ありや、

てめえが別に袷あわせえりの襟へ縫い込んでいた筈だっけな」

「さ、親分には、そういいつけられていたんですが、つい、紙入れと一緒にしておきましたので……」

「なに」初めて少し色をなして、

「じゃ、お千絵様の手紙も一緒に掏すられたのか。ウム、こいつア大弱りだ」とガツクリする。

「もし、親分……」多市はおろおろ、「今度の四国渡りに、あれをなくしちや、お千絵様のご実父が生きていたにしろはるばる来た甲斐のねえことは、ぼんくらな多市にも分っております、ドジを踏んだお詫わびに、わっしはこれから夜昼なしに江戸へ戻って、もう一度お千絵様から手紙をちようだいしてきますから、どうか、

それで虫をこらえておくんなさいまし」

「才、その元気がありや何よりのこと。じやこうしよう、実はせきぶね関船の便乗もとうとう今日で駄目になっている」

「えっ、阿波入りの御免切手は下りませんか」

「何しろ厳しい馬鹿詮議せんぎで、下手へたをするところうちの秘密をけど気取ら

れそうなんだ。そこで俺は、道を代えてさぬきざかい讚岐境から、山越えで

阿波へ入りこむつもり、一足先に多度津たどつまで延のしているから、て

めえは早速、お千絵様からもう一通貰ってきてくれ、それが今度の眼目だからな」

「そうきまつたら、わっしはすぐに飛び出すと致します」

「ま、あけ暁の早立ちとしたらよかろう」

「一時は、死んでお詫びとまで思ったところ、体を粉こにするぐら
いは、何の糸瓜へちまでもありません」氣を持ち直すと江戸者はお
先一途ず。にわかねえに元氣づいた多市、ポンポンと手を叩いて「オイ、
姐ねえさん姐さん、誰でもいいや、お急ぎの夜立ちだ、草鞋わらじに握り飯
を揃えてくんねえ」

その間に目明しの万吉、トントンと降りてきた。

「ア、お帰りで」折よく、帳場格子ちようばごうしへ投げこまれた飛脚包ひきやくづつみ
を持ちながら、和平がそこへ送りに出ると、目早く万吉ひとみが眸を光
らせて、

「何だい、今の三度屋どやは？」

「へエ、例のお客様へ届いた飛脚で」

「どれ」いや応なく取つて見ると、桐油紙ぐるみ、上に唐草銀五郎様、出し人の名は裏に小さく「行き交いの女より」としてあつた。

「お役で封を切る！」と、ぷつつり——切つた麻糸からすべり落ちたのは、印伝革の大型紙入れ、まさしく多市の掏られた品物だ。

「悪い洒落をする女だ……」と苦笑いした目明し万吉。江戸のすり気質には、ほかの盗兇にない一種の洒落気や小義理の固いところがあると聞いていたのを思い合せて、

「ははあ、その筆法かな」とうなずいた。で大急ぎに、飛脚包み

から出た紙入れをあらためてみると、案のごとく、金はなかつたが、一通の手紙が中に潜ひそんでいた。

丈夫な生紙きがみの二重封じ、しかし、その封じ目は破れていた。お綱が読んだものらしい。

——お父上様が阿波へお入り遊あそばしてから蔭膳かげぜんの日も早や十年でござります。柳りゅうえい 營えいでは隠密役おんみつやく御法則ごほつそくをふんで、十年御ご帰府きふなき父上を死亡と見なし、権現様以来の甲賀家こうがけも遂に断絶の日が近づきました——

という意味がこの手紙の書きだしで、流りゅうれい 麗れいな女の手跡しゆせきが、順ほくに解れゆくに従って、万吉の眼底異様な光を帯びてきた。

——千絵も十九となりました、男でない私は絶家ぜっけの御下命をど

うすることもできません。けれど私は、九ツの時お別れした父上様が、まだ御存命と信じられてなりません。夢にも世をお去り遊ばしたとは思えません。そこで乳母うばの兄唐草銀五郎が、この手紙を持って、命がけの阿波入りをしてくれます。もし幸いに御無事な上これがお手に入りましたら、甲賀家の断絶も僅かにその命めいみ脈やくを延ばすことができます——

ここまで読みかけると、万吉の胸が処女のように躍おどつた。彼にも足かけ十年臥薪嘗胆がしんしようたんの事件がある。それへ一縷るの曙光しよこうを見出したのだ。

「江戸で甲賀を名乗る家といえは駿河台するがだいの墨屋敷すみやしき、隠密組おんみつぐみの宗家そうけといわれる甲賀世阿弥こうがよあみだ……ウウム、その世阿弥が十年前

に阿波へ入ったきり行方不明？ こいつアいよいよ他人事ひとごとじゃあ
ない」と、眼を光らして次の文字を辿たどりかけると、トントントン
と梯子段の音。二階から、唐草銀五郎が多市を送って降りてきた。
「おや、もうお支度がおすみで……」帳場格子の前へ、主あるじの和平
や番頭も頭を並べて送りだす。万吉はいちはやく、手紙を抱えて
梯子裏はしごへ身を隠した。

「じや、気をつけて行けよ」と銀五郎の声。多市は元気よく、道ど
うちゅううちゅうぎし
中 差 をおとし菅すげ笠がさを持って、

「では親分、行つてまいります。道中はお気遣きづかいなく、やがて多た
度津どつの港で落ち合います」

土筆屋つくしやの明りを後に旅立ってしまった。と一緒
に万吉も、裏か

ら草履ぞうりを突ツかけて、溝板どぶいたの多い横丁を鼠ねずみ走みりに駈かけ抜ぬけ
ている。

「この手紙一本のために、あの男を、江戸まで引つ返させるのは、
いくら冷つめてえ目明しても少し気の毒だ。事情を話して返してやろ
う、だが、こつちの知りたいたい所も充分に聞かなくちや埋うまらねえ。
常木つねぎ先生を初ため俵わら様、ご恩こうむを蒙かぶる俺までが一生仕事の阿波の秘密
！オ、やつ、大股になつて急ぎだしたな」

町通りを行き過ぎた多市を見かけて、万吉もヒラリと土蔵かげの蔭
を離れた。手紙と交換に阿波入りの事情や甲賀世よあみ阿弥の身の上な
どを探り取ろうという了りよう簡けん。

「まだこの辺では人目に立つ、もう少し淋しい所まで歩かせて、今

夜こそ、天王寺で逃げだされたような下手へまをやらずに……」などと加減をしてゆくうちに、天満岸てんまぎしを真つすぐに、東奉行所の前を抜けて、京橋口のとまえ、八丁余りの松並木——お誂あつらえの淋しさである。

「オーイ、江戸の人」と呼びかけようとしたが、まだ逃げられる惧おそれがあるので、少しずつ万吉が追いつきだして行くと、しまつた！ 一足違いに前へ行く多市の影へ、何か、不意にキラリツと青光りの一閃せん！ 横から飛びかかつて低く流れた。

「わっつ」と突然、多市の声だ。斬やられたと見えて苦しそう、京橋堤づつみをタタタタと逃げ転まろんできた。と、その影を追い慕つて、波を泳いでくるような銀蛇ぎんだが見えた。無論業わざもの刀の切きツ尖さきである、

はツと思うと二の太刀が動いたらしく、途端に、多市は夢中になつて天満の川波めがけてザブンと躍り込んでしまった。

「ちえツ……」という舌打ちが聞こえた。闇を漂よつてくる血の香がプーンと面を衝つ。

「畜生！」万吉の眼は炯々となり、五体はブルブルツとふるえてきた。右手に何かを固くつかんで身を屈ませて行くが早いか、

「御用ツ！」とばかり一足跳び。

腕の限りヒュツと投げた方円流二丈の捕縄は、闇をあやまたず十夜頭巾の人影へクルクルと巻きついた。——しかし対手は驚かない、絡んだ縄を左に巻きつけ、静かに、

「生意気な手先め、サ、構つてやるから寄つてこい」右手の大

刀を片手にふりかぶった。

「ムツ！」と万吉、毛穴の膏を絞ったが、まるで腕が違っている、こつちで投げた捕縄は向うの武器、見る間にズルズルと魔刀の下へ引き寄せられる。

和蘭陀カルタ

辻斬り商売のお十夜孫兵衛、本名は関屋孫兵衛である。もと阿波の国川島の原土、丹石流の据物斬りに非凡な技をもち、風采もなかなか立派だが惜しむらく、女慾にかけても異常という性質がある。

阿波の原土はらしというのは、他領の郷土ごうしとも違い、蜂須賀家の祖、
 小六家政ころうくいえまさが入国の当時、諸方から、昔なじみの浪人が仕官を求
 めてウヨウヨと集まり、その際限なき浪人の処置に窮して、未開
 の山地を割りあてた。これが半農半武士に住みついて、蜂須賀名
 物の原土となり、軍陣の時は鉄砲二次の槍備えにあてられ、平時
 の格式は郷高取ごうたかとり、無論、謁見えっけんをも宥ゆるされて、慄ひょう悍かんなこと、
 武芸者の多く出ることはその特色。なかには、原土千石といわれ
 るほどの豪族もある。

その千石ほどの家柄を潰つぶして、三都諸国を流浪のあげく、この
 春頃から御番城ごばんじょうのある大阪の河岸かしすじを夜な夜な脅おびやかしている
 お十夜孫兵衛。

京橋口の松並木で、目明し万吉を子供あつかいになぶった上、
 「さ、召捕らねえのか」と嘲りながら、斬ると見せた太刀を鞘に
 納め、針金のように、ピンと張った捕縄の端を一尋手繰つてグ
 ンと引いた。

「くそウ！」と万吉は死力でこらえる。

目明し仲間でも、少しは顔を売ったかれが、捕縄を捨てて逃げ
 たといわれては男のすたりだ。——そこを狙つて孫兵衛がポンと
 放したから他愛もなく、

「あツ」と万吉がよろけ足をふんだ、と同時に、生き物のよう
 はね返つてきた縄尻が、どうする間もなくグルグルと巻きついた。

そして、縛るのが商売の目明し万吉、あべこべに孫兵衛のため

に捻じつけられ、両手両足、ギリギリ巻きにくくられてしまった。

「殺せ、殺してくれ」とかれが齒噛みはがをするのを聞き流して、暗い川面かわもをのぞいていた孫兵衛、一つ二つ軽く手を鳴らすと、いつかの晩のような約束で、三次の船がギイと寄ってきた。

「兄貴、何をバタクサしていたのよ！」と川の中から三次がいう。「目明しを一匹召捕ったのだ。住吉村へつれて行って、四、五日飼つてみようと思つてな」

「何だ、つまらねえ真似まねを……、鈴虫なら啼なきもするが、目明しなんざあ可愛らしくもねえ。いつそ川の中へ蹴転がしてしまいなせえ」

「まあいいわ、手先や同心の内幕を聞くのも慰みだし、第一お前めえ

の渡世とせのためだ。ところで三次、今夜おれはいろは茶屋で泊まるから、こいつを乗せて先に帰ってくれないか」

「いい心掛けにはなりてえものだ。お人よしの三次を放ほうつて、いろは茶屋のお品しなとたくさんふざけておいでなさい」

「妬やくなよ、明日は早く帰るから」

「まあ体だけをお大事に」

「ばかにするな、はははは」と、孫兵衛、くすぐったい笑いを残して、雪踏せったの音、チャラリ、チャラリ……と闇に消える。

その晩から、万吉は、森囲いの怪しい家、住吉村の三次の住家すみかへ監禁された。縄目を解かれてほうり上げられた所は、屋根裏を仕切ったような空部屋あきべやである。夜が明けて、鉄格子から流れこむ

光に見廻すと、太い綱ロツプ、帆車ほぐるま、海図などの船具ふなぐや鉄砲などが天井裏につまんである。

「あ！　ここは荷拔屋ぬきやの巢だな」と万吉は眼をみはった。荷拔屋というのは、御禁制の密貿易をやる輩やからのことで、年に一度か二年目ごとに、仲間で集めた御法度ごはつとの品を異国船いこくせんに売り込むのが商売。この家にいる甲比丹かびたんの三次は、すなわちその荷拔屋ぬきやの才取さいとりなのだ。

お十夜の孫兵衛に、辻斬りをすすめたのもこの三次ふところ。懐の金よりはその腰ものの刀を奪うのが目的である。当時、日本刀は荷拔屋ぬきやの一番儲もうかる品で、また一番買ひ占めにくい品でもあった。

そこで辻斬りは役人を五里霧中に迷わせ、女色の深い孫兵衛を

しているは茶屋に堪たんのう能のうさせる方法となつた。

だが万吉には、こんな者を縛つてみる気は起こらない。彼の目の前には、もツともツと大きなやまがブラ下がっている。あの手紙から暗示を得た、十年苦節の大疑獄だいきじよく、十手の先ツぽで天下を沸わかせるような功名心に燃えている。

「ええ忌いまいま々しい、何とかしてここを抜け出す工夫はねえかしら

……」

その悶もだえもいたずらに、三日とたち四日もすでに真夜中まよなかに近い

頃——。

「おや？ ……」思わず耳を澄ましていると、下の部屋からガヤガヤと大勢な人声。そして時々、ピタピタ、と何か畳を打つよう

な不思議な音がするのだった。

妙な物音？ 階下したで何が始まったのかしらと、万吉は、無駄と

は知りながら、また昨日きのうも一昨日おとといも試みた努力を、真つ暗な部屋でくり返した。

出口は錠じょうまゑ前、窓は鉄格子、半刻はんときあまりも押ししたり探つたりしているうち、隅の床板に、指が一本入るくらいな穴を見つけた。

「しめた」とも思わず、何気なく引つ掛けて持ち上げると、偶然、四角な板がポンと開いた。階下したを隔てている天井裏、そつと降りて見ると、荷拔屋ぬきやの贓品ぞうひんがだいぶ隠匿いんとくしてあつた。

そんな物には目もくれない。明りのさしている方へ、猫のようには匍はい出した。と、一段低い所に、金網張りの欄間らんまがあつて、ひよいと覗のぞくと下の部屋も人間もすツかり見える。

何をしているのかと思うと、三次を初め仲間の輩やからが、きれいな札まを撒き散らし、小判小粒の金銀を積んで、和蘭陀加留多おらんだカルタの手なぐさみをしている。

「何だ、この音か……」と馬鹿げてしまつたが、下で夢中なところを幸いに、万吉そのまま寝そべつて、一応彼らの人相をよく見覚えておくのも無駄ではなからうと考へた。

頭数は五人である。店者たなものふう風の由造よしぞう、東条隼人とうじょうはやとと呼ばれる侍、十徳じつとくの老人、為ためという若者、それに甲比丹かびたんの三次、中で

も三次は、潮焦けしおやのした皮膚に眼の鋭いところ隼はやぶさという感じがする。

「どいつもまるで血眼ちまなこだ。ウム、この分では明日あしたは疲れる、その隙に天井裏を引ツ剥はいで逃げ出すには究くつきよう 竟きやうだ」とは万吉がうなずいた腹の底。

案あんじようの定じやう、慾心しゆらばの修羅場しゆらばはなかなかやまなかつた。鶏鳴けいめいを知らず、陽ひが照りだしたのを知らず、とうとう明日あしたになつても、蠟ろうそくを継いでそこだけの夜を守り、いよいよ悪戯わるさがたけなわになる。

そのうち誰からか、きまりものの苦情が出て、何かガヤガヤもめだしたが、不意に向う側の板戸が外からガラリと開いて、度胆どきども

を抜くような太陽の光がそこから流れこむ。

「誰だ！」ぎよツとした五人の眼が、期せずして振りかえると、

「驚くなよ、お十夜だ」提げ刀さがたなになつて、孫兵衛がのつそり五日目に帰つてきた。と、その後ろからまた一人、まばゆいばかりな厚帯あつおびに振袖姿のお嬢様、玉虫色の口紅をしていう言葉はあられもなく、

「おや、とんだところをびつくりさせて悪かつたね」とそこへ来て、大の男たちにひるみもなく、小判や小粒きりの燦めく中へフワリと風を薫かおらせて坐つた。

「誰かと思つたら、お綱つなさんじゃねえか」

三次が眼をみはると後の四人も、加留多カルタの紛ふん紘ぬんを忘れて、し

ばらくはこの一輪りんの馥郁ふいくさに疲れた瞳を吸われている。

「この間の口ぶりでは、巧うまく行ったら、すぐ江戸へ舞い戻るような話だったが、すると、あの仕事はどうとう失策物しくじりものになったのか」

「どう致しまして、そんなわたしじゃありません」とお綱は笑って――。「思う通りに行つたから、ついでに上方見物としやれのめし、道頓堀の五櫓やぐらも門並のきなみのぞいて、大家たいけのお嬢様に納まりながら、昨日は富十郎芝居の役者や男衆が七、八人も取巻とりまきで、島の内の菖蒲茶屋あやめぢやや、あそこで存分に遊び飽きておりましたのさ」

「そこでバツタリおれが出会つたわけ――」とすぐ孫兵衛が話を足すと、一座の中から半はん置じようが出て、

「じゃ、兄貴も一人の筈はない、いろは茶屋のお品か誰かを連れこみで行ったのだろうが」

「お手の筋だ。しかし、売女ばいたのお品と江戸前のお綱とは芥子けしに牡丹たんほどの違いがある。すぐ片ツ方は追いついてしまつた」

「おやおや、怖れ入つた浮氣振り、じゃ昨夜ゆうべはお綱さんとよろしくあつて、見せびらかしにここへ来たという寸法か。何だかこつちは面白くもねえ」

「ところがこのお嬢様、見かけに寄らない心しんじま締りぢまで、実はおれも、見事に肱ひじを食つているのだ」

「やれ、それでこつちも、安心した」と笑いくずれている間に、お綱は細い指尖ゆびさきへ、加留多カルタの札を四、五枚取つてながめていた。

「三次さん、これはやつぱり花加留多^{はなガルタ}？」

「長崎から流行^{はや}つて来たやつさ、異国^{あつち}のものでね」

「面白^{おもしろ}そうだと、やつて見ようか」

「どうしてどうして、男同士の勝負ごと、はした金ではすまない
ぜ」

「こればかりじゃ足りないかしら？」帯の間から、手の切れそう
な百両の封金をコロリと三つ。五人は思わず膝^{しき}を退^{ひき}らせ、狡猾^{こうかつ}
な眼色を慾^ほに燃え立たせる。

天井裏では、欄間^{らんま}の金網から猫目を光らしている万吉。「いけ
ねえいけねえ、この様子じゃ、いつになったら奴らが疲れて寝る
のだからねえ……」と密^{ひそ}かに舌打ちをならししていた。

ろくに知りもしない和蘭陀加留多^{おらんだカルタ}、三次たちのいかさまに手もなく乗って、お綱は他愛なく二百両ほど負けてしまった。

「だいぶ考え込みますね、そつちの番だぜ」

「あいよ」お綱は札を指で弾いて^{はじ}「よくもこう縹緞^{きりよう}の悪い手ばかり付く……」と、一枚手から抜きかけたが、ちよつと考える様子をして、何の気もなく上眼^{うわめ}づかいに天井を見た。と、バツタリ、欄間^{すき}の隙から下を見ていた万吉の眼とぶつかった。

「おや？」と動じた顔色を見たので、万吉は慌^{あわ}てて首をすくませた。しかし今さら騒ぎだしては、かえってまずいと思つたので苦しい機智、上から皆の手が見えるのを幸いに、お綱の抜きかけて

いる札を打つなど目顔で教えてやった。

「どうしたのよ、じれってえな」

「まあ待つて……」も一度万吉のほうをチラと見ると、右のを打てという合図、とにかく、その通りにして見ると、思い通りな札が取れた。さあ、それからはトントン拍子、何しろ向うに、敵の手裏てうらを映す鏡があるのだから、思惑おもわく当らざるなしである。たちまち勝ち抜いて場ばじゆう中の金を集めてしまった。

「ああ面白かった。じゃ、これでおしまい……」お綱は涼しい顔で帯揚げを引き抜き、柵ますで量る程な金銀をザラザラと詰め込み、さツさと体に着けてしまう。

「待て、これでしまいにして堪たまるもんか」と浪人者の東条隼とうじょうはや

と人がケチをつけにかかるのを、三次がなだめて、

「まあいいさ……」とめくばせした。

「お綱さんだつて、どうせ三日や四日はご逗留^{とうりゆう}留^{りゆう}だ。な、その間にや、また幾らでも手合せができるだろうじやねえか、初心^{うぶ}な者にはとかくばかあたりという奴があるものさ……ああ眠い、何しろ今日は寝なくつちやあ……」

へトへトになつて五人がそこへ手枕で転がると、不意に立ち上がったお十夜孫兵衛、いきなり踏込みの押入を開けて、その段から天井裏へ跳び上がり、目明し万吉の襟^{えり}がみをつかんで下へ引き摺^ずり降ろした。

「や、この岡^{おか}つ引^{びき}め、どうしてあんな所へ出てきやがったんだ！」

総立ちになつて騒ぎだしたが、まさか、この男がお綱に勝たせたこととは夢にも思いつかない。ただ岡つ引を憎む凶暴性が^{ぼつぜ}勃然と彼を取りまいたのだ。

「兄貴——」と三次はお十夜の顔を見て「つまらねえ者を引つ張り込んだので、世話がやけてしようがねえ、一体こいつをどうする気だ」

「おれもすっかり忘れていた。ところが、今ひよいと^{らんま}欄間を見たら、金網の蔭に動いていやがったので引き摺り降ろしたのだが……野郎、逃げだす隙を^{すき}狙っていたに違いない」

「面倒くせえし、逃げられでもした日には^{やぶへび}藪蛇だから、早く片を付けちまっちゃどうだ」

「うん、それじゃ一つ庭先で、たんせきりゆう丹石流の据物すえものぎ斬りを見せてやろうか。おい、手を貸せ！」

寄つてたかつて、腕や襟えりがみを引つつかみ、ズルズルと万吉を庭へ曳出ひきだした。椎しいの大木、その根へ荒縄で縛りつけ、三次が棒切れでピシピシと撲りなぐつける。

「さ、ぬかせ、てめえはお十夜の兄貴へむかつて、只一人で御用呼ばわりしたくらいだから、この荷拔屋仲間ぬきやを嗅ぎかつけていたに違いねえ。奉行所でも知ってるのだろう、なに、知らねえことがあるものか。さッ、てめえの相棒は誰と誰か、手入れをするしめし合せもあつたらう！ 野郎！ いわねえところだぞ！」ピシリツ、ピシリツと皮肉ひにくを破る鞭むちの苦痛を万吉じつとこらえている。しか

しその苦痛よりは、最後の一秒間まで、何とか助かる工夫はないかと悶もだえた。ここで自分が助からねば、せつかく握った大事件の曙しよこう光、再び無明むみょうに帰して、常木先生も俵様たわらも終生社会の侮蔑ぶべつに包まれて、不遇の闇に生涯を送らなければなるまい。——と思えばいよいよ命が惜しい。

「駄目だ、こいつア！」三次は棒切れを投げて、「骨を折って口を開あかせたところで、大したこともなさそうだ」と孫兵衛だんとの断と刀うを催促する。お綱だけは、何だか可哀そうに思えた。

「助けておあげな……」おとなしく口を入れた。

「一人や半分の目明しを殺したところで、大びらに悪事ができるわけじゃなし……ね、皆さん、後生だから助けておやりよ」

「とんでもねえこった！」三次が首を振った。

「こいつを返しや、俺たちの根城ねしろが分る、すぐ御用提灯ちようちんの鈴なりで、逆襲さかよせのくるのは知れている。兄貴、早く殺やつてしまわねえととんだことになるぜ」

「うん！」とその注意にうなずいた孫兵衛は、血脂ちあぶらは古く鈍にえの色は生新なましい、そぼろ助すけひろ広の一刀をギリりと抜いて鞆さやを縁側しづくへ残し、右手めでの雫しづくの垂れそうなのを引っさげて、しずしずと椎しいの下へ歩みだした。

てんまろうにん
天満浪人

役目不心得につきお咎とがめ——という不名誉な譴責けんせきのもとに、退た役いやく同様な身の七年間、鳩を飼はとつて、鳩を相手に暮らしてきた同心こころである。

姓は俵たわら、名は一八郎、三十四、五の男盛さかり、九条村の閑宅かんとくにこもつて以来、鳩使いとなりすまし、京の比叡ひえい、飾磨しかまの浜、遠くは丹波あたりまで出かけて、手飼てがいの鳩を放して自在に馴らしている。

のみならず俵同心、近頃ではこの鳩を、わが分身のごとく操あやつり、腹心の人、常木つねきこうざん鴻山こうざんの所へ文使ふみづかいさせたり、万吉を呼びにやったり、妹の所へ飛ばせたりする。

妹はお鈴という美人、身元を隠して、かなり前から、安治川岸

の蜂須賀阿波守、はちすかあわのかみその下屋敷へ住み込んでいる。何の手段か、何の便りを頻々ひんぴんと交かわしているのか、いつも密書の使者が鳩だけに、誰あつて気がつく者はないのである。

「旦那様、お鈴様から御返事が……」と今も召使の東助とうすけじい爺が、柄の小さな家鳩いえばとこぶしを拳こぶしにのせて、縁の端から一八郎の書屋しよおくを覗のぞいた。

「うむ、来たか……」待ちわびていたらしい一八郎はすぐ小鳩の足の蝶結びを解いて、庭の巣箱へパツと放し、机の前に戻つて、その雁皮紙がんびしの皺しわをのばした。

「東助……」読み終つて嬉しとうすけそうに、

「いよいよ、阿波守が帰国の時、お鈴も供に加えられて、徳島城

の奥勤めに移りそうじゃ」

「おお、それはよいご都合でござります。したが、そうなりますと使いの鳩も、あの鳴門なるとの海を越えて行き来せねばなりません」

「自信がある。あれくらいな距離は何でもない。どうじゃ爺じい、これほど自在に鳩を使う者も、またここに着眼した者も、一八郎をおいて余人にはあるまいが」例によつて、そろそろ鳩談義の味増が出そうな口ぶり。

「へへへへ」毎度のことなので、東助もツイ笑つてしまった。

「折角のご自慢でいらつしやいますが、この老爺おやしは、種を存じておりますので、実は余り感服いたしませぬ」

「ばかなことを、種なんぞと、誰に聞いた」

「天満てんまのお屋敷で伺いましたので。はい、常木様がおつしやいませした。伝書鳩を古く使ったのはたしか唐からの張九齡ちやうれいが元祖じや、一八郎が初めではないと」

「これはいかん、さようなことをおつしやつたか」

「はい、虫蝕むしくいぼん本の『八閩通志びんつうし』、『還家抄かんけしやう』などと申す書にもいろいろ載のっているそうでござります」

「あははははは、もうよい、いうないうな」

「いつも旦那様の天狗てんぐ講釈こうしゃくにあてられておりますので、その鬱憤うつぶんによく伺おとっておきましたので……」主従、笑いに紛まぎれている門かどへ、女客にょきゃくの訪おとないがする。東助が出てみると、目明し万吉まなびの女房にようばうのお吉きちであつた。何か心配事がありそうに、悄しおしお々と通され

て一八郎の前へ坐つた。

「いかがいたした、たいそう沈んでいるではないか」

「はい」お吉は、ふだん世話になりがちな礼を述べて、「実は旦那様、万吉が、今日で五日も宅へ帰りませぬ。このところ、御用なしだといつていたのに、一体どうしたものでございましょう」

「ふうム……」と聞いていたが機嫌が悪い。

「よろしくない心配だな。目明しの居所知らず、または岡ツ引の起き抜け千里などと申して、職業がら是非ないことだ。それを四日や五日帰らぬとて、すぐ女房が妬やくようでは、万吉の十手が錆さびるというものだ」

一八郎は叱つたが、だんだんに、お吉が話すところを聞くと、

どうも叱つたほうが少し無理らしい。

きようばしぐち

京橋口で、万吉の名が彫つてある十手を拾つて、届けてく

れた者がある。その前夜、土筆屋で見かけたという者もあるので

訊きき糺ただすと、江戸の客をつけて行つたという話。また、その客の

連れ唐草銀五郎という者も、多度津へ立つた後なので、何の事件か皆目知れず、前後の事情、どうも万吉の凶事ではないかという

——お吉の心配なのであつた。

「なるほど——」一八郎の顔色も少し怪しくなつた。

「ふう……：：：～
待つがよい」

お吉を帰すと、彼はやがて、選りすぐつた小鳩を一羽ふところ

に入れ、初夏はつなつの陽がかがやかしい青田や梨の木畑の道を急いで、異人墓いじんばかの丘へ登つて行つた。

異人墓の丘に立つて、汗を拭ふいた一八郎。

「うむ、いいな……」思ひとみわず眸よもを四方へ馳はせた。紺こんじよう青しょうの海遠

く、淡路の島影は夢のよう。すぐ近くには川口の濤みおつくし標あおあ、青あおあ嵐らしの吹く住吉道すみやしみちを日傘の色も動いて行く。

そこで、パツと鳩を放した――。

鳩は一八郎の意志をうけたように舞あい揚あがった。手を翳かざして見ていると、初めは御城番ごじようばんの方へ直線こにツ―と行つたが弧を描いて南へ返り、ハタハタと住吉村の方角へ飛び去つた。

すると、異人墓の蔭で不意に声があつた。

「あつ、伝書鳩——」

「俵殿ではないか」ひよいと見ると、荒目の編笠に薄羽織、風采のよい四十前後の武士。

「おお、これは常木先生」

「相変らず御熱心だの」と笠の裡かきうちで微笑した。

「いや、何……」と一八郎は鳩の行方ゆくえを気にしながら「実は先生、

万吉の身に凶きょうへん変まが起りましたな」

「ほう、それは心こころもと許ゆるない……」

腰を下ろした侍は、元天満てんまよりき与力の常木こうざん鴻山、在役当時の上役

で、同じ時に、同じけんせき譴責けんせきをうけた人。以来不遇の隠士いんし同士、互

に心をあわせて、密かにある大事をのぞんでいる仲であった。

二人の失脚は、ほうれきへん宝曆変の折だった。——明和二年の今から数えて八年前、京都で起こったあの騒動——たけのうちしきぶ竹内式部の密謀が破れ、公卿くげ十七家の閉門を見、式部は遠流おんる、門人ことごとく罪科ざいかになつて解決した——あの事件の時、天満組てんまぐみの常木鴻山も俵同たわらう心もすばらしい活躍をした。

が、その後が悪かった。余り二人の手腕が切れ過ぎて禍わざわいとなつた。

「これは根が深いぞ——」と初め鴻山は考えたのである。

「倒幕の大事などが、ちようしゆう長袖のの神学者や、公卿くげばかりで謀はかれるものではない。黒幕がある！ 傀儡かいらいし師がある！ たしかにある

！」と固く信じた。

「あるとすれば——どこの大名であろう？　無論西国さいこく、一体西

国大名は、機おりさえあれば風雲に動きやすい。島津か、毛利か。いやことによるともつと意外な……」鴻山の苦心へ、俵同心や万吉も、骨身を惜しまずいろいろな機密を探つて耳に入れた。

阿波二十五万石の蜂須賀重喜しげよし、まだ若くはあるが英邁えいまいな氣質、うちに勤王の思想を包み、家士かしの研学けんがくりゆうぶ隆武おこたにも怠りがない、——前さきには式部を密かに招いて説を聞き、領土の浜では軍船を仕立てて陣練じんねりの稽古けいこをしたともいう噂である。

「ウーム、黒幕は海の向うだ」鴻山は意を得たりとした。「阿波は由来謎なぞの国だ。金があつて武力が精鋭、そして、秘密を包むに

都合のいい国、一朝淡路あわじを足がかりとして大阪をはか図り、京へ根を張る時は、西国大名と呼応して屈強な立場——捨ておいては一大事である」

すぐ意見を書いて城代酒井さかいこう侯へ差しだした。

ところが、御城番、町奉行、所司代しよしだい誰あつて耳を藉かす者なく、

彼のじょうしよ上書は嘲笑の種となつて突ツ返された。つまり、どれも

これも事ことなか勿れ主義。

「そんな馬鹿うしげた後だてろ楯にはなりません。阿波は松平の御おんせい姓を賜わり、代々よよ、將軍のお名の一字をいただくほどな家筋じゃ」

「だからいけない！」鴻山はいよいよ説じを持した。「それほど、

阿波の力が大きいのだ、將軍家でも怖おそれているのだ」と、周囲に

構わず、俵同心に探りの手を入れさせた。が、その活動に移らぬうちに、二人は譴責けんせき！ 出仕に及ばず——という形式をとられた。

「二人とも天狗てんぐが過ぎた」「名声に酔って、いわゆる妄想もうそうきよう狂きやうになつたのだらう」などと喧やかましい周囲の侮ぶせい声せいに耳みみを掩おほつて、鴻山と一八郎はなおその信念はまげず、それから七年、ただ阿波の内情を探ることにのみ腐心ふしんしてきた。

重宝ちやうほうなのは目明し万吉。

彼は身分が軽いので、咎とがめもなく、今でも東奉行付きで、十手をとっているところから、何か阿波のことを聞きこむとすぐ知らせてくる。今では二人にとってまたなき忠実もの者だ。

その万吉が行方知れず——常木鴻山も驚いた。一八郎は、今放した鳩を手づるに、彼の居所を突きとめて見せるといった。

「では、及ばずながらこのほうも手を貸そう」と鴻山は立ち上がったが、何か思いだしてスタスタと異人墓の蔭へ戻って行った。

そこに一人の連れがいた。武士ともつかず医者ともつかぬ風采の男。墓の蘭字らんじや形を写していたが、鴻山から事情を話され、後について一八郎の側へやって来た。

「わしは江戸の平賀源内ひらがげんない、伝書鳩は面白うござるな、ご迷惑でも一つご同伴願いたい」

また一人の加勢が殖ふえて三人連れ、異人墓の丘を下りて、鳩の飛んだ方角へ急ぎだした。

一方、住吉村の木立の中、荷拔屋仲間ぬきやの隠れ屋敷。

そぼろ助広の大刀が、椎しいの樹の下——万吉の頭の上に——きらりと三尺の虹を描かいた。

真ツ二つ！ 孫兵衛の息と手が、さつと放たれようとした刹那せつな、甲比丹かびたんの三次やほかの者たちと、こつちの縁側にいた見返りお綱つなが、

「そんな据物すえもの斬りがあるものか！」

駈かけだして行つて、お十夜の手を遮さへぎつてしまった。

「危ねえツ、何を邪魔するんだ」

「だって、罪じゃあないか」咎とがめるような美しい眼、「据物斬り

を見せるといったくせに、自由の利きかない人間をバツサリなんぞは曲まががない」

「いやにお前は庇かばい立てするな」

「それや悪党にだつて、少しぐらいの慈悲心はあろうじやないかね、縄を解いて、暴れさせて、対むかつてくるところを斬つたらどう？」

「どつちにしたつて同じことだ」

「いいえ、ただね、私の気がすむんだよ。見ても見いいし、罪でないような気がするだけさ」

「いつているうちに帯から抜いた懐かいけん剣！ 万吉の縄目をぷつぷつ切つて、

「さ、これを貸してあげるから、お前さんも男らしく……」と懐劍の柄つかを握らせてやった。

和蘭陀加留多おらんだカルタの返礼だよ——という眼でじつと渡してやる。

「ありがとう！」

逆手さかてにとつて万吉がパツと立つた。お綱が蝶のように飛び離れると一緒に、三次、隼人はやと、為ためなども、腰を立てて凶猛な気配りになる。

「なるほど、このほうが気合いがのるわえ！」

お十夜の声！ 椎の下からスルスルと延びてくる助広の無気味さ。刀の柄つかい糸いとを捻よじりぎみに、右手めでは深く左手ゆんでは浅く、刀背みねに蛇だ眼がんをすえて寄る平入身ひらいりみ——。

万吉は膏あぶらの汗。ジリ、ジリ……と一寸づまりに後あと退とつた。

「どうせ命はねえ！」

覚悟はしている。だが、あの妙な心意気の女に、懐ふところの紙入れ——大事な手紙の入っている——あれだけを頼んで俵はたけ様に届つけたいが、と思つて気を配つたが、素早いお綱はその時はもうこの庭に見えなかつた。

「ええ、やぶれかぶれだツ」と、万吉が踏み止まつて、怖ろしい眼を対あいて手に射つけた。ピタと孫兵衛の切きツ尖さきも止まる……。

その時、風ではない——椎しいの若葉にバタバタという大きな羽ばたき。一羽の鳩だ。

「あつ、俺を探しにきた！」

と万吉の眼が上へそれるや否、孫兵衛の刃がさつと斜めに走つた。切ツ尖に胸を掠られて、万吉はドンと仰向けになつたが、はね返つて栗鼠のように木の幹を楯にとつた。

「野郎！」お十夜の跳びかかったのも真に迅い。白刃と人、渦になつてグルグル木の幹を巡り廻つた。と、屋根から斜めに落ちてきた今の小鳩、何かに狂いだしたように、そぼろ助広の切つ尖に飛びまどつて離れない——。

「万吉、しつかりいたせ！」

塀の上に、突然な声があつた。

「あつ、旦那」

「一八郎が参つたぞツ、もう大丈夫」

ポンと飛び降りてきた倭同心、力をあわせてお十夜の側面へかかる。わつと、総立ちになったのは甲比丹の三次をはじめ荷拔屋の誰彼、脇差を閃かす者、戸惑う者、かけこんで錆鎗を押取る者。据物斬りの見物が、意外な血をみずから見ることに
りだした。

するとまた、木戸を蹴破つてきた一人の助太刀、常木鴻山である。常木流の捕縄術は自他共にゆるす名人。しかし今は捕るより斬れの場合として、抜くやまたたく由造を薙ぎ、浪人者の隼人の腕を斬り落した。

そればかりか、塀の外では、

「御用ツ、御用ツ」とさかなかけ声。いよいよ輩は度を失い、

孫兵衛一人の悪戦加わるばかりである。

だが、役付やくづきでない鴻山や一八郎が、かく早速な捕手とりてを連れてきたのも不審——と外を見ると、捕手はいない、すぐ前の木立の蔭に、たツた一人の男が腰をかけている。

細い丁ちよんまげ鬚あご、細い顎あご。異人墓から同行してきた平賀源内である。医者で作者で侍さむらいで商法家だが、一つ武芸者ではなかりし源内、快刀乱麻かいとうらんまの手伝いはできないので、時々そこから、

「御用ツ、御用ツ」

といつては、支那扇子せんすで顎あごを煽あおいでいる。

荷拔屋ぬきや屋敷へ真昼の不意を襲った剣戟けんげきの旋風つむじは、一瞬の間に

去つてしまった。囲いの中に、喚きおめや雑音の騒動がハタとやむと、後はまたもとに返つてソヨともしない森の静けさ——住吉村の奥らしく、ジーツと気け懶いだる蟬せみ時し雨ぐれ。

「源内どの！ 源内殿！」

彼方あなたで呼ぶ声に腰を上げて、平賀源内、唐人扇子せんすをパチリとつ

ぼめて帯へ差し、

「ははあ、片づいたとみえるな」

踏み壊ふこわされた木戸口から、大急ぎに飛び込んだ。

見ると、庭には点々と血汐あとの痕、戸障子は八方へ無残に倒れ、

甲比丹かびたんの三次と荷拔屋の手下二人は、常木鴻山が後ろうし手に縛くくし上げあげてしまった様子。

「やられましたな、常木先生、いやどうも大変な血汐で……」と源内は酸鼻さんびに顔をしかめながら、気味悪そうに、拾い歩きをして入ってきた。

「そして、俵殿はどうなさいましたか」

「お十夜と申す奴だけが、素早く逃げ失せたので、後を追って駆けだしました。ところで、源内殿にはお気の毒ながら、そこに倒れている目明し万吉、ちよつと手当をしてやって下さるまいか」

「承知しました。薬餌やくじのほうなら源内のお手の物……オ、これや気絶している、数日の疲労があるところへ、ドツと助勢が見えたので、一時に心が弛ゆるんだのであろう」

井水いみずを汲んで口へふくませ、自家の薬丹やくたんを印籠いんろうから取り出

しなどしている間に、鴻山は、縛し上げた三次や二人の手下を引つ立て、一室にほうりこんで嚴重にとざしてしまった。

そこへ、俵一八郎が、息を弾ませて帰ってきた。「残念！」と流るる汗を拭きもあえず、常木鴻山の前へ片膝をついて、「森端れまで追ツかけましたが、孫兵衛めは、腕の鋭いばかりでなく、怖ろしい敏捷なやつ、たちまち姿を見失つて、何とも無念に存じます」

「いやいや、万吉さえ救えてみれば、逃げた奴は取るに足らんと、鴻山は一方を振りかえつて「源内殿、容子はどうぞござるな？」

「気がつきましたわい、もうご心配は要らぬ。これ万吉、万吉！」

「ああ……」呻きだした万吉、ムツクリ起きて、きよとんとあたりを見廻していたが、鴻山と一八郎の姿を眸ひとみに映すと、飛びつくように摺すり寄った。

「あ、ありがとうございます……ありがとうございます。旦那方がこなけりやこの万吉は、もう疾とつくに椎しいの木の肥こやしになっているところでした」

ペタリと両手をついたさま、心しんから嬉しそうである。

「気分はどうじゃ、大儀ではないか」

「なアに大丈夫です、これしきのことにへコたれちや、目明しという肩書に面目がありやしません。そうだ！ 何より先にお両ふたか方たへお目にかきたい品があります」胴巻の奥から、おののく手

につかみ出したのは、土筆屋つくしの店でふと手に入れた例の手紙である。

「万吉の命は奪とられても、こいつばかりはお渡し申したいと、この四、五日どんなにもがいたことか知れません。江戸表のお千絵という娘から、阿波へ入り込んだ甲賀世阿弥こうがよあみへ宛てた手紙、まあとにかく、中をござらんすツて下さいまし」

「なに、甲賀世阿弥？」

名を聞いただけで、鴻山の面おもてがサツと変る。一八郎もきつとなつて繰りひろげられた手紙の側そばから、じつと息をひそめて黙読した。

宝曆ほうれきへん変の前後、鴻山と一八郎が、公卿くげの背後に阿波あり、式

部や山やま県が大た貳だいになどの陰謀の黒幕に蜂須賀あり、と叫んでも、當時誰あつて耳を藉かす者もなかつたが、ひとり、大府だifu甲賀組の隠密に、同じ炯けい眼がんの士があつて、单身阿波へ入り込んだという噂――またそれが、甲賀世阿弥ということも、ほのかに聞いていたので、二人は今なおその名が深く脳裏のうりにあつた。

「ウム、不思議なものが手に入った！」読み行くうちに二人の表情、驚異となり、歓喜となり、怪訝けげんとなり、また感激うぐるに潤む眼となつた。

「こりや、お千絵という婦人に会えば、なおも詳しいことがある。世阿弥その後の消息、彼の目的、また幕府の御意向もほぼ知れよう」

「鴻山様、拙者万吉を召し連れまして、すぐ江戸表へ下向いたしまししょう」

「おお、其許そこもとと万吉が、甲賀家を訪れ、何かの実相を見てきてくれれば何よりじゃ。さすれば鴻山こうざんも、その間に甲比丹かびたんの三次や荷拔屋ぬきやの手下どもをさとして、阿波へ渡る秘密船を仕立てさせ、万事の手筈ととのを調べておくであろう」

策謀によき荷拔屋の巢は、天満浪人てんまが入れ代つて、常木鴻山を中心に、その日は密ひそかな謀しめし合せに暮れて行つた。

ひとよぎり
一節切

おうみなま
近江訛りの蚊帳売りや、懶い稽古三味の音が絶えて、ここや
かしこ、玉の諸肌もろはだを押し脱ぐ女が、牡丹刷毛ぼたんばけから涼風すずかぜを薫かおら
せると、柳隠れえんじいろにいろは茶屋四十八軒、立慶河岸りっけいがしの水に影を映うつし
ていつせいに臙脂色えんじいろの灯が入る。

舟では音締ねじめの撥ばちの冴え、どこかを流す虚無僧ぼろんじの尺八たけの呂律りよりつも
野暮ではない。

「どうしたのだろう由造よしぞうは？ 今日で四日目、まだ帰つてきや
しない……」

お米よねはひとりでじれツたそう。

浜納屋はまなやづくりのいろは茶屋が、軒並のきなみの水引暖簾のれんに、白粉おしろいの
香を競わせている中に、ここの川かわ長ちやうだけは、奥行のある川魚

料理の門構え。

櫛子れんじの下へ涼み台を持ち出して川長の一人娘、お米の待つのは誰であろうか。恋とすれば、よすぎる縹きりよう緞が心にくくもある。

「もう便りがありそうなものだけれど……」

軽く舌打ちしていると、通りすがりの者が振りかえつた。

「おや、お米さん、宵の内から待ち人まですかえ？」

「ええ、待つて待つて待ち抜いているのですよ」

「才才辛気しんき、お暑いのにご馳走様」

鬢びんだら盥いに、濡れ手拭を持ち添えたいろは茶屋のお品は、思い

きりの抜き衣紋えもんにも、まだ触りさわそうな鬢たばを気にして、お米の側へ腰をかける。

「お風呂の帰り？　ずいぶん研みがきたてたこと」

「そりや私にだつて、見せたい人が半分ぐらひはありますからね」

「おやご免なさい。お染そめひさまつ久松、お品お十夜つて、この河岸では

評判でしたっけね。そういえばあのお十夜さん、さッぱり影が見えないようだけれど……」

「いつぞや、菖蒲あやめ見物に遠出した時、出先で妙な女に会つてから、急に素振りが變つてしまったの。ほんとに、男ほどアテにならない者はありやしない。お米さんもせいぜい人には氣をつけてお惚れなさいませよ」

「大丈夫、私には、一生涯そんな人なんかできッこないのだから……」冗談にしていた話が、妙に淋しい調子に落ちて、お米は顔

を横にそむけた、——どこかを彷徨う虚無僧の尺八、聞くとともに聞こくふうで——。

その透きとおるほど白い顔、その細そりした襟脚に気がついて、お品は、あ、うっかり悪いことをいったと心の奥で後悔する。

川長の愛娘で、縹緞のよさも優れながら、お米に一ツの

不幸がある。癆咳という病の呪い——いわゆる肺が悪かった。

躑躅の間詰の御子息へ、縹緞のぞみで貰われて、半年たたぬ

間に里へ帰され、出戻りの身をぶらぶらしているお米であった。

隠してはいるが、年はもう二十四、五。女盛りの、燃える炎を包まれて、美が冴えるほど肺が痩せ、気の尖るほど凄艶さが目立ってきた。

「お米さんの病気には、男が一番毒ですぜ」

誰かが冗談にいった言葉も、お米の悶えもたにこびりついて離れぬものの一つである。

お品もうすす知っていた。浮いた話は、この女ひとに罪だった。けれど話の途中で幕も引けずに、

「じゃ、誰をそんなにお待ちなの？」と、テレ隠しに訊いてみた。

「うちの由造よしぞう。四日前に、大事な使いに走らしたのに、まだ帰らないので腹が立ってね……」

「アア、あのぐず由さん？」あれじゃあ、色にも恋にもならないあいて対手だ。

「その由さんがどこまで行ったのですかえ？」

「実はね、この間出入りの鰻かきうなぎが大川筋で旅の者を助けてきて、離れのほうへ寝かせてあるの」

「板前さんからも聞いていた、何でも、太刀傷のある上に水浸みずづかりになって、随分容ようだい体も重いということじゃないか」

「ええ。だけれど、江戸の伝法肌でんぼうだけに気が強くて、大事な用を帯びているのだから、是非、親分を呼び返してくれ、後生だ、頼みだ、と夢むちゆう中にまでいつているのだよ」

「まあ、何だか可哀そうだね。そして、その人の親分という人は「唐草銀五郎という方で、多度津たどつへ立った街道へ、すぐ由造を追いかけさせたのだから、もう今日あたりは連れて帰ってくる時分だけだ……」

話しながら、何気なしに日本橋の方へ待ち侘びた眼をやると、
 今度こそたしかにそれ！ 早はやを打たせて四手よつで駕、三挺ちよう、エイ、ホ
 イとこつちへ棒を指してくる。

「あ、やツと帰つてきた！」思わず涼み台を離れると、トンと店みせ
 さきへ駕かごじり尻しりが下り、垂たれを揃えた三挺の四よツ手での裡うちから、
 「大儀であつた」という武家言葉。

どうやら、それとは人が違っている。

駕屋かごやに簾すだれをはねさせて、川かわ長ちようの明りへ姿を立たせたのは、
 身装みなり差さしもの、いずれもりゆうとした三人の武家揃い。

蜂須賀家のお船手ふなて、九鬼弥助くきやすけ、森啓之助もりけいのすけ。ともう一人は、や

や風采が異なつて、紺上布こんじょうふに野袴のばかまをつけ、自来也鞆じらいやぎやの大小を落した劍客肌の男——阿波本国の原土天堂一角はらしてんどういっかくであつた。

どれも馴染なじみの顔ではあるが、お米は少し当てが外はずれた淋しきで、

「いらつしやいませ」とだけですぐに案内に立つ。風通しのいい

表二階、好このましい酒器や料理が調ととのえられたところで、お米もつい

二ツ三ツ酌しやくの愛想あいそをして席にいた。

「いや、いつ見ても艶あでかだの。一つまいろうか」

「まあご冗談を……」美しいといわれることは、お米にとって、病やまいぎりに錐こを向けられるような苦痛であつた。

「しばらくの間、またそちの姿も見られなくなる。つまり今宵こよひは別べつ盃ばいじゃ、まあ一盃ひとつ受けてくれい」

「オヤ、ではお近いうちにお国元へでも？」

「ウム、殿のご帰国に従ついて渡海する筈じや。ままになるならお米よねも一緒に連れたいが……」

「嬉しゅうございますわ、森様、ほんとお連れ下さいませよ」

「はははは、真まに受けられては大変じや。知つての通り、他領の者は一步も入れぬ阿波の御領地。ましてや厳せきしいお閩船ふねへは、

どんな恋女房でも乗せては行かれぬ」

「昔は阿波のお国へも、商人あきんど衆しゆうや遍路へんろの者が、自由に往來ゆききしたそうでございますが、いつからそんな不便なことになったのでしょうか」

「さよう、もう御封地になってから七、八年。阿波の水陸二十七

関、いよいよ厳しいお固めである」

「それはまた何のためでございますか」

「何のためか、殿様のお胸、吾々の知るところでない。しかし西国のうちには、阿波以外にも他領者の入国できぬ所がある」

「すると、真しんから、そこに恋なるとしいお方があるとすれば、清きよ姫ひめのように蛇じゃになつて、あの鳴門なるとを越えなければなりませんね」

「はははは、当世女に、そんな心しん中じゆう立だては聞かぬところ、まず心配のないことじゃ」

「いいえ！」お米は熱を打ち込んで、赤い吉田団扇うちわをクルリと廻しながら「——私が恋をするとすれば、鳴門はおろか、どんな関でも、きつと渡つて見せますわ。ええ！蛇じゃにでも夜叉やしやにでもな

りますとも」

「こりや怖ろしい。してその相手は森氏うじか、天堂氏か、それともかくいう九鬼弥助やすけか」

「ホホホ、どちら様でもございませぬ。もし仮にあつたらという話——」

「何のことじゃ」笑い崩れてしまつたが、お米は自分の空想を真実にして考えこみ、天堂一角は、床柱に凭もたれて、じつと、何かに耳を澄ましていたので、二人の声はまじらなかつた。

で、はしやいだほうの者も、笑つた後をやや白けて、冷えた盃の縁ふちを舐なめていると、すぐ近くから、暁りようりよう々々、水のせせらぎに似た尺八の音階が、一座の耳へ流れてくる——。

「む、いつ聞いても悪くないのう……」さつきから耳心じしんを澄ましていた一角はひとりつふやでつ呟く。

「あの歌口は宗そうちようりゆう長流、京都寄竹派きちくはの一節切ひとよぎりじや、吹き手はさだめし虚無僧こむそうであろう」

「まあ。本当に虚無僧ぼろんじさん——」と、お米は体を手欄てすりに凭もたせて、二階から下を覗のぞきながら、

「まだお若い普化宗ふけしゆうのお方。あれ、あのように一心に吹いているのに、誰か、お鳥ちようもく目に気がつく店の者はいないのかしら……」

「どれ、拙者が喜捨きしやしてつかわそう」森啓之助が、なにがしかの小粒銀を紙入れからつかみだして、手欄てすりの方へ立ち上がった。

「森様、お包み致しましょう」お米が小菊紙を出していうと、もう幾分か酒に酔わされている啓之助、

「何の、物乞いにする投げ銭に、ご丁寧なことが要るものか」と、下を目がけて、

「虚無僧！ 銭をくれるぞ」

パラツと小粒を投げつけた。

と虚無僧は、尺八の手をやめ、肩や天蓋へ落ちてきた金には目もくれず、スツとそこを去りかけた。

ところへ、ドンと川長の前へ投げ出されたのは、道中早次の駕二つ、着くが早いか、その一挺の中から、半病人で飛び出した

由造が、

「お嬢さん！ 由造です！ ただ今帰りました」

「才由かい？」お米は二階から身を伸ばした。

「唐草の親分、やつとお連れ申して参りました」

「まあ、早かったねえ！ 今行くから待つておいで」今の尺八も客も忘れて、お米はトントントンと袂たもとを舞わして店さきへおりてくる。

「ア痛いた、ア痛たたた……」

ほとんど半身、外科げかの手当に繃ほうたい帯たいされている病人は、夏の夜の寝苦しさと、傷の激痛に呻うめきを太く、時折ときおり白い床の上に現うつつの身をもがいていた。

と——もみかえで うえこ 樅や楓の植込みを縫って飛び石伝いにカラカラと、庭下駄の音がそこへ急いで行く。すぐ後から二人の影、一人は由造、一人は今早駕を下りたばかりの唐草銀五郎である。

「多市さん、多市さん」

先に立ったお米、濡れ縁から呼びかけて中へ上がった。二間造りの別棟べつむねで、魚をかこつておく生洲いけすの水がめぐっており、板場の雑音は近いが、屋根から庭木へ掛けてある川狩かわがり使いの網の目に、色町の中とは見えぬ静かな宵の月が一輪。

「さ、親分様、どうぞこちらへ」

「ご免なすつて下さい」

脇差を取り、裾すそを払って、銀五郎もズツと入った。油薬の香が

蒸れてプーンと鼻を衝つ。

ここまで来る間に、使いの由造から、すツかり事情は聞いていたが、見れば、余りに変り果てた乾分多市の姿——銀五郎そこへ足を入れた途端に、指の尖で目がしらの露をおさえた。

幸か不幸か、待乳の多市は、お十夜の妖刀に二カ所の傷を負わされながら、川長の者に救われてここに療治をうけ、今なお氣息喘々と苦患の枕に昏睡している。

「多市さん！」お米は軽く揺すぶつて、

「寝ているの、苦しいの？——お前さんがうわごとにならないうつていた唐草親分が、枕元へ来ていますよ、え、お分りかえ」

「えつ、親分？……」多市はポツカリ眼を開いた。起き上がる

うとするのを、銀五郎がそつとおさえて、その顔を覗きこんだ。

「多市、気がついたか。俺だ、銀五郎だ……」

「おッ。親分」と、細い手を絡ませて、上眼にじつと見ていたかと思つと、その睨まぶたからポロポロと男泣きの熱い泪なみだ……。

「無理に体を動かさしちやいけねえ、じつとしていろ、もう俺が戻つてきたからには心配はない」

「親分、わつしの傷は助かりません。助かろうとも思いません……ただ心がかりだったのは、親分が先へ多度津へ渡つてしまい、わつしがこうなつたことも知らずにいると、飛んだ手違いになると思ひまして、そいつが気になつて気になつて……」

「うむ、お千絵様の手紙のことか」

「そうです。すみませんが親分、多市はもう駄目ですから、わつしに構わず、もう一度江戸表へ帰つて、お千絵様に事情を話し、誰かほかの乾分こぶんを連れて阿波へお立ちなすツて下さい」

「馬鹿をいっちゃいけねえ」

励ますつもりで銀五郎は、わざと語気を強くする。

「そんな弱気でどうするものか。てめえの気性を見込んだからこそ、今度の旅にも連れてきたのじゃねえか。それも只とは違つて、甲賀家の浮沈とお千絵様の一身にかかわる大事なお使いだ」

「そういわれると、諦あきらめている命も急に惜しくなります。だが親分……所詮しよせんこの容体じゃ助かりツこはありません」

「養生は氣の持ちよう、しつかりしてくれ。二人の旅は他国と違

つて、船路も陸も関のきびしい蜂須賀領、しかも、生死の知れぬ世阿弥様へ秘密な手紙を持って入り込もうというずいぶん危ねえ勝負ごとだ。なんでてめえのほかにもめたな者を連れて行かれるものか」

「アア助かりてえ……親分、多市はきつとこの傷を癒して、同じ死ぬなら、阿波の土を踏んでからくたばります……」眼を閉じ、唇を噛んで、負けぬ気の性根でそうはいったものの、呪われた二カ所の太刀傷ズキズキと痛みだすものごとく、青白い皮膚にはこらえる汗が膏となつて滲みでる。お米も、何とはなしに貰い泣きして、側から額の汗を拭いてやり、その手拭を由造へ渡した。

「冷たい水で、も一度しぼり直してきておくれ」

「へい」と、由造が立つて濡れ縁へ出た時である。バサツ——と窓際まどぎわの青桐あおぎりが揺すれ、人の駈け出すような寒竹かんちくのそよぎがした。

「あつ、どこの客だろう」

「何だえ、今の音は？」お米がそこに出て見ると、表二階の客、蜂須賀家の森啓之助が、妙な気振けぶりでスタスタと植込みの中へ隠れて行つた。

「御両所、この家に油断のならぬ奴ひそが潜ひそんでおりますぞ！」こう息まいたのは森啓之助。

表二階へ戻ってくるなりに、偷ぬすみ聞きした銀五郎の言葉、また

怪しむべき様子を指摘して、偵吏のごとく同僚の二人へ奥庭の仔細を告げた。

最前から、そこに浅酌していた天堂一角と九鬼弥助は、お米の後に尾いて姿を消した啓之助を、実はおかしい方へ推量しているところだったが、彼の語調や、聞き流しのならぬ事実に驚いて、思わず盃を下へおく。

「ふうん、そんな奴が隠れているのか」弥助と一角は顔見合せて、「甲賀世阿弥の名を口にし、阿波の境へ入りこもうとする奴なら、紛れもなく江戸からの廻し者じゃ」

「引つ縛つてお屋敷へ送り込み、とくと吟味をしてみる値打ちがござりましょう」

「あるとも。すぐ踏み込んで取り押えてくれよう」

「相手は町人、大事はあるまいが念のために、天堂氏も一方を見張つて下さるまいか」

「承つた——」と、やおら自来也じらいやざや鞆たもとを左にひつさげて、巨軀きよくを起こした天堂一角。九鬼弥助、森啓之助を先に立たせて、酔いざましの好場所もあらばと腕うでを扼やくして立ち上がった。

涼風すずかぜならぬ一陣の凄風せいふう、三人のひつさげ刀がたなにメラメラと赤暗ほかけい灯影ゆるを揺がした出会であい頭がしら——とんとんとと柔やわらかい女の足音、部屋の前にとまつて両手をついた。

「あの、お武家様……」見れば川長の女中である。みんな立ち上がっている血相に、ややおどおどとして遠くから、

「先ほど、お鳥目を投げておやり遊ばしたあの虚無僧が、ご挨拶を申したいから、是非二階のお武家衆の席へ通してくれと申しますが……」

「何じゃ、さっきの虚無僧があいたいと？」

「ハイ、物乞いのように銭を投げつけられては普化宗の一分が立たぬと、少し怒っているような口ぶりでございます」

「生意気な！」弥助は叩きつけるような語気で、

「そやつの挨拶とは、何かいいがかりをつけて酒代をねだるつもりであろう。押しの大い尺八乞食め、見せしめに素ツ首をぶち落してくるから召し連れて来い」ひどく癩にさわったらしく、ぐわんとどなりつけるのを森啓之助がなだめて、

「まあ九鬼氏うじ、多寡たかの知れた虚無僧風情ふぜいじゃ……」一方へ大事な出先と目顔に知らせて、女中の方へもこういった。

「これ、さような者の言い草をいちいち受けついでまいるから悪い。早く塩でも撒まいて追っ払ってしまえ」

すると、一間を越した隣り部屋、今までシンとしていた所から、ポンポンと軽く手を打つ客があつた。

「はアい」いい機しおにしてそこへ立つと、中には女の一人客、五いつい種ろむいろ六種の料理を取ってキッチンと静かに寛くつろいでいる。

打ち見たところその女客、文金の高髻たかまげに銀釵ぎんさん篋はこ迫せ、どこひいさまの姫様かお嬢様かというふうだが、けしからぬのはこのお方、膳の上に代りつきのお銚子ちようしを据すえ、粹いきな苘たばこい入れに細打ほそうちの金き

煙管んぎせる、ポンとはたいて笹色ささぎの口紅から煙をスパツとくゆらした。

「すみませんね、忙しいところを」

「どう致しまして、何ぞ御用でございますか」

「いいえ、何も別段なことじゃないんですけれど、ちようど、お隣で断わられた虚無僧ぼろんじさんに一曲きよく吹いて貰いたいと思いますの。

ご苦労だけどここへ呼び入れて下さいませんか」

「あの、ただいまの虚無僧ぼろんじを？」と、女中は一方へ気兼ねをして、すぐには応じかねていると、案あんじようの定、向うでは聞き咎とがめた九鬼弥

助が、

「皮肉な真似まねをいたす奴じゃ！」 憤ふんせい声を洩らして、食つてかか

りに来そうであつたが、

「止せ止せ、ばかばかしい」啓之助と一角が、しきりにそれを制している。

「大事の前の小事、そんな者に当り散らしているひまに、離れの奴が蜂須賀家の侍と知ったら、風を食らって逃げ失せぬとも限らぬ」

「そうじゃ、九鬼氏一刻も早く！」バラバラと裏梯子を降りて川長の庭——夜露をしのいで忍びこむと、人の気配にさとい生洲の魚がパチャツと月の輪を水にくずした。

「しッ……」と後ろを制しながら、先に立った森啓之助、生洲の小橋を匍い渡って、以前の屋の内をそツと覗くと、お米も由造も早やそこには居合せないで、ただ洩れるかすかな声。

「う、うウむ……」というのは多市の呻うめきであろう。枕元には銀五郎が、その寝顔を見まもりながら、三味さみの遠音とおねや色町の夜を外にして深い思案に落ちてゐる。

「あれだな？」

と、無言に目指しあつて、パツと家の内へ躍りこんだ九鬼弥助。枕元から立ちかける銀五郎の利腕ききうでをムズと捻ねじ上げて、

「阿波へ入りこもうとする江戸の間かんちよう 謀まう！ すなおに吾々と同行しろッ！」

凶星をさして真まつ向こうから対手あいての胆きもを挫くじきにかかった。

ぎよツとしたが銀五郎、さすがに練れている所がある。色を隠

してさあらぬ様子、取られた利腕きぎょうでを預けたままで、

「お人違いでございましょう、高野詣りの帰りの者、阿波へ入りこもうの間諜のと申すような身柄ではございませぬ」穏やかにいい澄ました。

「いうな、最前の密談を聞く者あつて、汝が甲賀世阿弥よあみの縁故の者ということは明白なのだ。言い訳があるならお下屋敷しもやしきへ参つた上に、何なりと申し述べろ！」

「や、ではあなたは蜂須賀家の」

「知れたこと、お船手組ふなてぐみの九鬼弥助だ。天下何人なんびとたるを問わず、御禁制の境を破つて阿波への入国くわだを企つる者は、引つからめて断罪たること知らぬうつけはない筈じゃ」

「しかし私にとりましては、まったく以て迷惑なお疑いでござい
ます」

「えい、この期にもまだ白を切るかつ」いわせも果てず捻じ敷い
て、素早く刀の下緒を口にくわえ、両の手頸をギリギリ巻き――
それでも銀五郎は眼を閉じてこらえていたが、不意にムツクリと
身を動かした乾分の多市が、親分の危急！ と一心に掴み寄せた
道中差、床の上から弥助を目がけてさつと突き出す。

行燈の光を流した刃の鉞、切ツ尖の来るより早く弥助の眼を
射て、「おのれ！」パツと片足に蹴返した。

さなきだに重体の多市は脾腹を衝たれてひとたまりもなく、ウ
ームと弓形にのけぞる弾み――行燈の腰へ縫った共仆れに、

一面の闇、吹ツ消された燈火は窓越しに青白い月光と代つた。

大事は破綻した、大事は破れた！ もうこれまでと臍を決めた銀五郎、いきなり利腕を振りほどき、力任せに弥助の足をトンとすくつた。

「あつ——」と不意を食つたうわずり声。畳四、五枚向うへよるけて行く隙に、つかむが早いか、スウツと抜いた脇差の鞘から走る風もろとも、唐草銀五郎真一文字にぬれ縁の外へ飛び出した。

飛び下りた影を狙つて、颯然たる一刀が月光に鳴り、斜めに腰を払つたが、ヒラツとかわして銀五郎が、無二無三の刃交を挑むと、対手はたちまち掠りをうけて後退り、耳から顎へかけて赤い一筋——森啓之助は危なくなつた。

と——銀五郎の前へ、また一本の劔つるぎがふえた。九鬼弥助の助太刀である。いや、さらにまた後ろから、彼をうかがう者がある。天堂一角の見張りであつた、まさに三方の敵にいによう圍繞された銀五郎、髪はしどろとなり汗は粘ねばく、だんだんと劔氣けんきに命を磨すり減らされてゆくものか、月をうけた顔そのものも見る見る死相に變つてくる。

無残、ここに惜しい男一匹が、使命を半なかばにしてズタ斬りとなるか、無念の鬼となろうとしているのを、世間は宵よいの絃歌げんかさわぎで、河岸を流す声こわいろや色屋の木のかしら、いろは茶屋の客でもあるうか、小憎いほどいい喉のどな豊後節ぶんごふし——。

鐔つばから外はずれた切きツ尖傷さききず、柄手つかでを朱あけに染めつつ銀五郎、もう受

身に受身を重ねてジリジリと生洲いけすの縁ふちへ追いつめられる。

機を計っていた一角は、その時自来也じらいや鞆たばの大刀をヒラリと放ち、殺気にからむ二ツの眼まなこにトロトロと熾りんの炎を立てたかと思うと、ピユツと振りかぶってただ一氣、銀五郎の後ろからズバツ——とやりかけた。

すると、カラツと妙な音がして、その大刀は途中から意外のほうへ狂ってしまった。ヤツ？ と愕おどろいて見れば、風のごとく寄つてきた白い人影、森啓之助の脾腹ひばらを当て、九鬼弥助の腰をすくつてザアーツと生洲の水へ投げつけた。

「ウウム……何奴ツ」

怒氣みなぎを漲らして構え直った天堂一角、きつと月光そその注ぐところ

を見れば、青き天蓋、銀鼠色の虚無僧衣、漆の下駄を踏み開いて、右手に取つたるは尺八に一節短い一節切の竹……。

これはただの虚無僧ではない。

一見不用意に似た尺八の構えは、いわゆる八面鉄壁な斜め青眼、たしかに一流をこなしている。ましてや天蓋の裡の息しず

かに、竹とはいえその尺八から、剣にも等しい一脈の殺気が迫ってくるどころ——どうして冴えている！ 奥行の知れない深味がある。棒振剣術や雑剣客の類ではない。

と——一角はすぐに見てとつた。

彼とても技には一かどの見識を持つ男。この虚無僧の只者でな

いことを知るとともに、ピタツと劍勢を改めて、ウカとは上段を振り下ろさずに、一方の銀五郎へ気をくばって見ると、生洲から這い上がった弥助と啓之助、二刀とうに一人の銀五郎を挟はさんで、四、五間先へ斬りまくっている。

「ようし！」一角の肚はらがきまつた。「多少の心得はあろうとも、およそは知れた虚無僧ずれ、その構えを割りつけて、天蓋あばらから肋あばらの下までただ一刀！」

漲みなぎりだした殺念がんは眼がんにあらわれてものすごい。月光を吸いきつた三尺たらず無銘のわぎ刀もの、かつ然と鏗つばな鳴りさせて天蓋の影へ斬りかかった。

「ム！」と相手も気を含んだ。尺八の穴みなビューツと鳴って、

一角の大刀を大輪おおわに払うと、払われたほうは氣を焦いらつて、きつとその切きツ尖さきを足あしもと下からずり上げる。

途端に、どこから飛んできたか一枚の小皿、闇の空から斜めに風を切つてきた。

「あつ！」とかわすと、またすぐに一枚の小さな皿、独樂こまのように吹ツ飛んできて、柄手つかでを翳かぎした一角の刀の鐔つばにあたつてパツと碎ける。

「うツ……」粉こになつた瀬戸のかけらに、目をつぶされたのか一角は、片手で顔を抑えたままバラバラとそこを離れて大声に、

「御両所ツ、今宵こよいのところは引きあげろ！」と、叫んだ後も目には手を当てて、虚無僧の入つてきた裏門から一散に外へ走りだした。

阿波の原土はらしの中でも、剛ごうの者といわれている一角が、なぜか真つ先に走ったので、九鬼も森も対あいて手を捨てて、空しく川長を飛び出してしまった。

引っさげ刀で銀五郎が、その後ろを浴びせに追いかけると、あなたに残っていた前の虚無僧は、静かに天蓋のふちを上げて、

「銀五郎、銀五郎」と呼びとめた。

「えっ？」不意に名を指されたいぶかしさに、思わずそこから振りかえると、

「そちに齒の立つ対あいて手ではない。必ずしも追つてはならぬ」

「や？ ……もし」と銀五郎、戻ってくるなり虚無僧の足もとへ片膝片手をつきながら、

「まず何よりは、今のお礼から申し上げなくつちやなりません。

したがこの私を、どうして銀五郎とご承知なのでございますか」

「知らいで何とするものか、こりや唐草……」軽く肩を叩いて、
かたえ傍の庭石へ腰をおろし、
きゆうかつ久 潤 の声なつかしげに、

「そちにも、いろいろと世話をやかせたまま、
おとし一昨年江戸表より
 姿を消した のりづきげんのじょう法月弦之丞 じゃ」

「ええっ！」
はじ弾かれたように寄りついて「法月様でございますツ
 て？ 才、弦之丞様だ、弦之丞様だ！」
あ飽かず面をおもてジツとみつ
 め、嬉しいのか悲しいのか、しばらく言葉もないのである。

天蓋を払ったその人物、
しつこく漆 黒の髪を紫の紐でくくつた切下げ、
 月のせいもあるうか色の白さは玲瓏れいろうといいたいくらい、それで

いて眉から鼻すじは凜りんとした気性の象しょう徴ちゆう。

年は若い、恋にも功名にも燃え立ちやすい青年である。何流をやったか、今見せた腕の冴さえといい、宵を流す一節切ひとよぎりの風流といい、ゆかしくもあるがあまりに美男な色虚無僧。その珠玉をつむ天蓋はおそらく仇かたきを避けるためでもなく、また宗門おきての掟おきてでもなく、旅から旅の一節切ひとよぎり、浮気につきまとう仇情あだなさけの女難除よけであろうかもしれぬ。

その時、二階欄干らんかんに寄つて、

「まあ、いい月だこと……」

眩つぶやいている女があつた。

宵から、天堂一角の隣り座敷にいて、向うで断わつた虚無僧を

呼べといい、おまけにてじやく手酌をきこしめ召していたお嬢様——それは見返りお綱つな——小皿を投げたのもお綱であった。

いい月とは何の月？ 欄らんに凭もたれたお綱の眸ひとみは、現うつのような色気に濡れて、弦之丞の腕の冴えならぬあの姿に、吸いつけられてい
るではないか。

恋の追分おいわけ

川長のお米よねはすこしどうかしている。

あの騒動のあつた翌朝、ここの裏門から、こつそりと三ツの駕
が出て行って、病人の多市も銀五郎も、またその夜泊のりづまった法

月きげんのじよう弦之丞の姿が見えなくなつてから早や四、五日。

きのうも今日も、お米は陰気なひとま一間の塗ぬりだんす筆筒に凭よりかかつて、ものに憑つかれたような、祈るような、泣きたいようなひとみ眸をジイト吊つつていた。

「弦之丞様、弦之丞様、……アア、どうしたんだろう、私の心は？ どうしてこの名がこんなにも、私の心へ焼きついてしまったのかしら。たツた一夜同じ家に夜を明かしただけの人が、こうも忘れられなくなるものかしら？ ……」

出戻りの女にあり勝ちな強烈な恋。分別もあり男の苦労も一通りは舐なめながら、押し伏せている情血の沸たぎりに駆られて、吾からとら囚われてゆくあぶない恋。

「つまらない！ アア淋しい。弦之丞様というものを見たばかりに、あの人が去った後の私の家は、まるで伽藍がらんか墓場のよう……」
軽い咳せきがこみ上げてきた。細ツそりとした肩のあたりで筆筒たんすの環かんが揺さぶれる。と、二ツ三ツ咽むせびながら、お米は小菊紙こぎくを出して口を押さえた。

離してみると、紙にじに滲にじんだ桃色の唾つば——人にきらわれる癩咳ろうがい病やみの血——。だが、彼女の目には若い血の疼うずきがそこへ出たかと見える。

「恋をするのも今のうち。どうせ私は、永いことのない命だもの！ そうだ、これから大津へ行ってみよう」

ふらふらと立ち上がった。

「だけれど? ……」パラリと落ちた足もとの櫛をみつめて、お米はまたふいと迷いもした。

「せっかく、家^{うちじゆう}中の者が心配して、人目につかないように、江戸のお方や弦之丞様を、大阪から離れた隠れ家^{かくが}へやってあるものを、私が入りなどすれば、また蜂須賀家の侍が嗅ぎつけようも知れないし……。といってこのまま弦之丞様に、逢わずにはな
おいられない」

と悶^{もだ}えているかと思うと、見えぬ糸で魂を操^{あやつ}られている人形のように、

「ええ、もうじれツたい、どうなとおなり……」ペタリと鏡台の前へ坐った。そして、繻子^{しゆすびん}鬢のくずれを手早く梳^すき返し、美^{びえん}

艶香こころや松まつ金油かねあぶらを溶ときはじめたのは、もう恋のほかなにも
もなく、一途いちずに大津とやらへ行つて、法月弦之丞いに会うつもりで
あろう。

それにしても、美男の魅力は美女の蠱惑こわくにも優まさるものか、あの
夜川長の裏庭で、月下に渦うずまいた一つの争波そうはから、虚無僧姿むなむねの若
人こころへ、劍つるぎ以外ぎに、お綱お米という二つの女の魂たままで絡からみついて
こようとは、弦之丞その人すらも知らないこと——。

「お米や……」そこへ温か味のある声がした。お米の母で、店か
ら何まで切り廻まわしている老母としよりである。小さな器うつわへ、何か赤い液
をたたえた物を持ってそろそろと入ってきた。

「お前、また今日も服のむのをお忘れだね」

「……………」答えもしないで臙脂べにをさしている、鏡の中のお米の目、やや狂きょうれん恋かたちの相がある。

「服のまなくってはいけませんよ。え、お米や」

「今日は服みたくないんだもの」

化粧のできた鏡の吾をみつめたまま、お米は見向きもしなかつた。

「そんなわがままをいつて——、自分の体を自分で大事にしない者があるものか。さ、お服のみ、せつかく今、竹やがしぼってくれたのだから……」と、口へ持つて行くばかりに、母の出した器の中の赤いもの。それは癆咳ろうがいに利きくというので、お米が人目に隠れて服のむすつぽんの生血いきちだ。

「いや、いや、今日は何だか見るのもいや……」

「何だえ、この娘は^こ。まるで駄々ツ子のように」

「だって今日は嫌なんですよ」

「お前はまア、自分の命を惜しいとは思わないのかえ？」

「ええ、なんだか惜しくなくなりましたわ」

「ばか！ 人の気も知らないで」

と睨んだ眼には女親の泪が^{なみだ}いっぱい……。

「お米さん、逢いたいという人が来ましたぜ」

何も知らないで下働きの由造、ひよいとそこへ顔を出した。

「え、誰が？」

「この間きた蜂須賀家の森啓之助様。今日は一人で、二階へ上が

つて待っています」

美艷びえんこう香の薰かおりが、そこへ忍びやかに流れてきて、

「森様、ようおいでなされました」と、お米の姿が、小座敷こざしきの萩は戸ぎとへ透すいて中へ入った。

とにかく、蜂須賀の船手ふなての衆は、店にも大事な顧客とくいであるので、いやいやながらも顔をだした。

待ちわびていたらしい森啓之助、

「お米か、ずっとこつちへ寄つてくれい」

「はい、いつぞやはまた、とんだお粗相そそうをいたしました」

「何の……」といったが啓之助、素姓すじょうのしれない虚無僧きよむそうずれに、

生洲いけすの水へ投げこまれた醜態を、お米にも見られていたかと腋わきの下から冷汗をおぼえている。で、テレ隠しに、

「いつにも増して、まばゆいばかりな化粧あがり、どこぞへ出かけるところであつたか」

訊きかれたのをいい機しおにして、

「ええ、はずせない急用がございますので……そして森様、私に御用とおつしやるのは？」

「ウム、ほかではないが」と啓之助、声と片肘かたひじを前へ落して、お米の顔を覗のぞきこむ。

「当家の離れにおつた江戸の男とあの夜の虚無僧、もはやここにはおらぬそうだが、まさか、他へ匿かくまっておくのではなからうな」

「いいえ、決してそんな……」すぐ打ち消したが、これからそこへ行こうと思ひ燃えているお米の胸。ギクリと一本釘を刺されて、どうき動悸に顔色をさわがした。

「覚えがなければそれまでのこと、深く追及するのではない。わしはただ同僚の手前、役目として一応ただ糺しにまいっただけじゃ……」優しく碎くだけた啓之助は、すくんでいるお米の手を握つてグイと側へ引きよせた。

「まだほかに一つの相談。それを謀しめしあわせたいのが今日の大事な用向きじゃ。これお米……何とそちは近いうちに、この啓之助と共に、阿波へ渡るつもりはないか」

「えつ、阿波へ？ ……」

「ウム、阿波はよいぞ阿波の国は——八重の潮うしおめぐに繞めぐらされて渭いの津つの城の白壁がある。峰や山には常春とこはるの鳥も歌おうし、そちの好きな藍あいの香かが霞かすみのようにけむっている……」

ささやきながら啓之助は、お米の肩から胸へ手を廻して、心臓の音をさぐるように、じつと心を現うつにする。ひと頃は、お米のあこがれでもあつた国、これが弦之丞というものを、知らない前のお米であつたら、そのささやきに一も二もなく魅惑みわくさされているであらう。

「どうじゃ、お米、わしと一緒に阿波へこぬか。この川長へ来はじめてから、それをどれほど思っているか、それは今さらいうまでもない。松のよい所ところ、水のよい所、そちの好きな所へ寮を建て

てやろう、どんな榮華えいがもさせてやろう」

「ですけど森様、阿波のお国は、他領の者を入れぬという、きびしい掟おきてではございせんか」

「もとよりそれに相違ないが、そちさえウンといえ、どんな手段だてでもしてみせる」

「手段といつて、あの海や関のお固めを、どうして潜くぐって行かれましよう」

「お船手組ふなてぐみのこのわしが、内から手引きすることじゃ、決してそこに抜かりはない。いよいよ殿のお渡りもあと二ふた月つき、九月の初めと決まっている」

「でも、何だか私は怖ろしゅうござります」

「なに怖ろしいことがあるものか、それにはこうして渡るのじや……」お米がもかく力をおさえて、耳へ顔をピッタリ寄せた啓之助、何か一言一言小声に口を動かしたが、それは今のお米の心を惹く何もの力もない。

「あ、誰かききます、森様、その手を離して下さいませ」

「よいか、承知であろうな」

「エエあとでよく考えておきますから……」

「何の思案があるものか、お米、そちは心の奥で、このような男の力がほしゆうはないか」

「あ……あ……森様、息がつまります。離して、離して！」落ちた筈も拾わずに、男の手をふりもぎツたお米は、ふらふらと外へ

出て、辻に見えたなしみ馴染のかごや駕屋を呼んで、

「あの駕屋さん、急いで大津の追おいわけ分まで行つて下さいな、だちんは幾らでもあげますから」

りようすだれ

両の簾を下ろしてスツと身を隠してしまった。そして駕がゆれだすとともにフラフラと軽い目まいをおぼえ、まだ残る男の匂いが気持わるくこびりついた。

「じれツたい駕屋だこと、どうしてこんなに遅いのだろう——あ
あ弦之丞様、弦之丞様」うわ上の空なお米の心は、森啓之助のちゆうげ仲
間んが、目早くそれを見つけ、この駕の後からつけてくることを
夢にも知らない。

京大阪へ別れの辻、東海道へはふりだしの大津追分、宿の家な
 みはうす黒く暮れて、馬や駕や旅人のかげも絶え、夕顔の花と打
 水に濡れた道と軒の明りがところどころ。

針屋、そろばん屋、陶器屋すえもの、その隣には鬼の念仏の絵看板、
 鉦かねと撞しゅもく木をもつて町の守り神のように立っている門かどは、大津絵
 をひさぐ室井半齋むろいはんさいの店である。

「おじさん、今晚は」

藤を持たない藤娘のようなのが不意にこういつて入ってきたの
 で、行燈あんどんと蚊やりを寄せ、夜業よなべに絵の具をなすツていた半齋、
 びつくりして鼈べっこう甲めがねぶちの眼鏡を上げた。

「おや、お前はお米じゃないか」

「ええ……」といったきりで川長のお米は、上がりかまち框へ駕づかれの身を寄せて、明りをうしろにうつむいている。

お米には叔父おじにあたる大津絵師の半齋、

「一人で来たのかい」ジロジロと姪めいの様子を見まわしていた。

「ええ、急にあの……心配になったものですから」

「何が心配に？ ……」

「この間、おじさんのほうへお願いした三人の方が、もしやまた、蜂須賀家のほうへでも知れていやしくないかと思ひまして」

「なアんだ、くだらないことを」

「だって、怪我けがをしている多市さんの容体も、いいのか悪いのか気にかかるんですもの」

「お前は、それでわざわざやって来たのかい」 姪の甘えるような言葉を、そのままの意味で聞いた半齋は、クツクツ笑いながら線描んがきの大津絵に、紅べにや黄土おうどを塗りはじめる。

「ね、おじさん、あの方たちは奥にいるの？」

「それがさ、奥へおけるようなら心配はないが、病人の傷なが癒おるまで、匿かくまつてくれというお前の方からの注文だろう、ところがこは街道筋で、わけても人目に立ちやすいから、実は関せき明み神じんの下で、時雨堂しぐれどうという一軒家が、庵あん主しゅ様さまがおるすなのを幸いに、そこを借り住まわせてあるんだよ」

「ほんとに、いろいろご苦労をかけてすみませんでした。そしてあの多市さんの傷は」

「大津から外科げかをよんだり、薬風呂をたてたりして、あの銀五郎という親分が、親身になって世話をするので、だいぶよいという話だ」

「それはよいあんばいでございました」お米は店の壁にかけてある金きん泥でいの仏画ぶつがに眸ひとみをうつしたり、袂たもとの端をいじったり、何かもじもじしていた後に、ヤツと心の奥のものを持ちだした。

「そしておじさん、あの若い虚無僧の方も、まだご一緒にいるでしょうね」

「ウウム、いるらしいよ」と半齋はんさい、無心の筆で、鬼の頭をバサリと描かいた。

「じや私、これからそこへ行ってみようかしら……」

「あしたにおし、明神様のあたりは真つ暗だからの」

「時雨堂なら、よく知っているから大丈夫でございますよ」とすぐにお米が門かどを出したので、半齋は慌あわててうしろへ声を送った。

「おいおい、お米や」

「あい」

「お前はこツちへ来て寝なくつちやいけないぜ」

「分つてますよ」ちよツと邪じゃけん慳けんに眉をひそめて、もうあらかたどざした宿しゆくを急ぎ足に、関明神の石段の下まで来た。逢坂山おうさかやまの

杉木立が魔のように見えて、ごうツと遠い風音も常なら気味の悪い筈だが、お米の今は体の疲れも何の怖さも知らないのだった。

夜気冷やかに瞬またたいている二基きの常夜燈。ささ流れを跨またいで竹ちくり

林んの小道へ入ると、水の声でもない笹ささの葉のそよぎでもない、耳覚えのある尺八の音……時雨堂から洩もれてくる。

その一節切ひとよぎりの竹の音は、吹く人のすさびでも聞く者の興でもなく、病人の苦痛を忘れさせて眠りに導くためであつたとみえて、やがて一つの曲が終ると、

「銀五郎、どうやら多市は寝たようじやの」

と、お米の胸を沸わき返す、法月のりづきげん弦之丞のじょう その人の声がする。

「いかさま、あなたの尺八を聞きながら、よく寝込んだようでございませう」答えたほうは銀五郎であつた。

細かい竹の葉がくれに、時雨堂の中がすツかり覗のぞけた。奥には

蚊帳かやが釣つつてある。白衣びやくえの法月弦之丞は唐草と向かいあつて、縁えんの端居はしいに蚊やりの櫃かやをいぶしていた。

「もう何なんどき刻ときであろうかの」と弦之丞。

「そろそろ四刻よつすぎでもございませうか」と、軒のき廂びさしから明星を仰あぎながら銀五郎。「あの山の上の一ツ灯びは、関明神のお明りでございませうな。ああどこを見てもただまつ暗、何だかわしのようながさつ者も、しみじみと旅の淋しさがこたえてきます」

「して、そちが江戸を出たのはいつごろであつた？」

「梅雨つゆへ入るとすぐでしたから、もうかれこれひとつき一月前。それが

てんから食い違ちがつて、阿波の関を越えるどころか、多市は倒れるし路銀すは掏すられるような始末。どうやら悪日あくびに立たつてきたかもし

れませぬ」

「そして、この後の策はどうするつもりじゃ」

「さ、弦之丞様、実はそのことでございますがね……」真剣になつて銀五郎、そこでしんみり声を沈めた。

外ではお米、その人恋しさに、矢も楯もなく大阪から飛んでき

ながら、弦之丞の影をちらと覗くと共に、迷いと羞恥しゆうちにつつま

れて、はしたなく声もかけられずにいるうちに、二人が密話みつわにな

りだしたので、なおさらそこを驚かす勇氣がくじけ、ドツト鳴る

血の音を感じながら、胸を抱いて籬まがきの裾へしやがんでしまった。

ひそかではあるが力をこめて、銀五郎の声がすぐつづく――。

「どじをふんだ旅の空で、あなた様にお目にかかったのは、まっ

たく甲賀世阿弥よあみ様のおひき合せ——こう銀五郎は信じております。自体こんどの阿波入りも、わっし風情ふぜいには荷の過ぎた大役です。

どうぞあなたのお力をお貸しなすつて下さいまし」

「わしに力を貸せいというか」

「へい、倒れかかっている駿河台の喬木きようぼく、甲賀のお家を支え

る力は、あなたのほかにはございません。とりわけお気の毒なのは、この世に頼る人というものをお持ちなさらぬお千絵様……。

もし弦之丞様、あのお方を、あなたは不愍ふびんとは思いませんか」

「……………」白衣びやくえの人は無言である。

見るとその眼は閉じられてあった。何か心に痛みをおぼえるのか、かすかに唇がふるえている。

「もし弦之丞様、あのお方をよもお忘れではございません。わ……わつしですら、お千絵様のお身の上を考えると、野郎のくせに、つい、なみだが出てしようがねえんです……」太い腕ぶしをグイと折つて、なみだ涙の両眼を隠したまま唐草銀五郎、しばらく顔をそむけていた。

「——だが、御不運なお千絵様にも、たつた一人あなた様という強い力がありました。ところが、その一人さえ一おとし昨年おとしから、プイと虚無僧寺へ隠れてしまい、心強くもお千絵様をすてておしまいなされました……。正直、わつしはその時うら怨んだ、ばかにしてやる、前髪立ちの頃から、恋の何のと誓っておきながら、それが世間へ知れたからつて、虚無僧寺へ隠れたあげく、江戸を去つて

しまうなんていう法はねえ、第一、おおばんがしら大番頭の若様ともある弦之丞様に似合わねえ、男らしくもねえ！ と、こう独りでどなりましたぜ」

「では何か、わしがお千絵殿をすてて、江戸から姿を隠したのを、そんなに怨うらんでおったのか」

「お怨み申しておりますとも！ 乳母に上がっているわっしの妹も、そういう薄情な若様と知らずに、お千絵様との仲をおとりもちしたのが申し訳ないと、どんなに悔くやんだか知れません。いやいや、わっしや妹の齒はぎし軋りはまだのこと、あなたに捨て残されたお千絵様の嘆きよう……アア思いだしてもお気の毒、まったく罪でございますぜ」

「……………」
 愴然たる白衣の人、口はかたく結ばれたまま、

その姿は氷のよう、その横顔は死せるようだ。

お千絵様？ お千絵様？ その名はいちいちあいくち首のように、

籬まがきのかげに潜ひそんでいたお米の胸を抉えぐってきた。そして、ここまで

描いてきた彼女の恋のまぼろしへ、見る間に悪魔のかげが踊る。

弦げん之丞のじょうの態度が、いよいよすげなく、いよいよ冷静になりゆく

くほど、銀五郎の語調はまごころをまし、熱そのものとなつてくる。

「そればかりではございません。今お千絵様のまわりには、あのお美しさと、甲賀家の財宝を狙う魔ものが、つきまとっているの

です。——それを誰かといえ、あなた様にもお心当りがござい
 ましよう、粘り強い悪智をもった旅川周馬という男を……」

「ウウム、旅川周馬？」

こう口のうちに呟きながら、初めて瞑目をみひらいた法月弦
 之丞、その涼やかな眸には、何か強い記憶のものがよみがえつて
 いた。

「はい、その周馬めでござります。恋敵のあなた様が、江戸

を去ったのを幸いにして、陰に陽に、お千絵様を責め悩ますじや
 ございせんか」

「さては、いまだ諦めておらぬとみえるな」

「手をひくどころか、いよいよ意地を曲げての横恋慕です。お

まけに手をかえ、品をかえて、甲賀家の財宝まで、おのれの物にしようという腹……太い野郎でございます」

「才才、あの周馬なら、そのくらいなことは企むたくらであろう」

「わっしは元より今戸いまどの瓦師かわらし、とてもあいつに齒は立ちませんが、またお千絵様の境遇をよそに見てもいらねえ。そこでわかにかに阿波入りを思いたち、あのお方の手紙をもつて、世阿弥様の御安否をさぐり、もし生きていたらばしめたもんだ！ 甲賀のお家に春が来る！ というので実あ飛びだしてきた訳です」

「なるほど、いつもながらの俠氣おとこぎじゃ。恋はすれど意気地もなく、天てんがい蓋の下に身をかくしている、この弦之丞などは面目ない」
「ど、どういたしました。ところが、こいつア一世の大難事。細

工はりゆうりゆうという訳にはゆきそうもねえ、まずわっしの命は鳴門の関をこえねえうちに、たいがい無いものだろうと覚悟をしました。しかし、あとあと思いやられるのはお千絵様、春にも逢わずお家の御運と共枯れに散るよりほかはねえのです……。もし弦之丞様、それやこれも察してあげて、どうぞわっしが立った後は、江戸表へお帰りなすツて、不幸なお千絵様の力となつてあげて下さいまし……。このとおり、銀五郎が両手についてお願い申します」

「……さて何としたものやら？」

「なに迷うことがございましたよ。嘘うそもけれんもないところ、お千絵様はあなたにしんから惚ほれています。顔だけ見せてあげただ

けでも、どんなにお欣よろこびかもしれませんぜ。弦之丞様、銀五郎が一生の頼みでございます、どうぞ一度あのお方へ帰つてあげて下さいまし」

これほど真摯しんしな声も、まだ相手の心を衝うつにはたらないのか、依然としてその人の横顔は冷たく、諾だくの一語を洩らさない。

が——あまりに強く衝たれたのは、その人にあらずして、さつきから籬まがきの裾すそにしゃがんでいたお米の胸。

「弦之丞様には女がある！ お千絵様という深い深い恋仲の女子おなごがあつた！ ……」

こう知つた心は、火へ水をぶツかけられたよう。くらくらとめまいがして、深い闇へつきのめされた心地に、側の竹へすがつて

しまった。

支えささになつた竹の幹は横しなに撓しなつて、むら笹ざさの葉からバラバラと溜るり璃りの雨……お米へ無残な露しぐれ。

と、その時一人の男。

そこを離れてひた走りに、闇から闇へかけ去つた。根こんよくお米をつけてきて、この時しぐれ雨堂どうを見とどけた森啓之助の仲ちゆうげん間であつたらしい。

しばらくして……。半はん刻ときほど後お米はふいと気がついた。

見ると目の前に提ちようちん灯んがある、大勢の人がとりまいてる。

その中には、叔父の半斎もいるし、店の者もきているし、銀五郎と法月弦之丞もまじつていて、何かしきりに低い声でささやきあ

っていた。

やがてお米は、ソロリと戸板へ寝かされた。

提灯が先に立つ、そして、時雨堂の明り——悲恋の灯はだんだんと遠くなり、暗い追分の宿しゆくを通つてゆく。

「あ……私はあすこで、仆れた時に血を吐いたのだ……着ものに血が……血が」

指に冷たくぬれるものを感じながら、お米は戸板の上でポツカリ星を見つめている。

「私の恋はかなわぬ恋——弦之丞様には女子おなごがある、それでなくとも、こんな病を知られてしまった……」頭だけは澄みきつていた。

阿波侍

ほこりツぽい街道すじに、これはまたきれいとも華やかともい
 いようのない行列が、今——三条口から大津の方へ、おねりで練
 つてくるのである。

桃色の日傘、あやめの絵傘、とりどりに陽へかざす麗人二十二、
 三人、派手模様の袂たもとや藤いろの袴つま、緋ひのけだしやら花色の股引ぽうちや
 ら、塗ぬりの下駄げだだの紅緒べにおの草履ぞうりだのが風にそそられて日傘の下に
 ヒラヒラと交錯こうさくし、列はさに挟はさまれた駕かご一挺ちよう、一人の美女がのつて
 いる。

どこの陽気なみだい様かとまちがえそうな人数だが、歩きながら、たえずペチャクチャとさえずるお供の方の風俗や、また、口三味線だの小唄だのを、はばかりもなくさんざめかして行く態ていからみても、この人々は、決してさような、やんごとないご連中ではない。

だが、往來ゆききの旅人や馬子や荷もちの人足などは、その華奢きやしやにして洒然しやぜんたる道中ぶりに眼をうばわれ、

「なんだろう？ ……」と、あツけにとられて見送りながら、そこでさまざまな風評が立つ。

どこかしらのお大尽だいじんが、京の芸妓げいこや色子いろこをこそツて、琵琶湖へ涼みに出かけるのだろう。いやいや、お大尽様というものは昔

から男のものに限っている、あの駕の中に納まっているのは女じゃないか。なアるほど女ですね。女も女、すてきな別嬪べっぴんさ。してみると金持の御寮人ごりょうにん様かな。もしもしばかをいつてはいけませんよ、良家の箱入娘があんなまねをして、臆面おくめんもなくこの真つ昼間あるくもんですか。イヤごもつともごもつとも、それもそうだ。それじゃア何だ？ 何だかさツぱり分りませんな。

こんな噂やげんがる目が、その行列をいつそうはしやぎ立たせて、程もなく逢坂おうさかの麓ふもと、走井はしりいの茶屋の店さきへかかると、一同はまん中の駕を下ろし、群蝶のくずれるように茶店の内や外に散らばった。

「さあ、お嬢様、お嬢様」

祇園ぎぎんあたりの仲居なかいであろうか、装なりをすかさぬ年増たちが、駕かを覗のぞいてこういった。

「——いよいよここが追分手前で、あのとおり井水いみずが吹きこぼれている走井はしりいの名物茶屋。お名残り惜しゅうございますが、お見送りもここまでといたしましょう」

「まあ、もうお別れの場所へきたの。何だかあつけない気がするね」

「なろうことなら、お江戸まで従ついてまいりとうございますが、それではお嬢様がお困りでしょうし……」

「ほんとにね、みんな京人形ならいいけれど、お米を食べる虫だから……」

「あら、あんなお憎い口を」

「じゃ、とにかくそこで休みましようか」

「さアさア、ごゆるりとお支度をなさいますせ」

頭の青い男芸者や仲居たちがすぐ駕の屋根からはきものを取つてそろえると、また一方から、ソレお扇子せんすが落ちました、ヤレお裾すそが砂へつきました、と下へもおかずに藤棚の前の座敷へお迎え申し上げる。

そこではまた、きれいな舞妓まいこや色子いろこたちが、団扇うちわの風を送るやら、吹井ふきいの水で手拭てぬぐいを冷やしてくるやら、女が女をとり巻いて、何しろ大したもて方である。

「もうたくさんたくさん——そんなに風を貰つても、江戸のお土み

産やげに持つてゆかれるわけでもなし、さアみんなも少し涼んでおくれ」

「はいはい、そんなら私たちも、しばらくここで休ましていただきましょう」

「アアそれがいい。そら、ここまで送ってきてくれたご苦労賃ですよ、仲よく拾つて遊んでおいで——」

帯の間からつかみだした金銀を舞妓まいこたちへバラバラと撒まいてやる。たいこや仲居大おおども供までキャツキャツとなつてあばきあつた——。なるほど、これなら女のお客にしても、たしかにもてるに違ちがいない。

さはあれ、このお嬢様、べつに女紀文きぶんを気どる次第でもなく、

厭味いやみな所もさらさらない。ただこうした色彩ふんいきの雰囲気につつまれているのがわけもなく面白いのであるらしい。

と、何思ったか「姐ねえさん——」と茶店の女を手招きして、お嬢様はこうおっしゃる。

「あの、あすこに灘なだの樽たるがみえるようだが、ちよつと一本つけてちようだいな……いいえ、肴さかなはべつにいらぬよ、あるなら枝豆しんしょうがか新生姜しんしょうがでも……」

一方では舞妓たちが藤棚の下へ床しょうぎ几こをもちこみ、銀のかんざしはなぐし花櫛はなぐしのきれいな首くびをあつめて、和蘭陀おらんだカルタをやりはじめていた。

お嬢様なるあやしい女、それは見返りお綱であつた。——お綱

が江戸への帰り途である。

天王寺で掬^すりとつた三百両や、和蘭陀^{おらんだ}カルタで思いがけなく勝ちぬいた金、合せて七百両あまりを、伏見や京都で男のような遊びぶりにつかいらし、まず上方を見物したし、重たい金の荷もとれたし、これでサツパリ帰ろうというのである。

そこで、京の芸子や仲居たちは、江戸蔵^{くらまえ}前の大通^{だいつう}のお嬢様が、いよいよお立ちというので、走^{はしり}井の茶屋まで見送ってきたものである。そのためにお綱はまた、つかい残りの小粒まで、洗いざらいフリ撒^まいてしまった。

だが——お綱の目でみると、人通りの多い東海道、路銀はどこにでも転がっている。

で、どこまでも触れこみ通り、金に大様おおようで通つうでお侠きやんな札差ふださしの娘——という容子ようすになりすまし、仲居を相手に、美食のあとの茶漬好み、枝豆かなにかでお別れの一合をチビチビと飲んでいると、茶店の外で一服すつていた駕かきが、

「あつ、いけねえ——」と、藤棚のほうをのぞいて声をかけた。

「舞妓まいこさん、舞妓さん。早くカルタを片づけてしまいなせえ。あいにくと向うから、お役人らしい侍が大勢こつちへ来るようですから」

「大丈夫よ……」

和蘭陀カルタに氣をとられている舞妓の組は、それに耳もかさないで、床しょうぎ几まわの周りにたかっていた。

「大丈夫じゃねえ、往来からみえる所で、そんな物をいじつていると、きつとガリを食うにきまつていら」

「だって、お菓子をかけているのも、お役人様が見たって叱りはしないわ」

「おや、またはじまつているのかえ」

お綱もこつちで苦笑したが、何か思いだしたように、

「あのカルタは、私が長崎からもつてきて、舞妓さんたちに教えたのだけれど、もし後でお咎めとがでもあるといけないから、こつちへ返して貰いたいね」

「はい」仲居が立つて、すぐ札ふだを集めてお綱の前へさしだした。お綱はそれを重ねたまま、ピリツと裂いて煙草盆の火にくべてし

まう。

「アラ、つまらない……」

舞妓たちの眼は、和蘭陀カルタの煙を見あげて、うらめしそうにつぶやいている。

「では、私は勝手に支度をしなおして、日蔭ができたらここを立ちますから、みんなも構わずに戻つて下さい」

「さようなればお嬢様、ぜひ来年の祇園ぎおん祭りには、またおいでなされて下さいませ」

「ええ、またきつと上つてのほまいりましょう。アア、それから私の頼んでおいた道中着物は？……」

「こちらへ包んでおきました。ではお嬢様、どうぞご機嫌よろし

ゆう「道中お気をつけなさいませ」
「水みづあたりやゴマの蠅はえにも……」
などと入れ代り立ちかわり、送り言葉のあいさつを述べて、この一行はまた、三条口へつづく並木をゾロゾロと引返してゆく。

ぽんぽんと手を叩いて、お綱はそのあとで女中を呼んだ。

「永く店を塞ふさいでいてすみませんでしたね」

「いいえ……あの、御用は何でございますか」

「こんな姿をして歩くと、道中かご駕かきや人足にばかにされて困りますから、ちよつと支度をなおしたいと思うんですが……」

「それなら、あちらの部屋に鏡台もございますから、ごゆるりお使いなさいまし」

「じゃ、ちよつとそこを借りますよ」

立つて奥へ入ろうとすると、ちようど茶店の前をおびたらしい数の侍さむらいが、いずれも野袴のばかまわらじがけで、シトシトとわき目もふらずに通り過ぎてゆくのを見た。

「おや？」

お綱は、ペタと壁のかげに身を隠して、

「あの先達せんだつになつてゆく男は、たしかこの間川かわちよう長の座敷で隣合つた阿波侍……たいそうぎようさんな身支度で、一体どこへゆくのかしら？」

と横目づかいにジイと見送つてみると、あの、天堂一角とおぼしき眼が、鋭くこつちへふり向いたので、お綱はスツと奥の部屋

へ隠れてしまった。

そして、立て膝の鏡立てに、両手を髪へ廻したかと思うと、見るまにこうがい笄をぬきかんざし簪をとり、鹿の子かこ結びのお七まげ鬘を惜しげもなくこわしてしまふ。

そら寝のかけひき駈引

あれから一刻ときばかりたって、お綱は、すきや縮ちぢみに小柳こやなぎの引っかけ帯、髪もぞんざい結びに巻きなおし、まるで別人のようになつて、

「アア、せいせいした……」

と「走り井はし」と書いた団扇うちわを片手に、ぶらぶら大津の方へあるいていた。

ちようど、どこかの粹いきなお内儀かみさん——というかつこう、誰の目にも旅をしている者とはうけ取れまいと思えるが、さすが、街道かじかせぎの駕かかきは目が高かった。

「こウ、姐ねえさん」

すぐ蠅はえのようなやつが二匹、一匹は空棒からぼうを通して駕をひツかつぎ、一匹は手ぶらで後からくツついてくる。

「どうだい、ええ、姐さんてば」

お綱はふり向きもしないで、団扇を使いながら歩いていたが、「うるさい人だね！」チエツと舌うちをして睨にらみつけた。

「うるさかったら乗ってくんねえ。陽のあるうちに矢走やばせの渡船わたしを越えて、草津泊りは楽なもんでさ。下駄ばきでカラコンカラコンやっていた日には、これから大津までもむずかしゆうがすぜ」

「大きなお世話だよ」

「こいつアごあいさつ。親切に教えてやっているんじやねえか」
「雲助とゴマの蠅の親切なんかは、まッぴらご免ですとさ。それとも、まったく親切気があるなら、これから江戸の日本橋まで、押ツとおしでやってくれるかい」

「ええ、ようがすとも、泊りさえ取ってくれれば、江戸だろうが、奥州だろうが、決して嫌たアいいません」

「そうかい、だがね」

「まあとにかく、先へ乗っておくんなさい」

「無代ただでだよ」

「えっ？」

「こう見えても私は一文なし、タダでいいなら乗ってあげる」

澄まして行き過ぎるうしろ姿に、いつそうムツとした二人の雲助、いきなり空からかご駕をほうりだして、バラバラツと腕うでまくりのただ一打ち！

「けツ、ふぎけやがるな」

驚わしのごとく飛びついたが、お綱の体に触れない前に、あつ！

と雲助が音ねを揚げた。と思うと、何者にか、二人とも襟えりがみを引つつかまれてブーンと一ふりふりまわされる。

「街道のウジ虫め、悪くあがくと命がねえぞ」

「アツ、ごめんなすつて——」

下からその太腕を見あげると、服は黒麻なりに茶柄ちやづかの大小をさし、夏ではあるが、黒紗くろしやの頭巾に半顔をつつんで、苦み走つた浪人の伝法肌はだこ。

お綱は、ひよいと振りかえつて、

「おや、お前は、お十夜じゅうやじゃないか」と、二足三足戻つてくる。と孫兵衛は、両手にしめつけていた雲助を、ドンと向うへ突つ放した。

「あ、お待ちよ、駕屋かごやさん——」

ほうほうの態ていで逃げかける雲助を、駕屋さんと優しく皮肉に呼

びとめたお綱。

「街道すじは生馬いきうまの目を抜く人通り、他人様のふところを狙う前に、よく自分たちの胴巻でも用心していたほうがいいよ」

ニツコリ笑うと、いつの間に拘すっていたのか汗じみた雲助の財布をポーンと足もとへほうつてやった。

「こんなビタ銭せんは、痛々しいから返してあげる。だがネ、これから正直に働かないときかないよ」

「あつ、こいつア俺のだ」あつ氣にとられた雲助は、それを拾うとお十夜の眼も怖く、一散からかごに空駕からかごをさらつて逃げてしまう。

「ホホホホ、雲助なんて、何という他愛たあいがないんだろう……」お綱は見送つて明るく笑った。

「おい——」その肩へ、ソツと手をのせて、お十夜孫兵衛。

「相かわらずすばしツこいなあ」

「あんまり憎いから、ちよツとからかつてやったのさ。だがお十夜さん、妙な所で落ち合ったねえ」

「そツちは不意に思うだろうが、この孫兵衛は、ぬきや屋敷のあの騒ぎから後、どんなに跡を探していたか知れやしねえ」

何か一物もつありそうなお十夜——あのそぼろ助広の鉄色かねいろのよう
にトロリとした眼でお綱をみ見る……。

曇るかと思うとカーツと照る、松並木の葉洩れ陽はもが、肩をならべて行くお綱とお十夜のうしろ姿へまばゆい明暗を綾あやどつてゆく。

「じゃ、あの騒ぎから後に、それほど私の跡を尋ねていたのかい」
「こんどのことをきツかけに、一つ江戸へ出てみたいと思うのだ
が」

「アアそれもいいかもしれないね」

「女のところへ男が転がり込むなあ、少し逆縁かもしれないねえが、
当座の間、お前めえの家へやつかいになるつもりだ」

「おやすいこと、江戸へ帰ればお綱だつて、少しは顔がきくから、
安心しておいでなさいよ」

「ありがてえ、これでおれも気が落ちついた」

「気が落ちついたのは私のほう……」白い歯なみを笑えみこぼして、
ニツと流しめに媚こびを向けたので、あまり近く寄り添っていた孫兵

衛、息づまるような眼づかいを迷わせた。

「はてな……」と好色な孫兵衛は、もう情心の闇に好きな痴蝶ちようを舞わせて、勝手な想像を心の奥でたくましゅうする。

「お綱のやつめ、ばかに今度は当りがいい……ジロとおれをみる眼元、何ともいえない色気の露がたれている。ヤツぱり女は女ざかり、男がほしいに違いない。とするとこの金的きんてき、案外もろくポロリとおれに落ちてくるかもしれないわえ……」ひそかに伽羅きやらの薫かおりを偷ぬすみ、その肉を想いなどして、今宵の泊りの夢までを描くのである。そういえばお綱の手が、歩きながら、ときどき味を持たせるように孫兵衛の指へ触さわってくる。ここで、ギユツとその手を、握り返してやりさえすれば、俠きやんなようでも女のことだ。そ

うなつてはもう啖呵たんかの音ねも出まい。きつと、俺のこの強い力にほだされて、いつの間にか俺のこの胸へ抱きこまれてくるんだろう。甘えあめものだ。何といつてもそのほうにはお綱も初心うぶなところがある。世間にすれていて男に初心——男にすれていて恋には初心——、という女がこのお綱だ。深窓しんそうにたれこめている御守ごしゅでんおん殿
 女の初心なよりは、お綱のような女の初心が、時には、ばかばかしいほど男に血道をあげるものだ。

……孫兵衛の情心妄想、あるきながら果てしもない。

お綱の、あの鈴形すずなりに澄んだ目も、きりツと蓄つぼんだ口元も、板は木師んぎしが一本一本毛彫けぼりにかけたような髪はの生えぎわも、ふるいつきたい襟えりあしの魅力も、小股こまたのきれ上がった肉づきも、おれの手に

かかれば翌朝は、そのおもかげも残しはしない。お綱がうわべに
 まとつている、張だはりの侠だきやんの意気地だの、そんな虚勢きよせいはみんな
 脱がして裸のお綱にしてみせる。そして五十三次つぎの泊りの間に、
 この女を生れ変つたようにしてやつたら……こりや、そぼろ助広
 の刃やいばに、辻斬りの血をぬるような快さこころよの比ではない……と、孫兵
 衛の魔情はニツタリとするのであつた。

と、いつか並木がザワめきだしてザーツと砂をまぜた風が、お
 綱すその裾あおを煽り、孫兵衛の幻想をうしろから吹き払ってしまった。

「おや、ポツリと降つてきやしなない？」

お綱ひとみの眸まが、雲足の迅はやい空をみていた。

「才才、夕立雲！」

「困ったねえ、まだ大津へも着かないうちに」

「しかたがないから早泊りとするさ」

「向うに見えるのが追分だね」

「ウム、どうせ二人とも急ぐ旅じゃねえ。オ！ こいつアいけねえ、本降りだ！」 いううちに大粒の雨、サーツと斜めに吹っかけてきたので、二人はにわかには走りだした。と、その後ろから一ツの笠が風に舞わされてクルクルツとお綱の足へ吹きよせてきた。

「アアア——」と追いかけてくる旅人があつた。べんけい縞しまの単ひ衣とえに紺脚絆こんきやはん、笠を抑えたらしい時、お綱はちよツと振り返つて、何だか見たような男と思つたが、雨と風に吹き別れて、街道筋の旅人もみな散り散りに影を潜ひそめてしまった。

お綱とお十夜は、追分端はずれの静かな旅籠はたごへおちついた。雨樋とを溢あふれるドシヤ降りと、青光りの稲妻に障子をしめて、お綱はグツスリ枕まくらについた……、閩一重しきむとえの隣には、宵よに、お綱の媚なまめいた酌しやくに酔よつた孫兵衛が、これもグーツと寝ねついている。

だが、心から寝ねついているかどうか？ ……。

お綱も真まから帯紐おびひもをといて、寝ねこんでいるかどうか？ ……。

とにかく、目めにみえないあるものが、灰ほのぐら暗くらい灯あかりにまたたかれて
いる二ツの枕まくらを通とおっている。

そら寝ねのかけひき、どうなるか？

つきよ
月夜の風邪かぜ

そのあした。

雨はやんだが曇りもよう。湖水の色や、比叡ひえいの雲の行きかきを見るに、もう一降りドツとこなければ、この天候は霽はれあがるまい、というので、旅籠はたごの門かどには、だいぶ逗とうりゆう留延ゆうばしのはきものが見える。

「おい、誰かいねえのか、ごめんよ——」
そこへ一人の男が立った。

「あい、お泊り様で……」宿の女中が出てみると、土間に突つ立った男は、べんけい縞しまの尻しりはしより、笠の前つばを抑えているので人相は分らない。

「うんにや、泊るわけじゃねえ。——ちよつとここの客に言伝ことづてて貰いたいのだが、昨日きのうなんだろう、……あのドシヤ降りがやってきた時、頭巾をかぶつた浪人と小粋こいきな女が、ここの家へ、駈けこんできたろう」

「はい、お泊りでございますが」

「その女の人に、これを渡してくんな。昨日、走井はしりいの茶屋の前で拾いました、おおかたあなたが落したものと思つて、ついでに持つて上がりました……とな。いいか、忘れちやいけねえよ」
ふところ
 懐から、妙な模様のついている一枚の札を出し、それを女中の手に渡して、

「だが、そいつはついでで、肝腎かんじんなのはこの次だぜ。ところで、

この札を届けました男が、いつぞやは飛んだご恩をこうむりました。おかげ様で命拾いをいたしましたようなもの、くれぐれもありがとうぞんじました……と、こうお札をいつて貰うんだ」

「それでは、ちよつとお呼び致しましょうか」

「おツと。逢うわけにはゆかねえんだ、外には連れも待つているから、今いったことだけを頼んだぜ」ヒラリと戸外へおもてさして帰つてしまった。

「お客様、ごめんなさいませ……」女中はすぐに、その札を持つて奥の客間をさしのぞ覗く。

二間まのうち一間のほうには、お十夜孫兵衛、宿ふつかよ酔いでもしたのか、蒼味あおみのある顔を枕につけ、もう午ひるご頃だというに昏こん々こんと

熟じゆくすい睡すいしている。

「おや、まだおやすみでございますか」

「いいえ……」中なか仕切じきりの向うからお綱の声がした。お綱はすツ

かり朝化粧まですまして、服なりもきちんとできていた。

「お連れ様は、たいそうよくお寝よりでございますね、おや、朝あさは

飯はんもあがつていらッしやいませんようで」

「そツとしておいて下さいな。昨夜ゆうべ少し持病が起きて苦しんだと

ころですから……、なアにこの分で、夕方までグツスリ寝ていれば、気分がよくなりますから心配しないで」

「はい。それからお客様……ただいま下へ、旅のお方が見えまして、これを渡してくれとおっしやいましたか……」女中は、べん

けい縞じまの男からいわれた通りの言伝ことづてを添えて、きれいな模様の
ある札をお綱の前へさし置いた。

「えっ、これを誰かが届けてきたって？ ……」

お綱は畳の上へ眼をみはった。その一枚は、まぎれもない和蘭おら
陀んだカルタの一枚である。

走井はしりいの近くで拾ったといえ、送ってきた舞妓まいこたちが、あの

茶店先でもてあそんでいたから、その一枚が往来へ散ったのであ
ろう——それに不思議はない、しかし、この一枚のカルタをたぐ
つて、自分へ届けてきた男の眼力がんりきがなんとなくもの凄い。

だがまた、女中の言伝ことづてによると、その男は、別に悪意を持つ
ている様子もない——いや、悪意どころか、陰いんに何かを感謝して

いる口ぶりであったという。

「じゃ、べつに、もう御用はございませんか」女中が立ちかけると、今度はお綱が問いかけた。

「あの……妙なことを聞くようだけれど、この辺に、虚無僧寺でらうがありますか」

「虚無僧寺？ ……さアよく存じませんが」

「では昨夜、雨の小やみな時に、時々一節切ひとよぎりの音ねがしていたようだけれど、あれはどこで吹いていたのだろうね」

「一節切と申しますと、あの尺八でございますか」

「まア同じようなもの、何か心当りがありませんか」

「そういえばこの間うちから、関のお山の麓ふもとにある時雨堂しぐれどうで、

誰か時折吹いているようでございます」

「関の麓の時雨堂？ ……ああ、そうですね、ありがとうございます……」
と、女中が立った後でお綱は黙って眼を閉じた。——ゆうべの雨の絶えだえに聞いた、あの一節切ひとよぎりの遠音とおねを、ふたたび耳の底に聞くように。

「ウウム、ウウツ……」不意に寢床の上の孫兵衛が身を動かした。とたんに、お綱はスツと立って、背なかを壁に貼はりつけたまま、その蒼白い寝顔と寝息をうかがっている……。

時雨堂。なんとなく心を惹ひかれる名だ、恋しい情けが運ばれる名である。

でなくともお綱の心は、一途いちずにそこへ向いていた。とにかく、垣間見かいまみにでも覗のぞいてみたい、声だけでも横顔だけでも——という恋慕が矢のようにはやる。

で、宿からそツと抜け出した。

その時、お十夜は、まだ昏々こんこんと眠り落ちていた。

関せきの明みょう神じんへフラフラと歩きだしながら、お綱は、ふと、自分の気もちを不思議に思う。

「おや、どうかしているよ、私は？ ……」

だが、引つ返す気にはなれない。

「どうかしている、そろそろ、お綱のやきがまわったのかしら。今まで、男の中にまじりあって、その男が何とも思えず、女だて

らに大尽遊びをして、色子や男芸者に水を向けられても、どんな気もしなかつた私だけれど……妙だねえ、今度だけは、あの一ひとよ節切ぎりだけが忘れられない。魔がさしたというものかしら？」

はつきりと、自分でその気心の怪しさを意識しながら、足と心だけは、グングンと惹ひかれる方へ惹かれてゆく。あの時雨堂へ。

とはいえ、世間に一節切の上手は多い。宗そうち長ようり流ゆうもたくさ

んある。ゆうべ夜半よなかに、宿の枕へほそぼそと通かよつてきた音ねが、必ずしも、あの虚無僧とはかぎるまい、世間に虚無僧も大勢ある。

だが——あまりよく似た音色ねいろでもあつた。立慶りっけい河岸を流がししていたのを、川長の二階で聞いたあの音色。ほんとにソツクリな節ふしま廻わし、曲もたしかに宗長流の山千禽やまちどり。

「ああ、どうしたんだえ、この、お綱さんは！」自分の胸を叱つてみても、ヤツぱりいつかお綱の心は、その人らしく考える。

あの晩、川長の隣り座敷にいた阿波侍が、何かコソコソしめ謀しあわせて庭手へ出たので、お綱は、見るとしもなく二階から見下ろにわたしている、たちまち月下に剣のつるぎ声がおめきでした。そして一人が危うくなる……あつと思つていると、裏木戸から、あの虚無僧が白鷺しらさぎのように立って、ピタリと対手あいての阿波侍へ尺八を向けた——その阿波侍の刀の鋭さを見ていたお綱は、やにわに膳の小皿をとつて、パツ——と二つ三つ投げつけたのだ。

しかし、お綱はあとで後悔した。

あれは余計なことだった。あの時虚無僧の構えた尺八には、充

分な自信と研みがきぬいた腕の冴さえが、素人目にも分るほど光つていた。なんだかはしたくないことをしたように気が咎とがめて、お綱は、
侠きやんにも似ず、その時、恥かしい気に責められもした。

そしてしばらく、月を浴びて、ひそひそと話しているその人を、
上の手欄てすりから見つめているうちに、お綱は夢ともうつとも知らない境に、骨の髄ずいまで沁みわたるほどなゾツとする恋慕の寒さむけ気にとりつかれた。

お綱は、恋だなんて嫌味なことを、いいもしなければ思しいもしない。

自分で自分の心にいった。

「わたしは、月夜の晩に風邪かぜをひいたよ！」

世間にすれていて男にすれず——男にすれていて恋にはすれていない、これがお綱の実感だった。

月夜の風邪は重くなった。

あれからも二度三度、立慶河岸のお茶屋に上がって、一節切ひとよぎりの主を待つ夜もあつたが、とうとうそれきりその尺八たけもその影すらも見かけない……。京や伏見で七百両のやけ費づかいも、華やかだつたには違いないが、月夜の晩にひいた風邪は、お綱の髓ずいからぬけないのである。

「あ……うツかりして、妙なほうへ来てしまった……」お綱は目先を拭ぬぐわれたように、ふいと気がついて立ちどまつた。

関せきの明みょうじん神の高い石段は、さつき右手にみて左へ折れた薄お

ぼえがある。道はいつかダラダラ上りにかかつていて、緑の濃い竹林の中に、そうそう淙々としてゆく水の声がある。

「この辺じやないかしら？ ……こんな時に昨夜のゆうべ一節切ひとよぎりが聞こえてくればいいけれど」

と、ふたすじ二筋の道を見廻していると、やや上りになったひのきばやし檜林

の暗い蔭に、一人の女が泣いている。檜にもたれて泣いている。

木の間を透す空も、どんよりとぎんいぶ銀燻しのように鈍く、もみ樅や松

や雑草の、しめツぽい暗緑色につつまれた山蔭——。そこにサメザメと泣いている女は、井の字がすり紺の着物をきていた。

泣いている顔の袖を離して、林の細道を、一、二間ウロウロしていたかと思うと、女は、ものの怪けに憑つかれたように、フワ——

と赤いしごきを木の枝へ投げかけた。

「あっ！」

お綱は夢中になって駆けた。

蔓草つるくさに足をとられて、一、二度倒れかかったが、あぶないと

ころで間に合った。

今にも、梢こずえにしごきを投げかけて、幽ゆうじやく寂な林の中に首を縊くく

ろうとする女。その後ろから、しツかりと抱きとめたのである。

「めったなことをするもんじやない！ めったなことをおしでな

い！」

お綱は声を絞しぼって、井の字がすり緋の娘を抱き戻したまま、よろよろ

と熊笹くまざさの中へ坐つてしまった。

途端に、抱き倒された娘は、声をあげて泣き伏した。泣いても泣いても、涙の尽きぬように慟どうこく哭した。それもやがて声がかれると、背なかに波を打つて苦しげな嗚咽おえつとなる。

「まあ、あぶないところだった」お綱はほつとしたように、しげしげと娘の容姿すがたを見なおして、

「アアびつくりした。みれば、お年もまだ若いらしいのに、一体、どうしたのですえお前さんは。え、え？　話せることなら話してごらん」

「いいえ、いいえ、別にわけも何にもないのでございます……どうぞ、私はこのままに泣かしておいて下さいまし」娘はかすれが

すれにいう。

「そう、じゃあ、人には話せない訳なんだね」

「すみません、ご親切を無むにしまして……」

「それでは、あまり深く訊きかないことにしましょうね。誰にしたところで人にいえない胸の裡うちはあるものだし、ましてやこんな場合に、根掘り葉掘りされることは辛いでしょう。けれどもねえ、お前さん、私だつて若い身だけれど、お互に咲くや咲かずの花のうち、森の死神なんかを取ツつかれちやつまりませんよ。え、お分りかえ」

「あ、ありがとうございます」

「分つたら、無理な注文だろうけれど、カラリツと気を晴れさせ

て、早くお家へお帰りなさいね……え、よござんすか」

優しい手を、ソロリと肩へ廻し、髪を根くずれさせてうつ伏している娘の顔をさし覗のぞいた。と、お綱はその時はじめてびつくりした。

川長で見たことのあるお米よねなのだ。

ハツと思つて、妙な疑惑につつまれていると、その矢先に、陰いん森とした空気を破つて、後ろで不意な人声がする。

「旦那！ お米さんはここにいましたぜ。ここにいますよ、ここに！」

「えッ、いたか！」バラバラと木の間から、四、五人の者が集まつてきた。追分の宿の宿の大津絵師、室井半齋むろいはんさいとその召使たち。

「オオ、縊くろうとしていたのじゃな。ばかな奴じゃ！ ばかな奴じゃ」と半斎は、木の枝から下がっていたしごきを、腹立たしそうにスルツとはずして、二人が坐っている熊笹の前へきた。

「お助け下さったのでござりましょう。どうもありがとう存じました。やれやれとんだ世話をやかす奴、実はちよつと前から、大阪の親戚みよりの者で遊びにまいつていたのでござりますが、そのうちに、ちと持病がありましたな、カーツと血を吐きましたもんで、それ以来、鬱うつうつ々と焦じれきつて、まあ半狂人はんきちがいというありさま。今日もソロリといつの間にか抜けだしまして、あまり姿が見えませんで騒さわぎだしたわけでございます。何ともはや、お礼の言葉もござりません」

言い訳やら礼やらいつて、半斎は召使たちと一緒に、泣きじやくるお米を騙だましすかして連れて行つた。

その人たちが林の細道からダラダラと竹林の中へ下がってゆくを見送つて、お綱は、ひよつと、こう口の裡うちつぐやで呟つぶやいた。

「あんな縹きりよう緞じゆで可哀そうに……病やまいを苦にするばかりでなく、あの女ひともどこかで、月夜の風邪をひいたのじゃないかしら？」

その時——それは、鶉ひよの啼なく音ねに似たような、哀れに淋たしい尺た八はちの調べが、林の静寂しじまに低ひくふるえて、どこからともなく聞こえてきた。

耳心じしんをすまして聞き惚とろれると、音色はまぎれもあらぬ宗長流、しらべはゆうべの山千禽やまちどりである。お綱の恋慕、お米の吐く血、

二ツの女のたましいが、おののくごく^{むせ}とく咽ぶ^{むせ}ごとく、尺八^{たけ}の細音
にからんでいるよう……。

まぜつくぜつ
魔舌紅舌

お綱が、宿をぬけだしてから、やや^{ふたとき}一刻もたツた時分……。

ズキンと、頭へ錐^{きり}をもみこまれるような痛みをおぼえて、お十

夜孫兵衛、ふいと眼をさまし、枕の上からあおむけに、ジイト、

天井板^{ひとみ}に眸^{ひとみ}をすえた。

どこともなく、漂^{ただよ}いだした黄^{たそがれ}昏の色あい——煤^{すす}けた狩野^{かのう}ふう

な^{えぶすま}絵襖のすみに、うす赤い西陽^{にしび}のかけが、三角形に射している。

「オウ！」

ファイに、憑つき物でもおちたように、ムクムクと蒲団ふとんの上に身を起こした孫兵衛は、両手をうしろへついたまま、ややしばし、濁にごつた頭を澄ましながら、不思議にたえぬという面おももちだ。

ゆうべ……あの吹き降りに宿へついて……湯上がりにお綱の色ツぽい酌しやくで二、三合……たしかにほんの二、三合だった……飲んでそれから……鬨しきいをへだててほろ酔いで床につく……お綱が鬢びんを枕へつけながら二ツとこつちへ媚こびをむける……意味ありそうな、水みず向け微笑わらい……初心うぶだなあ、口にだしてはいえないとみえる……だが、少しじらしてやろう……と蒲団ふとんをかぶるとその煽あおりで、行あ燈んどんの灯がメラメラとした——までは孫兵衛おぼえている。

しかし、その先が渾沌^{こんとん}だ。

自分は、そら寝入りでいるつもりだったが、それから後は、底なしの沼へ落ちこんだよう——まったく仮死^{かし}の眠りであった。

「ウーム……」と、腕をくんで、部屋のあたりを見廻すと、ハツとした、お綱がいない！

衣桁^{いこう}をみると、ゆうべ、かれによく似合っていた宿の貸浴衣^{かしゆかた}が、皺^{しわ}になつて脱いである。

鏡台が散らかっている。だが、お綱のものは、櫛^{くし}一枚も残っていない。なかつた。ただ抜け毛を丸めた紙屑^{かみくず}が、お十夜の眼に、さびしく映^{うつ}つたばかりである。

「やツ？ ……」

何をみたのか、孫兵衛。

「はてな？」といいながら、蒲団を立って、向うの畳へ手をのばした。そこに落ちていた、和蘭陀おらんだカルタの札一枚——それをつかんで、不審そうな眉をひそめたのである。が、すぐに両手をこめかみに当てて、クラクラとした唇のふるえ、

「ウウ……」と、畳へうつ伏ぶしてしまった。

胃の腑ふからこみ上げてくる吐き気と一緒に、口へ湧わいてたまる不快な唾つば、そして、齒ぐきの根から、浸しみだして、孫兵衛の神経を、ムウと衝ついたのは——眠り薬のにおいであった。

魔薬をのんだ！ いや、のませられた！ ゆうべの酒！ お綱のやつが、あれへ仕込んでのませやがったに違いない。と、思い

当つた孫兵衛、ふたたび上げた顔の筋には、面おもても向けられない佞ね相いそうの怒りが、蒼あおしろ白みなきく漲みなぎっている。

「うぬ、このお十夜を甘くみて、まんまと一杯くわせやがッたな。ウーム、どうするか見ていやがれ」

思わず、和蘭陀おらんだカルタをつかみつぶして、その方の疑念は忘れ、ただ一途いちずに、この復讐ふくしゅうをどうしてやろうかと思いつめる。

こういう場合に、肚はらの底では、焼耐しょうちゆうび火ひのような怒気をムラムラ燃やしながら、あくまで、ジイと眉間みけんに針をよせて、かツとならないのが孫兵衛の性格である。——たとえば、京橋口で、斬るべき万吉を斬らずにフン縛しばったり、ぬきや屋敷しの椎しいの下で、そぼろ助広の切ツ尖きさきでなぶつてみたり、それはみな孫兵衛の粘りねばッ

こい悪の悦楽で、助広の刀をかまえる時も、女の肉をむさぼるにも、人に恨みを酬むくいるにも、かれのやり方はどこまでも暗く陰険である。

気分が癒なおった様子――。

孫兵衛は、黙もくねん然と立って、廊下仕切じぎりの障子をみなスーと閉めてしまう。

しばらく、なんにも音がなない。とやがて、帯をしめる絹すべり、鏡台を摺する気配……容子ようすはみえないが、頭巾をかぶりなおしているらしい。そういえば、お十夜孫兵衛、まだ今日まで、他人ひとに頭巾をぬいだ顔を見せたことがない。

それには、よほど、細かい気配りをしてるとみえ、風呂へ入

るにも、人なき時をえらび、酒に熟睡している時でも、頭巾へ他人の指がふれると、かつと眼を開く——というかげ口を、ぬきやの三次もいつていたことがある。

「では何か、一刻ふたとぎほどまえに、時雨堂しぐれどうへの道をきいて、関の山へ参つたのだな。よし。それでは、このまま帰るまい、払いは女中へ渡しておいたぞ」

宿の男へ、こういつて、お十夜孫兵衛はそとへ出た。

空を見あげると、一面に、まツ黒なちぎれ雲——逢坂山おうさかやまの肩だけに、パツと明るい陽がみえるが、四明しめいの峰も、志賀粟津しがあわづの里も、雨を待つような、灰色の黄昏たそがれぐもり。

孫兵衛の姿は、みょうじん明神ふもとの麓から、竹林の中へ消えた。とまた、
 だらだら上りの中腹に影がみえ、やがて、左へうねったひのき檜林の細
 道へ入る……。

誰か、人でも踏んで行つたらしく、草の寝ている跡がある。と
 ——お十夜の足もとへ、ふわりと、何か柔らかかにから絡みついた物が
 ある。赤い絹のしごきである。もしや、と思つたが、お綱のもの
 とは柄がらがちがつていた。

何だ——という顔つきで、孫兵衛はそれを捨てて、またピタピ
 タと林をぬけて行くと、目の前、パツと夕陽が明るくひら展けて、か
 なり高い崖がけ際ぎわの上へ出た。

「あ、行き止まりか……」と孫兵衛。雑草の中から、のぞ覗いてみる

と、下は、関の古跡こせきの裏街道、峨々ががたる岩の根に添って、海のような竹林がつづいている。そして、その一帯な竹林の中から、古い塔の水煙すいえんや、阿弥陀堂あみだどうの屋根や、鳥居のあたまが浮いている。「畜生！ あんな所にいやがった」不意に、草むらへ、身を屈かがめた孫兵衛は、かまきりのように、ソロリと根を分けて、その崖がきぎわを進みだした。

お綱がいる！　すぐ十間ばかりの向うの所に。

そこには、いッぱいな、蛩ほたるぐさ草が咲いていた。お綱は、後ろから、お十夜が近づいてくるとは知らずに、藍あゐをこぼしたような花に埋うづまって寝ころがり、鬢びんを、夕風になぶらせて、吾をも忘れてまないる眼まなざし……誰に女の掏摸すりと見えよう。

ここから見下ろせる竹むらの辺り、どことも知れず尺八の音が響いてくる——月夜の晩にひいた風邪、お綱は、それに聞きとれているらしい。

しかし、孫兵衛の瞋恚しんいの耳には、そんな、かすかな旋律せんりつがふれても、心にはとまらなかつた。息をこらして草むらを匍はいだし、お綱のうしろに又ツと立った。

それでも、お綱は気がつかない……。

お十夜の口が、夜叉やしやのように噛み締まった。右手がソロソロと助広の柄つかにかかり、両眼は、おそろしい殺気をふくんで、お綱の白い襟えりあしをハツタと睨ねめる。

そぼろ助広へ気合がかかれば、お綱の胴か細首かは、ただ一閃せん

に両断される。

あやういかな、いつものお綱であれば、草一本のそよぎにでも、
敏さとくなければならぬ筈だが、今はまったく、一節切ひとよぎりの音色に
しんから聞き惚とれていて、心は時雨堂しぐれの、あの虚無僧のまぼろし
へ凭もたれている。

現うつつなだけに、無心なだけに——お綱の姿態しなも、常より増して媚なま
めかしい。鬢びんの垂るるままに、うつむいている、頸くびすじの匂わし
さ、肩から足へと、流れている柔らかい線の情味、螢草に押され
て、むツちりとした乳のあたり……。その妖冶ようやな漂ただよいが、いつそ
うお十夜の鬱憤うつぶんをム力つかせて、所詮しよせん、ただ魔刀の酬むくいだけ
ではあきたらない気もちと変った。そして、そのためらいの間に、

孫兵衛の殺念は、さかんな獸心と代り、眸ひとみはトロトロとお綱の姿し態なに焦やきついていった。

うぬ。おぼえていろよ。

男のおそろしいことをしらせてやる。

その色香いろかをかきむしってやる。

そして因果な身にしてやるのだ。終生つきまとい、呪のろいまわして、泣きの涙で送るようにしてくれる。それが、ゆうべの仕返しだ。

「お綱ッ」

呼びかけるが早いか、孫兵衛の体は、蛇のごとく、女の姿へ跳びかかっていた。

「うツ……」とお綱の聲がかすれる。

口は大きな掌てにふさがれ、咽のどは、太い腕からに絡まれている……それを、はね返そうとする白い足の力に、草の葉が散り、土くれが飛び、蛍草もが揉みにじられた。

ちツ……とお綱は齒をくいしばって、唇へ触さわった孫兵衛の小指を、力まかせに咬かみついた。

その痛さに、孫兵衛は、女の口から手をふり離れた。

はね起きると、またすぐに、胸の辺りをドンと突かれたが、お綱は、うしろへよろけながら、キツと、柳りゅう眉まゆを逆さかだてて、

「お十夜ツ、何をするんだえ！」

ひツ裂くような声で叫ぶ。

もみ散らされた黒髪の根くずれ、裾すそを踏まれた緋ひのはだかり、

それは、いっそうお綱の凄せい艶えんをきわ立たせて、孫兵衛の盲目な
けものごころ 獣 心は、いやが上にも煽あおられる。

「お綱！」

二足……三足……。

孫兵衛が寄ってゆくと、お綱も、ジリ、ジリと、うしろへ身構えを退ひいてゆく。

「オイ、逃げる気か。ふうん……逃げられるものなら逃げてみる」

「どうするツてんだい。私をツ」

「眠り薬の返礼をしてやるのよ」

「……………」

「てめえのような小娘に、あんな甘手あまてをくつたままで、眼をつぶっているお十夜じゃねえんだ。おい！」

「……………」

「御城番ごじょうばんの膝ひざもと下でさえ、夜ごとに、五人や七人の生血を塗つた助広はここにある。ぶつた斬ろうと思う分には、女の一人や半分は、なんの雑作ぞうさくもねえところだ。それをやらねえお十夜の肚はらの底を知っているか？」

「……………」

「なんとかいえ。そうか、さすがにお侠きやんなてめえも、すこウし凄くなってきたのだろう。素直に折れるなら今のうちだ。齒はぎしり

してもおれの女、溶けて添つてもおれの女。どっちにしても、この孫兵衛が、これと睨んだものを逃がしツこはねえ。いいかげんに、諦めをつけてしまえ」

一足……また、ズツと迫ってきたが、こんどはお綱、うしろへ退かずに、きりりと蘭^{らんけん}瞼^{まぶた}の紅^{べに}を裂いた。が——声はかえって落ちついて、

「お十夜さん」と皮肉にでる。

「——ずいぶんお前も鈍^{どん}ですね。エエ、なんてえ血の巡^{めぐ}りが悪いんだろう。あれほど、私が嫌だという気ぶりをみせていたものを、自分一人でオツにとつて、その腹いせだの仕返しだのツて、とんだこツちが迷惑ですよ」

「やかましいわえ、もう嫌いやも応も、この土壇場どたんばでいわすものか」

「おだまんなさいよ、瘦浪人やせろうにん！ 第一さ、見返りお綱に惚れる

なんて、身のほど知らずというものだ。このお綱さんに好かれたければ、もっと立派な腕前か、もっと立派な悪人になっておいで、辻斬りつじぎりかせぎで色侍いろぎむらい、オオ嫌だ、そんな男は！」

「ウウム。毒どくづいたな」

「いくらでも毒づきましようか、まだもう一つ、虫の好かないものがある。お前さんのその頭巾、よつほど、ゆうべ眠り薬のきいてる間に、引っぱいで見てやろうと思っただけれど、どうせ自分の亭主でもない男と、おやめにしといてやったのだよ」

「エエ、うるせえ！」

と、その隙すきに、孫兵衛は猛然と、豹ひょうのように、女の手もとへ躍つていった。

キラリ！ と輪を描いたのは、お綱の帯から走つたあいくちヒ首。

もとより、お十夜をえぐ抉るには技わざが足らず、風をはら孕んだ袖うらが、空しく、ヒラ——と流れたのみ。途端にかいくぐつた孫兵衛、その利腕きぎょうでをねじとツて、左手で女の喉のどをせめつける。

二つの体が、よじれ合つて、ヨロヨロとたお仆れかかつた時である。

——ピュツと唸うなつて飛んできた捕縄とりなわ！ 縄の先には鉛なまりがある。

小具足術こぐそくじゆつの息一つ、クルクルツと、お十夜の首にからみついた。

「しめた！」という声。

「あツ——」と、一方が引かれた間に、お綱は、素早く逃げ退のい

た。

ひのき
 檜林から笹むらへ、お綱の迅さは飛鳥のよう。

「ツ、ツ、ツ……」と、喉の捕縄をつかみながら、孫兵衛だけは、弦を張られた弓の形に、そこへ、食いとめられてしまった。

だまり合い

お綱にばかり気をとられていたところへ、不意に、投げての知れない捕縄が飛んできて、自分の頸すじへ引つ絡んだので、さすがの孫兵衛も、罨へかかツた獣のようにうろたえた。

すばやく、お綱が逃げた、とは知ったが、それを追うところで

なく、左の拇おやゆび指で、肉へ食いこむ繩の力を撓ためながら、あおむけざまに踏みこたえる。

喉のどの筋は蚯蚓みみずのように太り、面おもては充血して、みるみるうちに朱そそを注そそいだ。そして、

「うツ！ ……」と、息を絞しぼり、必死に繩を抜けようとあせつていると、ふたたび。

「や、畜生ツ」という物蔭の声があつた。

捕繩の一端から、電流のような力がピンと張つてくると、孫兵衛は、踵かかとを土にめりこみましたまま、ズルズルと二、三尺うしろへ引かれた。

「ウーム」と、最後の一息を呻うめいた時、反それるだけ反そり返つた孫

兵衛は、片手を助広の差添さしぞえへかけるや否や、渾身こんしんから気合いをしぼって、ぱつと一つ身を捻ねじった。

ヒラリツ——と虚空へ抜けた助広の刀光に、繩の断れ目きがクルクルツと躍った。

同時に、あつと思う間もなく、孫兵衛そのものも、繩の残りを体に絡からんだまま、崖から雑木の谷間へ跳びおりてしまった。

「ちえツ」と叫びながら、すぐに、草むらから駈けだしてきた男がある。

断きられた捕縄とりなわを、舌うちしながら、キリキリ手元へ巻き込んで、崖ぎわから、削り立った急勾配きゆうがいを、残念そうに覗のぞいていた。

草ほこりのたかつた鬚まげ先を散らして、べんけいじまの縞ひとえの単衣、きりツと裾をはしよつて脚絆きやはんがけ。それは目明しの万吉であつた。「ええ、惜しいことをした。投げた呼吸は確かだつたんだが、たぐり寄せたのが一息遅かつた……こんなことじゃ、おれのほうえん方円りゆう流もまだ上手とはいえねえなあ」

すると、そこから少し離れたところの一本松、その松の根元の青あお芒すすきから、ムツクリ身を起こした侍が、こつちへ足を運んできながら、

「万吉、鳩が見えたのか」

こう声をかけた。

みると、常木つねぎ鴻山こうざんの腹心、俵たわら一八郎で、万吉と同じように、

旅ごしらえの軽装である。

「なあに、鳩を見張つているところへ、思いがけねえ奴が来たので、出来心の方円流、ブーンと投げてくれたはよかったが、とうとうお十夜孫兵衛という、大物を逃がしてしまつたところです」

「はははは」一八郎は磊落らいらくに笑つて、「うつうつと居眠つてゐるうちに、そんな様子だとは思つたが、お前のヤツと投げた縄の息を聞いて、ははア、こいつは逃がすわいと見切りをつけていたんだ」

「え、じゃ、旦那はうすうす知つていたんですね」

「女の声もしていたようだな」

「それが見返りお綱だつたんです。あの女には、ぬきや屋敷で、

あぶねえところを助けられていきますから、その恩にも、縄をかける気はありません。実あ、走井はしりいの茶屋の先で、チラと姿を見かけたので、和蘭陀おらんだカルタにことよせて、それとなく札をいいにいたくらいですからね……。だが、あのお十夜の奴だけは、ここで逢ったのを幸いに、引ひ縛からめて代官所へでも預けてやろうと思つたのに、旦那も人が悪いや、あの時、ちよツと手を貸してくれば、きつとうまくいったんですぜ」

調子にのつて目明し万吉が、逃がした魚の大きいことを嘆じてやまずにいと、一八郎は、それをなだめようとはせず、かえつて、

「これ、万吉」と、岩角へ腰をすえて、まじめに開きなおり、さ

て、その上で叱言こいごがでた。

「出立のみぎり、常木先生つねぎが、くれぐれもそちにおっしやつた言葉ことばを、もう忘れているとみえる……」

「へい」と、万吉は少ししおれる。

「その、目明し根性を、なぜ捨てぬ。こんど江戸表へまいるのは、さような用向きでは決してない筈。常木先生と平賀殿ひらがは、ぬきや屋敷へ残つて、阿波へ渡る何かの御用を急ぎながら、われわれの吉報を一日千秋の思いでお待ちなされている」

「分りました、ツイ目の前に、捕物がブラ下がったので、うっかり手が出てしまいましたんで……」万吉は一も二もなく謝あやまつて、「おっしやる通り、天下の大事へのり出そうとする門出かど、もう、

人殺しと道連れになろうが、泥棒と合宿あいやどになろうが、決して、小さなことに、目明し根性は出さねえことにいたします」

「ウム、忘れッぽいのもお前の特色だが、早分りがするのもそちの取得とりえというもの。一つの大事にかかる以上は、それくらいな氣組でいてくれなければ困る。……おお、それはそうと、鳩の密使はどうしたろう？」

住吉村へ万吉を救いに行つて、ぬきやの手下どもを取り押さえ、そのままそこを、密議の場所と定めた常木鴻山こうざんは、あれから後、源内や一八郎を相手にいろいろな相談を試みた末、とにかく俵同心と万吉とを、江戸表へ、出立させることになった。

いずれにしても、阿波へ潜入する前に、一応は、甲賀家こうがけの一人娘——お千絵様というものに逢っておく方が便宜でもあり、また、蜂須賀家の内情についても、意外な材料を得られぬかぎりもない——というがためである。

そこで、大阪表おもてから、東海道へかかってきた二人は、今日の途中、何か知りたいたいことがあつて、携たずえてきた伝書鳩を、この関の山から人知れず放したのである。そして、その返事を待ちわびていたのだ。

飛ばした先は、安治川あじの近所、鳩の翼では一はたきである。もう帰らねばならない時刻の筈。

その頃から、チカツ、チカツと、白い電光が雲間から目を射て

くる。夜のとぼりの迫るとともに、嵐の先駆らしい風が、そよそよと草を撫でてきた模様なに、一八郎は、わが子を待つような、心配しょうそうと焦躁しょうそうにかられつつ、空ばかり気にして眺めた。

「まだ見えぬのう」幾度、こうつぶやいたかしれない。

「どツぷり暗くなつたので、方向が、分らなくなつたのじやありませんまいか」

万吉も小手こてをかざしていた。その間にも、二人の影を隈くまどつて、稲光りの閃光せんこうがしきりに明滅した。

「いや、まだこれくらいな薄明りがあれば……」

「それとも、雷気らいきにすくんでしまったかな？」

「そんな筈はない。こんど携えてきた鳩は、数ある中でも、こと

に遠放とおはなしもきくし馴れぬいている一羽。どこにおろうと、この

方のいるところへ必ず戻ってくる質たちだが」

「あ——」万吉が、話の途中で、躍おどり上がるばかりに指さした。

「旦那、来た来た、たしかにあれですぜ。ほら、ほら、白い矢でも飛んでくるように、一気にこちらへ向いてくるじゃありませんか」

「おお」その指さきの空に、一点の影、舞い下りてくる小鳩を見出したとみえ、一八郎も、眉から憂いのかげを払いつつ、

「戻ってくれた、戻ってくれた、手飼てがいの密使——」ハタハタという音さえ嬉しく聞いて、拳こぶしを出していると、馴れきっている銀色の家鳩いえばと、スーと下がってきて、その手へ止まった。

「大儀たいぎ、大儀」

足に結んである雁皮紙がんびしを解いてパツと離すと、鳩は今宵ねぐらの罫かをさがすのか、ふたたび、木立の中へ隠れてしまう。それを見届けてから、一八郎は、細く折りこんである薄紙をていねいに開いて、「ちと暗いのう……」と、読みなやんだ。

「お待ちなさいまし、手軽かがりい篝かをこしらえますから」万吉は、少しばかりの枯杉かれすぎをあつめ、燧ひうちぶくろの道具をだして、カチ！カチ！と火花を磨すりつけた。

ポウと、燃えついた明りへ寄つて、俵一八郎は雁皮紙の密書へ目をたどらせる。それは、かねてから蜂須賀家に住みこませてある一八郎の妹、お鈴からのものであった。

（お問合せの、阿波守様お国歸りは、九月上旬という噂、お下しもや屋敷しきもお引上げの御用に取り混んでおります。御渡海のお座船ざふね、まんじまるまんじまる丸も、きよう安治川へ入つて、ふなよそお艀ふな装まいやら何かの手入れにかかりはじめました。とり急ぎお答えまで。お江戸の吉報、待ち上げまする）

読み終ると、も一度、初めの方へ目を返して、

「九月の上旬……、すると、今からまだ二月の間つきがある」

「それまでには、常木先生のお支度も十分にできるし、こつちの方も楽に江戸から帰れますぜ」

「なるべく、阿波守が入国の混雑に乗じて、その隙に、関を破つて密境へ入りこむが上策であるという謀しめし合せ。あしたはこのこ

とを、常木先生のほうへも知らせておこう」

「しッ……」

何思ったか、その時、万吉が突然声を制して、燃え残りの火をめちやめちやに踏み消してしまった。

それを、なぜと怪しむまでもなく一八郎もぎよツとした。いつの間にか、後ろへ近よっていた七、八人の侍が、じツとこちらを見ているのである。

気転きてんよく、万吉の蹴ちらした枯杉の火の粉が、草から草へ吹かれてしまうと、星明りもなき真の宵闇……。わずか四、五尺の隔てながら双方の姿は、その輪郭りんかくすらもよく分らない。

ましてや、その何者であるをや。

こつちで口をとじていると、一方も果てしなく黙りぬいていた。ただその間、鋭い神経だけが、ひとみ眸とともに互に相手を探りあつて
いる。

何者だろう？ 単なる通りかかりの者とも思えず、もの物盗りの浪
人らしい挙動もない。といつて、立ち去る様子もなし、あくまで
黙りこくツて、いあつ威圧するように、こつちをぎようし凝視している七、八
人の侍。害意はないまでも、なんらかの敵意は持っているらしく
考えられる。

勘のいい万吉も、けいがん炯眼なる一八郎も、さらに見当がつかなか
った。せめて、あいて相手の風貌でも見ればだが、まったく漆壺うるしつぼの

ような天地——時折の稲妻は、ただ、そこに立った侍のどれもが、一様に覆面しているらしいのを、チラと見せたにすぎないのである。

「妙な奴らだ、だんびら大刀でも抜いてみやがれ、こつちから先にグワンと一つ食らわしてやるから」

万吉は、手の裏に十手を隠して、しばらく息を殺していたが、かくべつ、抜いてくる気色けしきはなく、依然として、すくみあいだ。そのうちに万吉は、ばからしくもなるし、神経も疲れぎみになつて、フイと気をそらしてみた。

「旦那……」

小声にささやいて、一八郎の袖へ合図をしながら、

「雨にでもなると困りまさあ、腹へ底が入ったところで、ぼつぼつふもと麓へ下りましょうぜ」

火を焚たいていた言い訳にこういつて、万吉は、スタスタ先へ歩きたした。と、一八郎も、いい機しおにしてついてくる——が、まだ。「後から、追いかけてくるかな? ……」と、予想していたが、七人の侍、追ってくる様子もなく、また、待て! と浴びせてくる声もない。

「なんでえ! つまらねえ気を揉もんでしまった」

下り坂へ来てから、急に足を軽くして、万吉の声がふだんの通りになつてきた。

「わっしはまた、旦那が密書あれを読よんでるのや、阿波の噂うわさをしてい

たのを、あいつらが聞き咎めたのかと思つて、すツかり胆きもを冷やしてしまいましたよ」

「拙者も一時はぎよツといたした。しかし、考えてみれば、こんな所へ、蜂須賀家の侍が立ち廻っている筈はないからのう」

一八郎も今になつて苦笑を禁じられなかつた。

「ですが、一体あいつらは何でしょう」

「どうやら覆面していたらしい」

「それが合点がてんがいかねえんです。言葉を交わせば、侍つてやつあ、きつとお国訛なまりがありますから、どこの家来か、浪人かぐらいは、すぐに察しがつくんだが、ああ黙つていちや判断がつかねえ……
おや、道が二筋に別れていますね」

「右へまいろう。どうやら先に明りが見える」

「今夜は天津泊りでしような」

「ウム、空模様さえよければ、夜旅をかけて矢走やばせの渡船わたしに夜を更ふかすのもいいが、この按配あんばいでは危なツかしい……」一八郎が、闇と知りつつ、険悪な空をまた見上げていると、万吉は敏感に、誰かここへ急ぎ足に来る蹻音あしおとを聞きつけたらしく、ふいと、わきの杉の木へ身を隠した。

油断のない、気配りをしながら、一人の仲間ちゆうげんてい態の男が、麓ふもとから小走こばしツこく駈かけ上がった。その蹻音あしおとの行方を聞き澄ましている、今、二人が来た方角とは反対に、関明神せきみょうじんの社殿のほうへ、猿ましら上のぼりに急いだらしい。

「おかしいなあ、どうも妙だぜ」と万吉。杉の後ろから出てきて、ギユツと自分の耳みみたぶ朶をつねっていた。例の探たんさくくせ索癖で、それからそれへの幻想が暗示を描いてやまないのである。

「どう考えても、ただごとじゃねえ。何かおかしなものが、この山に包まれているぜ。気というやつだ、魔気か悪気か妖気か殺気か。旦那は、そんなふうに思いませんか」

「ははは、すっかりさっきの侍に脅おびやかされたな」

「笑いごとじゃありません。これだけは、万吉が、持って生れた訳じゃねえが、十何年間、十手で飯を食ってきたお蔭に、自然と備わってきた勘なんで。何かこう、ひとりでに、頭へピーンと来ること、今まであんまり間違ったことはねえんです……。おッ

と、いけねえ。また目明し根性が出やがった。旦那、今のは冗談
ですぜ」

いつか、二人の降りてきた道は、風の騒がしい竹林をうねって
いて、草鞋わらじの裏から、やわらかな朽葉くちばの湿ッぽさがジメジメと感
じてくる。

そして、あたりの夜露に、どこからともなく淡い明りがさして
いた。見ると、竹むらのすぐ向うに一字うの堂。そこから洩れる燈
火である。

「万吉、ちよツと道を訊たずねてみろ」

「あ、誰かいるようだな」と、青苔あおこけのついた敷石を五、六歩入
つて、目明し万吉、何の気なしに時雨堂を覗のぞきこんだ。

かく
隠れ家

道をたずねるつもりで、木槿もくげの垣越しに、ふと時雨堂しぐれどうの庭先を覗いた万吉は、そこに何を見たものか、オヤと眼色を動かせて、口まで出そうになった声をのみ殺したが、とうとうそのまま、何も問わずに忍び足で戻ってきてしまった。

「どうしたのじゃ？」

咎めるように進んできたのは、暗闇に待っていた俵一八郎たわらである。万吉は、しツという眼くばせをして、ふたたび、時雨堂の奥をうかがいながら、人さし指を向けて一八郎の耳へささやいた。

「旦那……あすここに誰かいるでしょう。もう少し、こつちへ寄つてごらんなせえ。ほれ、縁側へ行燈あんどんを出して二人の男が何かしているじゃありませんか」

「いかにも、庭先へ盥たらいを出して、湯浴みゆあを終えたところらしいが、それが何と致したのじゃ」

「一人はたしかに怪我人けがです。ごらんなせえ、側の男そばが、腫れはものにさわるように、体を拭ふいてやっています。ここからでは顔までしかと見えませんが、今向うの垣根越しにヒョイと見ると、どうでしょう！ ありや待乳まちちの多市ですぜ」

「えつ、あれがか」

「天王寺や土筆屋つくしやなどで、再三見覚えている顔ですから、決して

間違いはありません」

「さすれば、側において世話をやいているほうの者は、彼の親分銀五郎とやら申す男ではないか」一八郎は、万吉から、疾とく今度のいきさつを聞いてもいたし、また唐草と待乳の二人が自分たちと同じ目的か否かは知らぬが、阿波の密境へ入りこもうとする者であることも知っていたので、偶然、これはよい者の居所を尋ね当たたと心密ひそかに欣よろこぶのだった。

「なるほどそういえば、一方は唐草銀五郎かも知れません。いつかの晩、京橋口で孫兵衛に斬り捨てられたとばかりに思っていた多市が、こんな所を隠かくれ家がにして、療治をしていようとは夢にも気がつかなかった……」と万吉は、意外な現実にはんやりとあた

りを眺め廻している。

それに反して一八郎の頭脳あたまは、怖ろしい緻密ちみつさと速度でこの奇遇ぐうの利害を考え始めた。あの二人も阿波の密境へ入り込もうとする者、また自分たちも久しく阿波の内情を探ろうとして腐心ふしんするものだ。偶然、その目的が同じ蜂須賀家にあるのであるから、打ち溶とけて話しあってみれば、必ず何か、双方の利となることがあるに違ちがいない。

一歩退しりぞいて、仮に、互の目的が違っていたとしても、これからるる尋ねて行たずこうとするお千絵様のことは、銀五郎や多市が充分詳しい筈である。とにかく一つ訪れて見よう——こう心に決めたので、万吉に相談すると、もとより万吉にも異存はない。

静かに出なおして、庭口らしい柴折戸しおりどを押し、向うでびっくりしないように、

「少々ものを伺いますが……」とていねいに声をかけてみた。

時雨堂の縁先では、銀五郎が、多市に薬風呂をつかわせて、傷の塗ぬりぐすり薬や浴衣の世話をみてやっているところだった。

「どなた様？」聞きなれない訪れに、銀五郎の眼が闇へ光ると、もう木戸を押しして一八郎と万吉が、つかつかとそこへ入ってきて、「不意に失礼なお訊ねではあるが、もしや御身おんみは、唐草銀五郎という者ではござらぬか」

銀五郎はぎよツとした。蜂須賀家の廻し者ではないかという疑念が、彼に油断のない身構えをさせた。その様子を見ると万吉も

前へ出て、

「お隠しなさることはございません、そこにいる多市さんという者とは、確か天王寺の境内で、お目にかかったことのある筈です」

「ああ」銀五郎のうしろで、多市が思いだしたようにいった。

「じゃ、あの時、俺の腰帯を取った目明しの？ ……」

「そうだ、万吉という手先の者です。また、ここにいるのは、元^も

天満同心^{とてんまどうしん}の俵一八郎というお方。いきなりこういう物騒な奴が、

お前さんたちの隠れ家へ飛びこんで来ちや、さだめし、妙に疑うかも知れねえが、決して、蜂須賀家の諜者^{いぬ}じゃありません。安心

のゆくように、まずこれをそつちへ預けておきやしよう」と万吉

は、紺房^{こんぶさ}の十手を引きぬいて、縁側へポンとほうりだした。銀

五郎は、それと唐突な客の顔とを見くらべていたが、度胸をすえたものであろう。心の落ちつきをとり戻して、

「どういふ御用か存じませんが、とにかく、こちらへお上がりなすつて下さいまし」

蚊帳かやの吊手つりてを二ふたとこ所ばかりはずして、脇差の側へピッタリ坐つた。

「これは巧く話し合えそうだ」

と、心の底よろこで欣びながら、一八郎と万吉がわらじを解いている

間に、時雨堂の別な戸口から、白い人影が静かに外へ出て行つた。

雨気あまけをふくむ冷やかな風は、秋のような肌ざわりである。白びやく

衣えの人影は、五、六歩ふみだしてから、乱雲の空を、少し気遣きづかわしげに仰いで立つ。

背丈せいのスラリとした輪郭りんかくと、手に尺八たすきを携たえているところから察しても、それは同宿の虚無僧のりづきげんのじょう、法月弦之丞と分る姿。と分る姿。

弦之丞は、やがて大津の裏の近道を抜けて湖水のほとりまで歩いていて。琵琶びわにも、今宵は底浪が立ち騒いでいて、松から松の間には茶屋の灯もなく、また涼りようをいれる人影もない。弦之丞は、かえってそれを心安そうに、携りえてきた尺八を吹くでもなく、独ひとり行きつ戻りつ冥想めいそうの闇をさまよっている。

「お千絵どのも今頃は、さだめしこの身を、どこにいるかと思うていよう……」吾とわが懊惱おうのうの無明むみょうに独りつぶやくのである。

この間も銀五郎が、涙を流して、両手をついていったではないか。

「倒れかかっている甲賀家の喬木きょうぼく、この世に頼り人たよてのないお千絵様——、それを支える力ささ、救うお方は、あなたのほかにはございませぬ」と。

その時の、自分の態度は、なんとという冷血に見えたらう。お自分は冷血だ、銀五郎のあの熱血のほとばしる頼みも、恋人の不幸な境遇をも捨てて顧みないこの法月弦之丞は、冷血ののしと罵られても、それを言い解とくことのできない男だ。

そのくせ、お千絵様という名を、自分は片時も忘れてはいない。昔にかわらぬ——いや、あの頃よりは、なおさら強い恋は不断に

燃えているのだ。

「ああ……」松の根方へ腰を落して、じつと額ひたいを膝がしらに伏せた弦之丞には、いつか、抱きしめていた尺八が、お千絵様そのもののように思いなされて、恋人の棲すむ駿河台の墨屋敷すみやしきや、なつかしい江戸の風物までが瞑めい想そうの霧に描きだされてくる。

しかし、法月弦之丞の胸には、どうしても、その愛着のある江戸の土を踏むことのできない事情が潜ひそんでいた。

そうしたわけがあればこそ、彼は、家を捨て、恋人を捨て、江戸から外の世間を、旅から旅へと漂ひょう泊はくしているのである。

帰るに帰られぬ江戸の空。折にふれ時にふれ、思慕の悩みを送る尺八の音は、お千絵様の夢に通うこともあろうけれど、銀五郎

はそれを知らなかった。いや、銀五郎のみでなく、多情多感な青年劍客法月弦之丞の心に秘めている人間苦のせつなさを知る人はないのである。

.....

弦之丞が出て行つたあと。

時しぐれどう雨堂では、

俵一八郎と万吉が、だんだんと話をすすめて、

宝曆ほうれきの変以来、

阿波の秘密を見破ろうとしてつぶさに苦心を舐な

めてきた実情を明かしたので、銀五郎も、さてはそうであつたか

と、初めて疑いを晴らして次には、自分の素す姓しょうや、お千絵様と

世阿弥よあみとの境遇も、つままず二人の前へ語ることになつた。

こう打ち明け合つてみれば、十年前に甲賀世阿弥が阿波へ入つ

た目的も、宝曆以来、一八郎や常木鴻山つねきこうざんが心を砕いていた目的も、偶然、ピッタリと一致していることが明瞭になった。

初めからすべてが分り合っていれば、万吉も、無論二人を助けたろうし、銀五郎や多市も、こんなにまで苦勞をせず、今頃は、首尾よく阿波へ入り込めていたのかもしれないのだが、見返りお綱に、あの紙入れを掏すられた一事が、糸のもつれとなりはじめて、何もかも蹉さ跌てつしてしまったのは、よくありがちな運命のいたずらともいうべきもので、是非のないことである。だがしかし、これから先は、阿波という大きな謎の鍵かぎを握るために、どこまで、お互に力を協あせてやろうではないか。と俵一八郎は、余よの者ものをはげまして、意氣軒けん昂かうたるものがある。

病人の多市も、それを聞いて、寢床の中からニツコリ笑った。銀五郎としても、思わぬ同志に巡りめぐ会って心強さを覚えたが、また心の一部では、

「こうした人さえ世間にはあるのに、あの弦之丞様は、お千絵様の生涯を、何とも思っていないねえのかしら……」と、その冷酷な仕打を怨うらまずにはおられなかった。

今夜の宿は時雨堂ときめて、一八郎と万吉が、別な一間の床につくと、パラパラッと横なぐりに大粒の雨が吹ツこんできた。

それも時折にやんで、夜はだいぶ更ふけたらしいが、弦之丞はまだ帰らず、逢坂山おうさかやまの上あたりに、不気味な怪鳥けちようの羽ばたきがある。

関せきの明みようじん神かみの頂いただきは、無む明みようの琵琶びわを抱かかいて、ここに世を避け
 ていたという、蟬丸せみまる道士どうしの秘曲ひきよくを山風やまかぜにしのばせて、老ろう杉さん空くう
 をかくし、苔こけの花はなを踏ふむ人もない幽ゆう寂じやくにつつまれている。

ちようど、北きた関せきの裏うらが崖がけへ、誰も知らぬ銀ぎんの小鳩こつぐが下くだりた頃ころ。
 その、蟬丸せみまるのように瘦やせた老禰ねぎ宜ぎが、社家しゃけの一隅いっくよくに、わびしい晩
 飯ぜんの膳ぜんをすえて、箸はしをとつていと、

「こりや、誰かおらぬか。ここの神かみ主ぬしはおらぬか」
 表口うらぐちに、ぬツと立たつた自来也じらいや鞆たもとの武家ぶけがあつた。

あわててそこへ出でた神主かみぬしが、蚊ぶんばしらの立たち迷まう中なかに立たつた侍ざむらい
 をみると、面おもては眉まゆ深ふかく熊谷くまが笠がさにつつま、野の袴ばかまに朱色しゆしきを刻きんだ

自来也鞘、いっこう見かけた覚えもない者であつた。

「どなた様でござりませうか。まず、こちらへお掛け遊ばして」
「いやいや、ここでゆるさツしやい。実は少々頼みたいことがあるのだが……」と、武士は、笠の顎あごを上あの山へ向けて、「あの頂に見える、蟬丸神社の額堂かくどうを、今夜だけ、借りうけたいと思うが、別に差しつかえはあるまいな」

「ほう額堂を？ ……」と、神主は少し変な顔をして、「いつもあの通り空あいておりますものゆえ、別にさしつかえはございませんが、一体何にお用いあでござりますな」

「不審つめに思うであろうが、実はこうじや。身どもは大阪表のある蔵屋敷詰つめの者であるが、同僚たちと語らつて、何ぞ趣しゅこう向こうの変つ

た連歌れんがの催しをやりたいというところから、この山の額堂ならば、雅味がみもあり、静かなことはこの上もないので、是非、今夜だけ借りうけたいと申し合せてまいったのだが」

「ああ、なるほど、連歌の運座うんざでござりますか。それはご風流なことで……さようなお催しならば、どうぞご遠慮なくお使いなされて下さいませ」

「早速の承知でかたじけない」

「また、御用とあれば、渋茶ぐらいは、ここよりお運び申してさし上げます」

「勝手のようなだが、それは固く断りたい。静かに連歌の三昧さんまいを楽しみたいため、わざわざ不便な所へきたのじや。今夜だけは、

誰か他の者が山へまいっても、これから先へは上つて来ぬようにして貰いたいの」

「ごもつともでござります。では、お邪魔をせぬことにいたしますゆえ、どうぞごゆるりお催しなさいまし」と、神主は立ち去る武士を見送つて、何の疑心もなく、また膳へ戻つて茶漬はしの箸をとりはじめた。

社家の門かどを離れた自来也鞘の侍は、神主へ一応の念を押しつけて、安心したように、そこからなお、右折左折、苔こけしみず清水に濡れた石段を上つて、やがて、神さびた額堂の方へスタスタと歩いて行く。半なかば朽くちかけた額堂の欄間らんまには、琵琶びわを抱いた蟬丸の像や、関寺小町の彩画や、八景鳥瞰けいちようかんの大額おおがくなどが、胡粉ごふんに雨露うろ

の氣をただよわせ、埃ほこりと蜘蛛くもの巢うちの裡うちにかけられてあつた。

しかし、それは、昼ここを訪れた人の見られるもので、今は額堂全体も四圍いの山もトツプリ暮れて、社家の方から、大股おおまたにここへきた武士の影は、すぐ額堂の濃い闇の中にかき消えてしまつた。

と思うと、低い幾人ものささやきが、自然に声を高めて、そこからガヤガヤと洩れだした。よく見ると、額堂の中には、少なくとも二十人以上と思われる人数が、あぐらをくみ、柱にもたれ、欄らんに倚より、思い思いなかつこうをして怪異かいな集合をしているのだつた。

神主へ断つてきた言葉のように、妨さまたげのない額堂の席を、夜やりよ

涼うの山嵐さんらんをほしいままにして、連歌の競きようえい詠えいを試みているのかと思うと、闇の中に、眼ばかり光らしている武士たちの顔には、みじんもそんな風流気は見えず、一人として筆をかみ句を案じているような者はない。

片隅でムクムク動いている者があれば、それは用意の黒布こくふを出して、顔の覆面や足あしごし拵あしごしらえにかかっている者で、中には腰の咬こ刀とうを抜き払って、刃こぼれをあらためている者がある。

すると、北関きたせきの崖の方から、またここへ攀よじ登のぼってきた七、八人の覆面がある。中に先立さきだった一人の武士、額堂がくどうの下から、「天堂てんどう氏うじ、天堂てんどう氏うじ」と呼びたてた。

「おう……」と、すぐ欄干らんかんから身をのばしたのは、自来也鞆らいやたもの

武士……すなわち蜂須賀の原土天堂はらし一角であつた。

「や、森氏うじか——」とうなずいて、一角は、額堂の上からそこへ降りてきた。

裏崖から、ここへ登つてきた中には、お船手ふなての森啓之助と九鬼弥助がまじつていた。いずれも、同じように覆面しているので、夜目には互いの間にも、それが誰かさえ分らない程である。

「時雨堂しぐれのほうは？ ……」

「別に変つたこともないようです」

「銀五郎やその他の奴、よもや、こつちの手廻しを、気づいてはおりますまいな」

「そんな憂うれいは万々ござりませぬ。ちょうど、夕刻から今がたし方で、北関の裏から見張っておりますが、向うは何も気がつかずに静まり返っておりまする」

「では、完全に袋の鼠だ……。まず、もうしばらくの間、あの額堂で、夜の更けるのを待つと致そう」

「しかし、天堂氏……」その時、横から話頭をかえてでたのは弥助である。「ただ一つ、これへ帰ってくる途中で妙な奴に出会いましてな」

「妙な者に？」

「されば、どこから飛んできたものか知らぬが、鳩に結ばれてきた薄紙を解き、しきりにそれを読んでいる奴がござりました」

「何かの書物で見たことのある、伝書鳩を使う者ではあるまいか」
「あるいは、そうであつたかもしれないませぬ。とにかく、怪しい奴と睨みましたので、ツカツカと側へ寄つて、じつと挙動きよどうをみつめておりますと、格別、あわてて逃げる素そぶりもなく、そのまま山を下りて行く様子。引ひつ捕えてみるまでもないと、その場はやり過ごしてしまいましたが、どうも、今になつて考えると、少し不審がないでもないように思われます」

「そして、風態ふうたいや年頃は」

「一人は旅装たびよそおいの三十二、三、これは武家態ていでござつて、一人は弁慶べんけい格子ごうしの着ものを着た町人でござりました」

「拙者にも思い当りはないが……なんでも、御本国の様子を探ろ

うとして、密かに苦心している天満浪人の何某とやらいう者もあるという噂、そいつを逃がしたのは残念だったな」

「その代りに、彼奴がこつちの姿を見かけた時、あわてて草むらへちぎって捨てた薄紙を、後で拾ってまいりました。しかし、あいにくと星かげもなく、それを読む明りに窮しますので、啓之助殿が大切に持つておられます」

こう話しあつているところへ、息を喘ぎながら、森啓之助の仲間が飛んできた。目明しの万吉と一八郎が、麓へ下る山の道で姿を見た男というのは、ちようど、時刻から考えあわせて、この仲間であつたことに間違いはない。

森啓之助が、川長へ行つた日。お米の駕をつけて、時雨堂の隠

れ家をつきとめたのも、啓之助の働きではなく、この仲間の気転だつた。そこで、天堂、九鬼、森の三人は、各 《めいめい》八、九人ずつの侍を連れて、この関の山に集まり、今度こそは、水も洩らさぬような手配りの下に、怪しい虚無僧、阿波の国内をうかがおうとする銀五郎、多市などを、余さず引つ捕えようとするのである。

七、八年前から、阿波の領境を封じて、かりそめにも、領土の内状をうかがおうとする者には、恐ろしく神経を尖らせている蜂須賀家では、今日までの間、銀五郎以外の者でも、ずいぶん仮借なく縛り上げて、その目的を糺さねばやまなかつた。しかし、それを遂行するにも、白昼公然ではなく、いつも、夜陰、

あるいは人目のない所で行われるので、世間は知らないが、家中では、そういう嫌疑者の多くを上げてくる事が、すこぶる誉れほまであり、殿とのの首尾もめでたかつた。

なぜか？ ということは、この物語の進むにつれ、また、阿波の本体があばかれると同時に、おのずから明瞭になるであろう。

それはとにかく、啓之助の仲ちゆうげん間まが、今も、細かに時雨堂の様子を探ってきたところから、時分はよしと三十人近い黒装しやうぞ束く、一度にムクムクと立ち上がった。

裏道を下りて、女おんなざか坂かの中途から右へ入ると、もう五尺と隔へだてては人影の見えない山神やまがみの森。そこを、ちりぢりに降りて、例の竹林へ入ると、やがて、この辺りにただ一軒の時雨堂の灯が

見える。

「しッ……近いから静かにしろ」

「誰か、向うの空地へも忍んでおれ」

「心得た……。合図は？ 手筈は？」

「天堂氏が、声をかけたら一度に斬りこむんだ」

こんな声が、笹の葉の音よりかすかに、ささやきあつて、黒い影が、ヒラ、ヒラと地を掠り、いつか一人も見えなくなる……。

夜は深沈と更けた。

嵐の前のおそろしい静寂。

空には、団々たる雲のたたずまいがあり、ここには、時雨堂

の四方に、姿も息もひそめきつて、時刻を待ちかまえる覆面の群れ。

と——その中からただ一人、ソロリと庭へ這いこんで行つたのは、真ツ黒ないでたちをした弥助だ。

背よりも高い南天の株から、ポロポロと夜光の露がこぼれたかと思うと、弥助の体は墓がまのように、戸袋の裾すそから床下へ這つた。

上から洩れる話し声……

銀五郎に多市、それと折悪しく宵にここへ来あわせた俵一八郎と万吉の話し声。それはきわめて低い密話だったが、弥助の耳には、手にとるように聞こえてくる。

九鬼弥助は、自分たちの手廻しがいたずらでなかつたことを得

意に思った。さらに、それからそれへと洩れてくるささやきは、想像以上の驚きを彼に与えた。

「オー、これは大変な相談をしているわえ。もし吾々が、気づかずにいようなものなら、お家の破滅を招く由々ゆゆしい大事となつたかもしれない……」顔の蜘蛛くもの巣のを除けながら、なおも根こんよく息を殺している。

そこで、俵同心と銀五郎の打ち明け話は、残らず弥助が聞いてしまった。

「ちようどいい！ お家の秘密をうかがう奴めら、今夜を期して一網打尽もっだじんだ」

心のうちで叫ぶのである。

さらに、何より好都合だと弥助が喜んだのは、今夜に限って、あの虚無僧が居あわせないことだった。

「あいつばかりはなんとなく怖ろしい——」と、腕利きの天堂一角すらも、二の足を踏んだので、ぎょうさんと思われるほどな、若侍の人数をすぐってきたのであるが、誰より怖れていた雄敵が欠けているとすれば、これに越したことはない。

刻、刻、刻。

一瞬の空気は、いやが上にも静かだった。

時雨堂の者は、ちようど、台風を中心にあるようなもの、見えない魔のかけ、感じがたい運命の気流が、尺前へ迫り、寸前に囲繞しつつあるのだ。

けれど、勘の鋭い万吉も一八郎も、話に実みが入つて、それとは夢にも知らなかつた。あまり夜更よふけては病人に悪かろうと、また明日あしたの打合せを約して、二人は別間の寢床へ入つた。

銀五郎は一人でそこらを片づけたり、多市に蒲団ふとんを掛けてやりなどして、何気なく縁側から空を仰いでいると、パラパラと大粒な雨！ 黙もだしぬいていた闇の一角から、にわかには、気味の悪い冷風がサーツと一陣に揺すり立ててきた。

「あ！ とうとう降り出してきやがツた」

多市の枕元まで吹ツかけてきそうな雨に、銀五郎は、あわてて、一、二枚雨戸を繰りだしたが、まだ何か不安そうに眉をひそめて、戸の間から外の様子を眺めまわした。

「困つたなあ、ひどい雨だ……」

青白い稲光りが庭を照らした。

げんのじょう

「弦之丞様は、どこへ行つておしまいなされたのだろう。ちよつと声をかけて行けば、一走り傘を持って行つてあげるのに、町ならいいが山へでも行つたとすると、この雨にズブ濡れだろう。

どうかしているぜ、弦之丞様は……妙にこの頃めいつているし、俺にもロクに話しかけたことがねえ……」

吹ッかける雨に向つてつぶやいてみると、縁の下の九鬼弥助は、その戸がピツタリ閉まらないうちにと、ジリジリと、銀五郎の足もとへにじりだしてきた。

そつと体を横に捻ねじつて、床ゆかした下から上を覗のぞくと、銀五郎の半身

は、濡るるを忘れて、弦之丞の帰りを気づかないながら、また独りごとを洩らしている。

「ひよつとしたら、この間、俺おれがあまりくどく頼んだので、それを気にしているのかしら？ それともお千絵様がさすがに恋しくなったのかな。いやいや、お千絵様の身を、それほどに思うお人なら、あれまでの俺の頼みをウンといわねえ筈がない。ああ、もう頼むめえ。頼むめえ。いくら腕のできる弦之丞様でも、薄情ときちやアしかたがねえ。俺はどこまで一本立ち……。いや、捨てる神があれば助ける神だ、思いがけねえ人たちと力を協あわすことになつたから、弦之丞様はあてにしねえで、この銀五郎の一心で、キツと阿波の内幕を探ってみせる！ お千絵様の身もお幸しあわせにし

てみせる……」

思わず、吾とわがつぶやきになみだ涙ぐまれて、男らしい唇くちをきつと結んだ。——と九鬼弥助は、その時、油断のない眼くばりで、すぐ銀五郎の足元から、口に手を当てた作り声で、

「唐草の親分……」

と、名を呼んだ。

らんじん
乱刃

「唐草の親分」

不意に、床下から呼ぶ者があるので、銀五郎はぎよツとしたが、

すぐに、自分にも似に気げないおびえざまを恥じて、「誰だ」と、少し、身を屈かがめた。

怪しい者なら、向うから声をかける筈がない。この附近の竹林に住んでいる物乞ものごいに、二、三度食べものを恵んでやったことがあるから、そのお菰こもであろうと気をゆるした。

「唐草の親分」

九鬼弥助は、また作り声で呼んでから、反対に、ジイと床下に身を退ひいていた。そして、肱ひじと右足だけを、のめるように前へ出していた。

「誰だつていうのに、変な野郎じゃねえか。そんな所へ潜もぐり込まれちや迷惑だぜ、ええオイ、おおかたいつものお菰さんだろう」

「へ……」

「へえじやねえぜ、今頃来たって何もありませんねえ」と、銀五郎は覗のぞきもせずに行ったが、ふと思いついたかの様子で、

「あ、そういうやお前は、あの虚無僧の姿を宵に見なかつたかい。この雨に、どこかで降りこめられていると思うんだが、知っていないなら、傘を持って行って上げてくれないか」

「……………」

「知らねえのか」

「知っています」

「知っているなら頼まれてくんねえ。よ、後生だから」

何の気なしに、釣り込まれて、銀五郎の片足が、庭下駄へ下り

ていった途端である。

柄つかを握りしめて、根よく、力を撓ためぬいていた九鬼弥助。

「ええいッ！」

横よこなぎ薙なぎに一刀を払った。

床下からではあるが、十分、居合いあいの肱ひじが延びて行つたので、鞘さやを脱した咬こうとう刀は、刃を横にして銀五郎の片足——浴衣ゆかたの上から返り血の飛ぶほどな傷手いたでを与えた。

不意を打たれた銀五郎は、

「あッ——」といって、片足を引く気が、傷手に堪たまらず、体ぐるみ、どうツと、雨の降りそそいでいる庭先の闇へ転げ落ちる。

が、弥助の太刀たちが、肉へ斬り込まれてくる前に触れた浴衣すその裾

は、時にとって、大きな障害物となっていた。傷は骨まで届いていない。

「ちツ……畜生ツ」

よろよろと立ち上がった。

「ちツ……ちツ……」と深ふかもも股の傷を押さえながら一心に、脇差をとりに行こうとするらしいが、何せよ深ふかで傷だ。一、二歩よろめいたかと思うと、ふたたび、どうと仆れ、浴衣の影は、雨と血と泥にまみれて、雨に白く、無残なもがきが見えるばかり……。

「む……」

九鬼弥助は、したり顔をして、要ようじん心深く床下の土にへバリつきながら、片手に抜ぬきみ刀をつかんだまま、もういつそう、奥の方へ、

ジリジリと身を退ひいて、その様子を見届けていた。

サーツと、地を払ってゆく雨の飛沫しぶきが、濛々もうもうと、霧のように

白くたちこめた。時雨堂しぐれどうの破れ底やびさしからは、滝となつて水玉あふが溢

れ、半なかば開け放されてある中の灯ひは、消えんばかりに揺らめいて
いる。

「どいつだツ……卑怯ひきようなやつ……、多市、多市」

降りしきる雨の中に、銀五郎の叫びが切れぎれにするのだった
が、叫ぼうとする息も、起きようとする懸命はいぜんも、沛然はいぜんたる雨の
力に圧倒されて紫陽花あじさいのように気崩きんすれてしまう。

出来ごとが、あまり瞬間だったので、奥の居間に入った俵一八
郎も万吉も、少しもそれを知らず、ただ、屋根を走る疾風しつぷうの雨

の声に、顔を見合せていたのである。

だが、たつた今、銀五郎の手で寝せつけられた多市は、何かを感じて、

「おや？」と、胸を騒がした。そして、不自由そうな身を蚊帳かやの中からいざり出しながら、

「親分、親分！ ……」

呼んでみたが、返辞はない。

閉めかけていた戸もそのまま開いている。

戸の間から、外の暗澹あんたんたる凄せい色しよくが、悪魔の口のように見

えた。吠ほえたける風の中に、まつ青な稲光りが明滅していた。

「どうしたのだろう？ そういえば今、妙な音が……」多市の顔

色に、泣きだしそうな不安が掠かすった。もしや？　と思わず縁側までペタペタと這ってきて、

「親分ツ……親分ツ……」

肉親のものを案じるような、悲痛な声で呼びたてていた。

「万吉」

「なんですか」

「誰かしきりに、大きな声をだしているようではないか」

「へ、どこですか？」

「向うの部屋らしい。この大雨の響きにまぎれているが、今、少し落ちついていると、さような気がしてならぬのだが」

「そうかしら？ ……おや、なるほど、親分親分と呼ぶ声がしますね、何だろう」

「最前の席にいた、病人の多市と申す者ではあるまいか」

「そうかもしれません。だが、おかしいな、なんだって大きな声で喚わめいているのだろう」

奥の部屋へ入って、帯を解ときかけていた一八郎と万吉は、棒立ちになって、じつと聞き耳たてている。

憂いをおびた多市の声が、今度は、廊下の近くで、二、三度つづけざまに聞こえた。

「旦那」万吉は、眉に深い皺しわをよせて、声をのむように相手の顔をみつめる。

「また妙なことをいいだすようですが、どうもわっしは、宵から胸騒ぎがしてならねえんです。あの関の山を下つてきた時からそうなんで……、なにしろ気をつけるこつてすぜ」

「銀五郎が怪しいと申すのか」

「いや、あの人たちに毛頭疑うところはねえが、明神の裏崖で逢つた侍が腑ふに落ちねえ。ことによると、銀五郎へ目星をつけて、早くも蜂須賀家の奴らが立ち廻っているかも知れませんぜ」

その言葉も終らぬうちに、いよいよはつきりした多市の声が、物狂わしくまた聞こえた。

「親分がいねえ。親分ツ……」

「どうした！」

帯を締めなおして、二人がバラバラと元の部屋へ駆けだしてみると、縁先から畳まで、吹ツこむ雨にビツシヨリ濡れ、今にも消えなんとする灯影ほかげに照らされた多市の姿が、障子に縫すがつておろろしていた。

「親分が……親分が見えません」

「銀五郎が見えぬと？」一八郎は声を弾はずませた。

「たツた今、ここで」

「おう、戸を閉める音がしておったが」

「と思うといつの間にか、姿が見えなくなつたんです」

「やつ」外を覗のぞいていた万吉が、仰ぎょうてん天して、飛沫しぶきの庭へ、行あ

燈どんの光を向けた。

見ると、雨の中に、何やら白いものが倒れていた。銀五郎の浴衣^{かた}である、傷口から血の流るるに任せたため、あたりを血の池のように染めて悶絶^{もんぜつ}してしまつたらしい。

「あつ……」というと、多市の顔はまるで死人だ。万吉と一八郎とは、意外な変を見ると同時に、なんのためらいもなく、ザツとかかる雨をうけて、庭先へとび降りた。

降りた途端に、万吉の肩が、腐れた雨戸を衝いたので、一枚の戸が、屏風^{びょうぶ}風^{ふう}仆^ふしにころげ落ちた。

「お！ 斬^やられている」

「銀五郎ツ、気をたしかにもて」

一八郎が抱き起こし、万吉が耳に口をつけて呼ぶ間も、雨は仮

借なく横なぐりに降った。

「これッ、銀五郎、銀五郎」

「ううむ……」

「気がついたか、急所の傷ではない、心を緩めてはならん」

「佯様……」銀五郎は、その手を借りて懸命に立ち上がりながら、かつと四方を睨め廻した。

「わっしのことに気をとられて、ご油断なすつちやいけません、蜂須賀家の手が廻っています」

「やつ、蜂須賀の？」

その時であった。

床下に潜んで、頃合を計っていた九鬼弥助は、ふところから

用意の呼笛よびこを出して口にくわえた。

緩いゆる——しかし物々しい呼笛の音が、床下から、四方へピリピリと鳴り響くと、たちまち、庭手の三人を取り囲んで、真つ黒な影が乱れ立った。

細く白い刃やいばのかげも、人に添って、あつちこつちに閃々せんせんと動き、早くも切ツ尖さきを低く泳がせて、狙い寄ってくる覆面もある。

「ちえツ、足がきかねえ」と、面前の敵に齒がみをする銀五郎をかばって、俵一八郎は、さすがに落ちついていた。

「万吉！ 油断いたすなよ」

「おお、こいつだ。宵から虫が知らせたなあ！」と、万吉も、内うち懐ちぶとこころの十手をつかんだ。

輪をなしてきた人影が、等しくジリジリと輪をちぢめて、魔刃ましんのそよぎを詰めよせてきた時、どこからか、

「待て」

と、鈍どんじゆう重ゆうな声が走った。

立ちすくみに、身を構えていた三人が、ふと眼をつけると、庭の一方大樹のかけに、雨を避けつつ見張っている自来也じらいや靴ぎゃ。

いうまでもなく、天堂一角である。

一角だけは、覆面をせずに、野ばかまの高たかもも股ももだち。その側そばにいて、鯉こいぐち口をつかんでいるのは森啓之助であろう。

「おう、それなる三名の者……」

傲岸ごうがんな調子で吠えかけた。もう縄にかけた囚めしゆうど人扱あつかいである。一角の言葉は、ピューツという風雨が横から声をさらって、ちぎれちぎれに掠かすれて聞こえる。

「もう駄目だ！ 諦あきらめて後ろへ手を廻してしまえ。いわずとものことだが、吾々は、蜂須賀阿波守にさし向けられてまいった者、生殺せいさつ与奪よだつの権があるぞ、ジタバタすれば弄なぶり殺し——」

「だまれッ」

だしぬけに、俵一八郎、それを遮さへぎって、きびしく言い返した。「阿波守が何者である、蜂須賀家じゃとて、かような狼藉ろうぜきを、無辜むこのものに加えてよいか」

「ふん……」というように、一角の白い歯が闇の中に剥むいてみえ

る。

「白々しいことを申すな！ 阿波の侍従重喜公、おそれ多いが名君でおわすぞ。いわれもなく、何でかようなことをするものか。その科は汝らの胸に覚えがあろう。申し開く筋があるなら、とにかく安治川のお下屋敷へきた上にいたせ」

「いや、なんと申そうが、この方どもは、さような所へ引かれてゆく覚えがない」

「阿波の御禁制を犯し、お家の内秘をのぞこうとする不敵な大罪、言いのがれはかなわぬ」

「禁制とは阿波領だけの禁制で、よも天下の大法ではござるまい。ここは天領、すなわち將軍家の御支配地、一国の太守にすぎぬ阿

波守が、掟おきてよ呼ばわりを召めさるいわれがない」

一八郎の弁舌は、さすが同心役を勤めていただけに練れていて、理の明めいせき晰と語気の鋭さが一語一句にひらめいている。

「ましてや吾々として、また阿波の禁界をふみ越えた覚えもなし、内秘を探ったこともござらぬ。それをしも疑心暗鬼に見らるるににおいては、なんぞ御当家には、それまでも世の耳目じもくをおそれる秘密ひみつがおりとみえる」

痛いところを罵ののしった。

いかにも、阿波以外の領土で、阿波の国禁を無碍むげにふりかざすのは暴ぼうの限りである。

けれど、もとより、その暴と権力が、横行し濶歩かつぽした時代。天

堂一角のごとき、暴をもつて禄ろくを食はみ、暴をもつて誇りとする原は士らし氣か質たぎが、そんな条理に耳をかすべくもない。

「よし！ 問答無用」

こういふと、彼は、もの蔭から手を振つて、

「それッ、江戸の廻しもの唐草銀五郎、またしきりにそこらを嗅かぎまわる天満浪人てんまや、手先の犬どもを、一網打尽もうだじんにしてしまえ」

「あつ」といふと、ムラムラと動いた覆面の影が、一度に八方から喚わめいてかかる。

「何をッ」といったのは、万吉であろう、寄つてきたのを、真ッ先に、イヤというほど十手で撲なぐりつけた。

おお！ ええ！ ともつれあう声の乱打らんうち。人と人、劍と劍が、

ただ真ツ黒に渦巻いた。

雨は少し小やみになって、チラとほころびた乱雲の隙間から、カーツと空の明るみが射し、一瞬、目ざましい剣の舞を描いてみせた。

だが、雲の閉じるとともに、それもまたたく元の闇——、修羅しゆらの叫喚きようかん、吹きすさぶ嵐。

しばらくすると、その渦の中から、

「ううむ、残念！」一八郎の絶ぜつきよう叫せうが聞こえた。

「あつ、だ、旦那」

「万吉、拙者にかまわずここを落ちろ」

「逃がすな、あいつを！」

群むらがつていた人数が二ツに割れた。

一方は、長蛇となつて万吉を追いかけて、残つた人数は一八郎へ折り重なつて繩をかけた。

銀五郎はどうしたろう？

時雨堂の灯が消えたため、多市の様子も分らない。

万吉は、垣を破つて逃げだした。と——その時だ、すさまじい大音響が時雨堂の庭先にあたつてしたのは。

鼓膜こまくをつきぬかれて、あツ、と思つた一同の眼先へ、一条の朱し電いでん！ピカツと見えた火の柱。

落雷だ。今しがた、一角が立っていたあたりの大おお櫓おけが異臭やきを放つた。刹那せつな、すべての姿が一度に大地へうつ伏してしまった。

人の暴を超えた自然の暴力。

虚空こくうには、幹を白くみせて大樫がダラリと裂け、寂寞せきばくとして
しまった大地を嘲あざけるように、遠雷とわかみなり鳴はゴロゴロとうすれゆく。

一番船

今しがた二、三カ所へ落雷があつてから、嵐の空はけろりと霽は
れて、研とぎ出された半月のかげが、蒼黒い湖水の狂浪をすごいば
かりに照らしていた。

打出うちでヶ浜はまの松原にも、あなたこなたに、根こそぎにされた痛ま
しい松の木が見える。

幾軒かの掘立小屋が、その辺に散在していた。打出瓦を焼く
 瓦師かわらしの小屋である。

人は住んでいないとみえて、松と松との間に、その小屋は見えても灯影ほかげはなかったが、やがてどこかで、

「オオひどかった……」と、つぶやく者がある。

見ると、瓦小屋かわらこやの軒下のきしたに立って、ビツシヨリ濡れた着もの裾すそをしぼりながら、久しぶりの月に思わず眼を吸われている風ふう情せい。

見返りお綱であつた。

月の光をうけた鼻すじが、なんといいかたちだろう。

髪も少し濡れたとみえて、ほつれ毛の渦うずが、象牙ぞうげの白さへペツ

タリとついているのを、指で梳かいて櫛くし巻まきの根へなでつけながら、
「困ったねえ……とうとう今夜は宿をとりそこなつてしまった。

こんな御難に会うというのも、みんなお十夜のため、あんな奴こそ、さツきの雷かみなりにうたれて死んでしまえばいいのに」

腹立たしそうに独り言ごごを洩らしている。

すると、そこから六、七間離れた向うの小屋にも、誰か人影が立っていたので、お綱は、なんともつかずにぎよツとした。

執念深いお十夜かと思つたのである。だが、まさか……と思ひなおして見ると、先でも気がついたとみえて、チラとこつちへ顔を向けたが、別に気にとめる様子もない。

お綱は、今の動悸どうきの消えないうちに、またあわただしい胸騒むなさわ

ぎを重ねた。けれど、それは前の不愉快な驚きではなく、あまり不意に与えられた喜びの狼狽ろうばいであった。

人違いではないかと、いく度たびも心を落ちつけて見直したが、やはり自分の錯覚さつかくではない。時雨堂しぐれどうの虚無僧である。一節切ひとよぎりの主ぬしである。今も手にはその尺八しゃくはちを持っているのが紛れまぎのない印しるしだ。

「どうしてあの人ひとが、今頃こんな所にいるのかしら……」お綱は不思議に感じたが、尺八しゃくはちを携たずさえているのから見るに、この打出ヶ浜へそぞろ歩きに出て、自分と同じように、雨宿りあまどまりをしているのだらうと推量した。

しかし、それにしてもあまり夜が更けすぎている。自分はお十

夜の眼から遁れるのがため、わざとこの松原に姿を隠し、もし矢走やばせへ出る渡船わたしがあつたら、草津あたりで宿をとろうと考えている間に、今夜の大嵐おおあらしに逢つて退ツの引きびならなくなったのだけれど、あのお方はなんだつて、今頃こんな淋しい所にぼつねんとしているのかしら？ と、法月弦之丞のりづきげんのじょうの悩みを知らぬお綱には妙に思えた。だが何よりも、こうして意外な人に逢えた機縁うれの欣うれしさに、胸の裡うちはいッぱいだつた。

何とかして、声をかけてみたい、かけられてみたい、と心はわくわく燥さわぎ立つが、どういつてよいものやら、いつて悪いものやら、默然もくねんとしてゐる人は、いつまでもつれなく機会をつかませてください。

じつと目を眺めているが、お綱はしどろになって思い乱れた。

乳のあたりで痛いほどの血の響きがする。ええ、どうしたんだろ
う私は！ と口惜しさ悩ましさにじれてみても、喉^{のど}まで出そうに
なる言葉が齒がゆくも心の奥へ掠^{かす}れてしまう。

「こんないい折はありやしない」と知りながら、みすみす恋に意
気地のない自分を、お綱はどうにもしようがなかった。

男を男とも思わず、他人^{ひと}のふところの物さえ神技^{かみわざ}のように掬^す
りとるお綱に、こんな女らしい悶^{もだ}えがある。

その女らしい苦しみを、お綱もこの頃初めて知った。よほど変
則^おな生^おい立ちに今^{こんにち}日まで紛^{まぎ}れていたものが、悪土^{あくど}の中から芽^めを
吹いたのだ。性格、本能、すべてがグングンと伸びきって悪の花

を咲かせてしまった年頃まで、たツた一つ、純な芽生えを忘れ残されていたのは、まことの恋——それであつた。

世間にすれていて男にすれず、男にすれていて恋にはすれていない——見返りお綱も、今度こそは、その恋の試練にかけられねばならぬ。

「いい按配あんばいだこと、明日あしたもこの分で晴れてくれると嬉しいけれど……」

やつとの思いでお綱がいった。

いったけれど、それは弦之丞へ話しかけた訳ではない。こう呟つぶやいたら、向うでそれを緒口いとぐちにして、なんとか声をかけて下さりはしまいか——というはかない頼みの溜息ためいきなのである。

瓦小屋の柱に凍りついてしまったように、お綱はジツとして動かなかつた。

「ひどい雷鳴でした……」とか、「お一人でございますか」とか、今に向うの瓦小屋から、弦之丞が話しかけてくれはしまいかと、きまり悪さの物騒ぎを押さええている。

「小娘でもない年のくせに、私はなんていう初心なんだろう」
お綱は、急に自分がいとしくなった。

こないときしい吾身を、初めて見出したように、自分と弦之丞の姿とを、偷みめにそツと見くらべたお綱の素ぶりには、あばずれた所などは塵ほども見えず、まったく、純なはにかましきだけ

がこぼれていた。

義仲寺ぎちゆうじの鐘であろう、大きく八刻やつを打った。

打出ケ浜の波音にまじって、鐘の余韻よゐんが遠くうすれて行くと、弦之丞はフイと立って、向うの瓦小屋から歩みだした。

その人にはまたその人の懊惱おうのうがある。行くに行かれぬ江戸を偲しのび、逢うに逢われぬお千絵の境遇を偲しのびやって、帰ることも夜更けたことも忘れていたが、四更こしやうの鐘を聞くとにわかにな気がついたものである。弦之丞の白い姿が、松の間を縫ぬってピタピタと帰りかける。

はかない頼みがぷつぷつ切れて、お綱はハツと悲しくなりながら、

「あつ、もし……」

われを忘れて呼んでしまった。そこにたたずむ女のあることを、あらかじめ知っていたので、弦之丞は別に意外なさまもなく、松を隔てたすぐ前に足をとめて、

「なんでございますか」

静かに、にべもない返辞でふりかえった。

「あの……」お綱の唇は、いつにも似ずワナワナふるえて、われからいふべくあまりに舌がもつれがちである。

「あの、もしやあなたは……」といいかけてから、しどろになつて後の言葉を探したように、

「もしや今日の日暮方ひぐれがた、あの時雨堂で、一節切ひとよぎりを吹いておい

でになったお方ではありませんか」

いぶかしげに、女を見つめていた弦之丞は、月に隈くまどられた顔をニツコとさせて、

「ようご存じ……。気まぐれな手すさびゆえ、人に聞かすべきものではござりませぬ」

「いえいえ、ほんによい音色、関の山で聞いておりますと、骨身に沁しみるようでした」

「お身も尺八がお好きとみえるの」

「深く聞くことは存じませぬが、ただわけもなく好きなのでございます」お綱は自分でも気がつかない間に少し流りゅう暢ちやうになりながら、「殊にあなたの宗長流を立慶河岸りっけいがしで初めて聞いた晩から、

もう妙に心をひきずられて……あれから後も、どんなに音色をお慕^{した}い申ししていたかしれませぬ」

「お……」弦之丞は五、六歩寄つて、「ではあの時、酒に酔つた阿波侍が、無礼にも二階から拙者へ金を浴びせ投げた後で、お呼びなされた女客というのは？ ……」

「はい、私でござりました」

眼のやり場にうろたえながら顔を赧^{あから}めている女の様子に、弦之丞は初めて注意するのであつた。しかしその身装^{みなり}や肌^{はだ}合^{あい}は、どうみても、この辺の者らしくなく、江戸の下町に見馴れたつくりである。

櫛^{くし}巻^{まき}や小^こ柳^{やなぎ}帯の引っかけで、いけぞんざいな身仕舞^{みじまい}なのが、

お綱は、その人だけに気がひけた。ともすると、自分が女^す搦^{すり}摸^もだ
という奥底まで、弦之丞の涼しい眼に見透^{みとお}されはしないかと怖ろ
しい気にも襲^襲われる。

お綱が話を途切^{とぎ}らすと、弦之丞もまたいつまでも、取りつきに
くく無口でいた。

ザブン、ザブン……と、打出ヶ浜に寄せ返す波も、冴^さえ過ぎて
冬に似る月の寒さも、恋に意気地のないお綱の心を縮ませるばか
りである。

虫の知らせか、弦之丞は、その時なんとなく、早く時^{しぐれどう}雨^う堂^{どう}へ
帰らなければ、銀五郎や多市が、さだめし案じているだろうと思
いだされてきた。

いつまでたつても、二人の仲に、何も結びつけられてこないの
で、ともすると相手がそこを立ち去りげに見える。それをやるま
いとしてお綱はまたあわてて話しかけた。

「お言葉の様子では、あなたも江戸のようでおいでなさいますが」
江戸と聞くと、弦之丞もついで心を惹かれて、

「お察しの通りであるが、すると、お身も江戸であるとみえるな」
「はい、本郷妻つまごい恋でござります。一人旅にひけをみせまいと、
わざとこんな風姿なりをしておりますが、挿花はなの師匠をしております
もの、どうぞおついでがありましたら、お訪ねなされて下さいま

せ」

「同じ江戸の者であつてみれば、いつかまたお目にかかる折もあるうが、少し仔細があつて、しばらく江戸へは帰らぬつもり……」
「おや、なぜでございますか」

「なぜということもないが、旅が気まままでござるからのう……」
「いえいえ、旅もようございませうが、江戸の住心地すみごちも捨て

たものではございません。山の手のお屋敷町は知らぬこと、下町の小ぢんまりした格子こうし作りで、朝の膳ぜんには鎌倉の鰹かつお、夕方には隅田川の白魚、夜には虫売りむしうや鮓売りすしうもきて、縁日のある町へも近く、月の晩には、二階で寝ながら將軍様のお城を眺めて、太平たいへい楽らくをいっておられるような、そんな暮しはお嫌いではございませ

か」

懐かしいものとは聞くのであつたが、弦之丞には、それとお綱とを結びつけてみても、なんの魅惑も感じなかつた。けれど、この女のなだらかな江戸言葉で、江戸の風物を語られることは、決して悪い思い出ではない。

「お武家様にしてみれば、江戸はなおさらはぶ羽振ぶりのいい土地。同じ編笠をかぶるにしても、刀の差しよう、鬚まげの結ゆい方まで、どこか違つておりますので、見る目もなんとなく頼もしゆうございます。私は気まぐれに、上かみがた方見物にきた帰りでございますが、もしなんなら、その江戸までご一緒にお帰りなさつてはどうでござりませう」思いきつて、こういつてのけてみたものの、もし弦之丞が承知したら、なんと間が悪いことだろう、道中も洒しやしや々として歩け

はしない、などとお綱は他愛たあいもない取り越し苦労までする。

弦之丞はただ笑っていた……そして不意にきつとなつた。

誰か二、三人で駈けてくる者がある。

見ると、松林を縫ぬつて、肩に月影の斑ふをチラチラ浴びて急いできた者が、弦之丞の姿を見つけると、そこへ飛んできて、

「おつ、ここにおいでなさいましたか」と息を弾はずませた。と、また一人があわただしく、

「弦之丞様、た、大変でございます」と、少し声をわななかせてつけ加えた。その者たちは、弦之丞も見知っている、大津絵師半齋んさいの店の若い男どもであった。

「大変ですと? ……」彼にも、さすがにギクとした色がある。

「な、なんといつてよいやら分りませぬ。とにかく、すぐ時雨堂へお戻りなすつて下さいまし」

「して、何ぞ異変でも起こりましたか。帰ることはすぐにも帰りますゆえ、まず落ちついて、その仔細しさいをお聞かせ下さい」

こういったのは、使いの者よりは、自分自身を落ちつかせるためだった。

「弦之丞様、驚いちやいけません。実はこうなन्दございます…。もう少し前に、凄すごい雷が鳴りましたろう。あの時師匠の半齋が、ちようど厠かわやに入っておりましたが、出てくると私たちへ、今の雷はたしかに時雨堂の近くへ落ちたらしい、もし誰か怪我けがでもありやしないか、すぐに見舞に行つてみるといわれまして、

まだ少し降っている中を、まっしぐらに駈けだしました。行つてみると、さア一大事です。どこの奴だか知りませんが、真つ黒に覆面した侍が大勢で、二挺ちようの駕を引つかつ昇ぎ、時雨堂から一散に閨の裏道へ登つてゆくじやアありませんか」

「や、大勢の侍が？ ……」

「二十人余りの人数でしたよ、何しろこいつア大変だと、あわてて中へ飛びこんでみると、雷が落ちたどころじやありません…、銀五郎さんをよんでも返辞へんじはなし、多市さんをよんでもウンもスウもありません。時雨堂の中はガランとしていて、そのうちに月が出たので、こわごわあたりを見廻すと、どこからどこまで血の池のようなんです」

「おまけにあすこの大おお櫂けへ、さツきの雷が落ちたものとみえまして、黒装束の者が二、三人、その木の下に斃たおれていきますし、時雨堂の中はといえ、そこも、切ツつ切られつした返り血と、土足の痕あとがいつぱいで、目も当てられない狼ろう藉ぜきでございます」

「おう……」と呻うめくがように弦之丞、次の語をやや急せき気味に、

「して、銀五郎と多市はいかが致いたしました」

「その多市さんは……」

半斎の弟子二人は、そこで、見てきたばかりの酸鼻さんびのさまを、まざまざと思い浮かべたらしく、気の毒そうに顔を見あわせた。

「手足が利きかなかつたから、真まっ先に斬きられたのでしよう。多市

さんのほうは、縁先と部屋の間で、ズタズタに斬られておりました。ところが銀五郎親分のほうは、どうなつたものでしょうか、いつこう行方が知れませんです」

「姿が見えない？」

「はい」

「そして、関の裏道へ向つたという駕かごは、たしかに二挺ちようでござつたか」

「群むられ鴉がらすのような大勢に、取り巻かれて行つたのを見ただけで、しかとは申されませんが、その駕はどうも二つのように思いました」

嵐の間におこり、嵐とともに去つた変事へんじを聞き終つて、弦之丞

は驚きのあまり、しばらく愕然がくぜんとしていたが、やがて口の裡うちからただ一語。

「……しまった！ ……」

日頃から、多市や銀五郎の身边には、蜂須賀家の者がつけ澄まましているところを知りぬいていたので、それとなく護まもつていてやつたものを、今日に限つて家を出たのが第一の失策——と及ばぬ臍ほぞをかまれもする。

いや、及ばぬといつて、空しく手を束つかねてはいられない。襲おそうたものは、川長でも見かけたことのある天堂一角、その他の阿あわ波侍むらいであろう。そして、彼らが拉らっし去つたという駕の一方には、必ずや銀五郎が押し込まれているに相違ない。

こう、直覺したので、弦之丞はにわかまなに眼ざしをかえて、

「関の裏道はどこへつづいているな？」

声まで凜りんと張って訊ねた。

「京へは近うございますが、大阪へは廻り道で、山から山を音羽おとわや笠取かさとりの里へとつて、宇治の富乃莊とみのしょうへも出られると申します」

「うむ、まさしゆうそれへさしてまいったに違いあるまい。これ二人の者たち、まことに勝手ではあるが、今の場合は、一刻こくも早く、その駕や侍の群れに追ッ着いて行かねば相ならぬ」

「おお、あれを追つておいでなさいますか」

「時雨堂のあと始末や、半斎殿へご迷惑を及ぼしたお詫わびなどは、いずれ立ち帰った上で御意ぎよいをえるほどに、よしなにお伝え申して

おいてくれ」

「ええ、ようございますとも」

「では、お頼み申すぞ」

この間うちから、常に寡黙かもくで沈鬱ちんうつにみえていた法月弦之丞は、その時、まるで人が違つたように、そういうや否や、血相すごく身仕度して、阿波侍の一行を追うべく宙を飛んで走りだした。

変事を知らせにきた半斎の家の者も、それと一緒に、これまた時雨堂の方へ、落ちつかぬ足どりを急がせて戻つて行く。

こうして夜は一段と更ふけ沈み、打出ヶ浜にはうねうねと白い波ばかりが、あとの寂せき寞ぼくとした大気の中にほしいままな舞躍ふやくの声をあげている。

お綱だけは、まだそこに立っていた。

しよんぼりと、瓦小屋の柱にもたれて――。

「……やっぱ縁がないのかねえ……」と、思わずもれる溜息ためいきがやるせない。

月影の中へ月より白く消えてゆく弦之丞の姿を、いつまでもいつまでもジイとそこからみつめているうちに、辺りの月光は茫ぼうと霞かすんで、松葉の露のような泪なみだが、お綱の両の睫毛まつげにいッぱいな玉たまを泛うかべていた。

弦之丞には、行路こうろの一顧こにもすぎぬ女であつたらうが、お綱の身にとつてみれば、手のうちの珠を奪われたよりは、もつと絶望的な空虚が胸をひたすのであつた。

明けやすい短夜みじかよである。五更ごこうといえどもう有明けありあの色がどこにもほのかである。

誰もいない打出ヶ浜……。

見る人もなく聞く人もない瓦小屋。

瓦へかむせてある濡れ蕤ぬむしろへ、居崩いくずれたままにうつ伏したお綱は、生まれて初めて真しんから悲しいということを知って、誰に気づかいてもなく、シク、シク……とすすり泣きを洩らしていた。

やがて、ボウーという法螺ほらの音が聞こえる。

矢走やばせへ通う松本の船渡しから、一番船のでる知らせである。

(江戸へお帰り、江戸へお帰り、お綱さん、諦あきらめて江戸へお帰りよ。月夜の風邪をこじらすと、命取りになりますよ)

一番船の貝の音はこういつてお綱をなだめ促すように鳴っていた。

岐路の峠

らんらんとした太陽が照りつけていた。小鳥の声が晴々とはればれとひびく、山や峰は孔雀色の光に濡れ、傾斜の樹々は強烈な陽をうけて、白い水蒸気をあげている。

「急げ、急げ」

今しも、笠取の盆地から、禅定寺峠の七曲りを、ヒタと登ってゆく武士の一群れがあった。

昨日の嵐にふるい落とされた病葉わくらばが、道一面に散りしいていて、そこを踏みしめてゆく大勢の足音の前に、山小禽やまこどりが腹毛を見せてツイツイとおどろき飛ぶ――。

「急げ、急げ」

「峠こを越えようと郷ごうの口くち」

「郷の口には休み場もある」

「何しろ支度をかえなければやりきれない」

「明け方から急に疲れを覚えてきた」

「兵糧ひょうろうがほしい」

「もう一息、もう一息！」

「道も河内かわちへ入れば平坦へいたんになる。大阪表まで六、七里とはない

ぞ」

一行はヘトヘトに疲れていた。

先に立つて励ますのは天堂一角、九鬼弥助、森啓之助。

二挺ちようかごの駕を列はさに挟んで、以下二十人ほどの侍さむらいがつづいてゆく。

難路へかかるたびにぐちに出る愚痴は、夜を徹てつしてこの悪路を、関の裏街道から休みもなしに押しあえしてきた汗と喘ぎの悲鳴である。

縄なわぐく括りにした二挺ちようかごの山駕、それをかっいいでいるのも侍だ。時

折、肩を代え、肩を代えして、螺旋らせんじよう状にうねった道を峠いただきの頂ままで登つてきたが、

「あつ、また血がこぼれる……」

ドカンと、一挺の駕かごじり尻を下ろしてしまった。

その駕の裾すそから、おびただしい血汐したたが滴りだしている。みる間に、それは幾すじもの赤い線となつて、生ける蚯蚓みみずのように、土の上を横よこたて縦たてに流れだした。

「こう血をだしては死ぬであらう」

「だめだ。死ぬぞ、こいつは」

下ろした駕を取りまいてガヤガヤしだした。

「この分では、所詮しよせん、大阪までは保もつてしまい」

「お下屋敷しもやしきへつく前に、死骸しかいになつてしまつては、骨折り損そんというものだ」

様子をふりかえつた天堂一角は、森や九鬼とともに、つかつかとそこへ戻つてきたが、半ば疲労なつかに挫くじけている一同を見て、

「死なしてはならん！」

一喝かつをくれて、みずから駕の繩を切りほどき、垂たれを上げて中を覗のぞくと、自分もいつそう狼狽ろうばいした気色けしきである。

「すぐに手当てを加えろ。これから大事なお調べにかける奴、死なしては、ここまで骨を折ってきた甲斐かいがないぞ」

大勢の手で、駕の中から引きずりだされたのは、唐草銀五郎であつた。

深股ふかももの傷は、柘榴ざくろのように弾はじけている。ほかにも一、二カ所の掠かすり傷があつて、五体はむごたらしい紅べにに塗ぬられていた。

「用意の金創きんそうは誰が持っている」

「はっ、これに」

「指先へ付けて塗^ぬりつけろ。そして血止めをギリギリと巻きしめておけ」

「はっ」

「誰か、水を探してこい、水を」

「はっ」すぐ二、三人が溪^{けい}流^{りゅう}へ駆け下りた。

銀五郎は、おびただしい出血に、グツタリと気を失っている。

情けにあらずしてそれを手当てする侍たちには、無論荒々しく扱われた。

「一方は大丈夫だろうな」

水を待つ間に、九鬼弥助^{やすけ}がいった。一方とはつまりもう一つの駕を指すので、その中には、俵一八郎が無念^{いまし}の縛^{しば}めをうけて、押

し込まれているのは明白である。

中の一人が、こう答えた。

「あの者のほうは、捕える時に深傷ふかでを負わせてございませんから、まず御懸念ごけねんには及びませぬ」

「そうか……」

九鬼はうなずいて、一角と啓之助が立っている岩の側そばへ歩みだした。

その時、天堂一角は、腕うでぐみをしたまま、峠の七曲りを見下ろしていたが、何を見出したものか、眉まゆに険けんを立てて、にわかになだならぬ色あらかわを現あらわした。

「悪い所へ……」一角は舌うちを鳴らして、
「誰かここへ登ってくる」と、ひそめた眉まゆのあたりへ手をかざした。

「高野詣りか三塔とうの行ぎようじや者か……それともただの通行人か、なにしろ四、五人でございませぬ」

それをうけて、森啓之助がつぶやくと、九鬼弥助も側に立つて伸び上がりながら、

「なるほど！」と同じほうへ眼を据すえた。そして三人とも、しばらくの間、峠の上り道からここへ指してくる人影を眺めていたが、そのうちに九鬼弥助が一笑に附して、

「まさか追手ではありませんまい」

「無論、そんな者でないことは分っているが……」と一角は注意ぶかい容子ようすで、あたりさむらいにいる侍たちへも聞かすように、

「ただの旅人にいたせ、かような態なりを見れば、何かと眼をそばだてて行くに相違ない。万一、蜂須賀家の者と知られて、世間へ噂いたされては後日の不為ふためであろう。とにかく、銀五郎の体を、どこかへ隠したがようござる」

「いかにも！」啓之助も同意して、にわかにあわてた眼づかいをしながら、

「こりや、手当ては後にして、先に銀五郎の体を見えぬ所へ運んでおけ。そして、各 《おのおの》 もしばらくの間、姿の見えぬようにしているがよい」

「はっ、承知しました」答えると、侍たちは、ただちに銀五郎の手足を取りあつて、灌かんぼく木の夏草の茂みにつつまれた細道へ隠れてしまった。

そして、二挺の山駕も、邪魔にならない所へ片づけさせた後に、天堂一角は陽よけの笠を傾かたげ、弥助と啓之助は、道ばたの岩に腰を下ろして、何気ない風にたばこをくゆらしている……。

しばらく森しんとしてゐるうちに、さつき、ここから姿の眺められた旅人たちであろう、何か声高に話してくる声が足音とともに近づいてきた。

「よく晴れましたなあ、谷の霧が」

「まったくいい気持で。何しろ、山を歩きつけると、あの埃ほこりッぽ

くつて物騒な本街道は歩けません」

「街道すじも、喧嘩がなくなつて大名の往来さえなければ、決して悪かありませんが」

「おお、ここに立つと、ちようど、宇治川の流れが、水でくの字を描いたように見えます」

「山もよいじやありませんか。東のほうをござらんさい。昔、徳川様に見出されて、お抱えかかになつた忍者の出生地——有名な甲賀の山国があのだです」

「なるほど、つまり幕府の甲賀者が出た郷さとで……」

「さよう、あの尖とがつた山が矢筈やはずヶ岳たけ、その右手のが猪いの背山せやまとかいいましたよ。まア名なんぞはどうでも、あの巒ひだになつている山

の皺しわが、なんともいえない深味のある色じやございませんか」

すぐそこまで来たのをみると、六部、高野詣り、道者などの五人連れで、いずれも白い甲こうがけ脚絆きゃはんに杖をもっているが、中に一人、それをもたない虚無僧の天蓋てんがいが一つまじっていた。

「どうです？」

高野詣りが腰をのばしていった。

「この辺で、一服やるとしましょうか」

すると、六部がソツと袖をひいて、道ばたにいる侍を目で知らせながら、さりげない調子で、

「いや、もう一息まいりましょう」

「そうですか、じゃあ……」

「下りへかかる岐れ路に、たしか、眺めのいい場所があつた筈で……」スタスタと通り過ぎてしまった。多少何か無気味にも思つたようなふうである。

一人の虚無僧も、他の行者たちについて足を早めたが、行き過ぎてから、二、三度うしろをふりかえつた。わざと、やりすごす気で、たばこをくゆらしていた一角や弥助は、その五人を一様一色な遍路へんろとばかり思つていたので、虚無僧のまじつていたことも、またその天蓋てんがいのかげに明敏なまなざしが働いていたことにも気がつかなかつた。

気味の悪い侍を見かけたのがキツかけで、無口になつた五人の道者連れんは、それから二十丁ほどタツタと下つてきたが、やがて、

甲賀路と宇治の岐れ道わかへきた時、

「では、皆様……」

と、虚無僧だけが、ふいに立ちどまって、

「私だけは、ここでお別れ申します」

「おや」と、四人は変な顔をして、

「虚無僧ぼろんじさん、あなたは甲賀へおいでになるので……？」

「はい」虚無僧は慇懃いんぎんに、

「もとよりあてのある旅ではございませんが、最前、峠の上から甲賀の山を見ましてから、急にまいりたくなりましたので」

「そうですか——ですが、ここからまいりますと、木元きもと、裏白うらじろ

なんていう、嶮けわしい山や峠ばかりで、いくら山好きでもあきあき
しますぜ」

「ほかにちと思いだした用事もございますゆえ」

「そうですか、じゃせつかくお大事においでなさい」

「ありがとうございます。今朝けさからご一緒になりまして、いろい
ろお世話になりました」

「なんの、遍路の者はお互いでございます。草鞋わらじの代えかや旅籠はたごせ
銭んは大丈夫ですか」

「はい、用意しております」

「お一人になったら、必ず、暮れないうちに宿をとることですよ。
じゃ、お気をつけなすツて……」

半日の道づれを捨てるのも、何か名残惜しそうに、一人を減へらして四人になつた道者たちは、コトン、コトン、と杖の音を淋しくさせて、ぜんじょうじ 禅定寺の峠を下りにかかつて行く。

虚無僧は、じやくねん 寂然と立つて見送つていた。

旅の人の情けはうれしい！ しみじみ思うのである。ことに、ああした遍路同士が、貧しい情けをおくりあうことは、なみだ 泪ぐましいほどで、鬪争の巷ちまたや富家ふかの門では見られない美しさだと思つたのであつた。

そして、静かに、道端へ寄つて行つた。

くちき 朽木の根から、てきてき 滴々と落ちている清水に喉のどをうるおそうとし

て、ふと、こけ 苔や木の葉に埋もれている道しるべの石をみると、

南——郷ごうの口くちをへて奈良街道。

北——裏うら白越しろごえ甲賀路。

としてある。

「甲賀……」じつと見つめている虚無僧の胸に、懐古かいこの念が清水のように湧わいてきた。「甲賀といえば、甲賀組の発祥はっしょう地ち、いうまでもなくお千絵殿の祖先せんぞの郷さとじゃ……」

不思議な心地がするのである。

ゆくりなく、恋人の祖先せんぞに巡めぐり会ったような心地がする。そしてそこに、なお道しるべの文字を見入っていた虚無僧は、法のり月づき弦げん之の丞じょうなのであった。

弦之丞は、ゆうべ、打出ヶ浜からまっしぐらに立ってきた。無

論、蜂須賀家の者を追いかけて、銀五郎を取り返すためにである。一八郎のことは、彼の念頭に薄かった。およそのことは察していたが、まだ深くその人を知らないために。

しかし、銀五郎の一身だけは、命を賭しても取り返さずにはおかない決心であった。自分というものが、江戸の地をふむことのできない境遇である間は、銀五郎こそ、お千絵様の身を守り、甲賀家を支えてくれる唯一の力だ。

蜂須賀の侍たちは、世間の目を避けるためにも、必ず裏街道をとって大阪へ戻るであろうと察したので、彼は、迷うことなく道をとって、夜の暁方に、醍醐の山寺で一刻ばかり休んでいた。そこで落ちあつたのが、今、別れた遍路の人々である。天蓋

や、わらじなども、その人たちが、寺で工面くめんしてくれた物だった。弦之丞は、先の目をくりますために、その人たちとここまで同行してきたのである。

そして、計らずも、峠いただきの頂で、天堂一角や九鬼弥助の姿を見かけた。

先では気がつかなかったが、弦之丞は、あの瞬間にそれを見遁のがしていない。駕かごも二つあった、その他の侍たちはどこかに休んでもいるのだろう——そううなずいて通り過ぎた。

ここは岐路きろになっっているが、ここまではどうしても一本道。いやでも応でも、天堂一角やあの駕が、目の前を通りかかる筈である。

弦之丞は、一口の清水に、湧き沸る血を抑えながら、ゆたりと、道しるべの側へ腰を下ろした。

「……もう急ぐことはあるまい」

彼は、ことさらに心を落ちつけるため、尺八を取って、眼を半眼に閉じ、ゆるやかに唇を湿していた。

禅定寺峠——、あの頂から少し下つて、森々たる日蔭へ

入ると、右は沢へなだれて、密生した櫓の傾斜で、上にも、枅や松が生い茂っており、旅馴れた者にも気味悪い暗緑な木下闇——。時たまつんぎく鳥のけたたましさは、斬られた女の声のよう

だ。

程もなく、シタシタと、地をうつ大勢の足音が、その勾配こうばいを湿しめつぽく流れてくる。

さきに峠の上の平地ひらちで、二挺の山駕を下ろしていた阿波侍の一
群れである。

森啓之助と九鬼弥助は、俵一八郎を入れた山駕わきの側につき、その後からは、天堂一角が銀五郎の駕を守って、なんの予感もなさ
そうに、例の岐わかれ路まで進んできた。

と——不意に、どこかで、

「待てッ」

ピンと、耳をつんざいた声でした。

すぐ続けざまに同じ音おんじよう声が、

「しばらく待て！」

こう、叫んだかと思うと、道しるべの石から、躍然やくぜんと立ってきた法月弦之丞が、あわてる列をかきわけて、すばやく、一八郎の駕の棒ぼう鼻ばなをドンと抑えてしまった。

「や、や……」とうろたえる者を睥睨へいげいして、

「蜂須賀の方々へ、ちと申し入れたい儀があつて、ここにてお待ち致していた。とにかく、この二挺の駕をお止めとどなさい！」
と、身をかためて、目に余る一行こうの道を阻はばめた。

「なにッ」

聞くより九鬼弥助は、刀のこじりをはね上げて、弦之丞の姿へ目をいからしつ、

「知らぬことならとにかく、吾々を蜂須賀家の者と知つて足を止めよとは言語道断だ。一体汝はどここのうろたえ者だツ」

「もう、見忘れ召されたか——」と、弦之丞は片手で天蓋の紐を解いた。それは、早くも八方の敵をうける用意である。

「——いつぞや川長の門口で、お志の鳥目を浴びたあげく、そ

の夜裏庭では各のお手の内まで拝見いたした虚無僧でござる」

「えっ……」弥助は胆をヒヤリとさせたが、怯みをみせまいとするのであろう、なおも、額に青筋をうねらせて、

「おお、その虚無僧がどうしたというのだ。何のゆえにこの駕を止めるのだ」

「されば、もとよりその夜の意趣遺恨ではなく、拙者の知人で

ある銀五郎と、ほか一名の者が、故なくして、かたがた方々に捕われたと聞き、お下げ渡しを願ひに出たのでござる」

「ならぬッ」

弥助は一喝かつをくれて、かたわらの森啓之助をかえり顧みながら、

「こんな奴にかまっひまていては暇つぶし。それッ、お先へおやんなさい」

「心得た」というと、森啓之助、ほか八、九人の侍とともに、一団になつて駕尻をあげた。

「ええ、待たぬか」と、弦之丞が、それを支えんとする隙を狙つて、

「邪魔するなッ」

粗暴な九鬼弥助が、抜き打ちに斬りつける。

はっ——と思うと、弦之丞は、身を沈めて、手元へのめツてきた弥助の大刀を、目もとまらぬ隙にもぎ取った。しまツた！——

——弥助は、色を失つて飛び退いたが、時遅し、法月弦之丞に持たれた一刀は、あだかも名刀に変わったかと思われるばかりな冴えを増して、片手打ちに、ズウンと弥助の肋あばらまで斬りこんでしまつた。

「わツ……」細こまかい血が濛もうとあがる……。九鬼弥助は空くうをつかんで、櫓ならの傾斜へ落ちこんで行つた。

銀五郎の駕を止めて、こなたに立っていた天堂一角は、その態ていを見るなり、

「おのれツ」といいざま、ジリジリと詰め寄つてきた。

一角は、啓之助のような、白面柔弱にゆうじやくでなく、また、弥助よりも兇暴であるかもしれないが粗暴ではない。その剣を放つにしても、彼らの腕とは格段な差があり、弦之丞にとつても、侮あなどるべからざる剛敵である。

この隙に、柔弱者の啓之助は、人数の半分以上を引きつれて、一八郎の駕一つを固めながら、ダツ——と麓ふもとへさして急いでしまつた。

その後の怖るべきものは、天堂一角だけである。あとの葉武者はむしやは何ほどのことがあるう——と、弦之丞は、それに三分の気を構え、七分の心しんりよく力を一角に向けて、血ぬられた大刀を青眼せいがんにとりなおした。

ギラギラした大刀の数が、車の齒のように、弦之丞のまわりを取り巻いている。天堂一角は、たえず彼の前へ前へと、切ツ尖を向けていた。

しかし、いつまでたっても、弦之丞に微傷を負わせることもできない。

無碍に、一步でも、手元へ近づいて行つた者は、たちまち、相手の一閃を浴びて、あえなき血けむりを揚げてしまう。

すでに四人は斬られていた……。

また斃れた！ パサツ——と、濡手拭をはたくような血の音。

だんだん頭数が減つてゆくばかりだ。一角を除く以外の者は、

もう怯おしけに襲われてか、ともすると逃げ足にみえる。

斬つても斬つても、弦之丞の構えは、すぐ鉄壁に戻つていた。そのため、一角はどうしてもつけ入ることができない。何という流名だろう？ 何という構えであろう？ そして何と倫りんを絶した技わざだろうか。

一角にとつて、頼み甲斐のない助太刀は、また一人が朱あけになつたのをきツかけに、わツとひるみ立つて、麓ふもとの方へ逃げだした。うまくはずして行つた森啓之助でも呼んでくる気か？ おそらく、あの啓之助に、ふたたびここへ戻つてくるほどな勇氣はあるまい。

だが、さすがに天堂一角は、あくまでそこを退ひかなかつた。人ひと

まぜをせぬ一人と一人、ややしばらく息をひそめて睨み合った。
 原士はらしの中で、有名な使い手だけあつて、難波なんば一方流ほうりゆうと覚しき太刀筋はたしかなもの。弦之丞とて、迂濶うかつにはあしらえない。

こういう筋のいい太刀は、ほとんど、その斬る手も引く手も見せないはや迅さを持つている。夏かつ！ とばかり、たった一度、双方の白刃が摺すり合つたかと思うと、天堂一角の姿は、忽然こつぜんとしてそこらにあらず、弦之丞のすぐ側の樹きに、どこから飛んできたのか、一条すじの捕縄とりなわが、蛇のように絡からみついて、ピンと向うへ張つていた。

弦之丞と一角の技わざは、とうとう優劣がつかなくつた。この時の場合は、まず互角といつていい。なぜならば計らざる者が、その

刹那せつなを引き分けてしまったのだ。

と、いうのは。

時雨堂しぐれどうから、危うく逃れた目明し万吉。この変事を、住吉村にいる常木鴻山つねきこうざんへ知らせようとして、ヘトヘトになりながら、折も折、この山越えにかかってきた。

そして二人が切り結んでいる態ていを見るや、彼はなんの猶予ゆうよもなく、得意の捕縄とりなわをスルスルと解いて、天堂一角へ狙いをつけた。そこで、捕縄の先が、宙ちゆうをうねって行った途端に、一角は早くも感づいて、檜ひのの茂った谷間たにあいの崖へ身を躍らしてしまったのだ。「もしやあなた様は、時雨堂においでになった、法月様ではございませんか」

的まとをはずした捕繩とりなわを輪にしながら万吉は、弦之丞の前へ姿を見せた。

「おう、してお身みは何者でござる」

「あの晩、泊り合せた万吉という者ですが、深いお話は後にして、どうか、あすこにある駕から先にみて上げて下さいまし……、何だか、苦しそうな呻うめき声が洩れております」

駈け寄つて、山駕を括くくした繩を切りほどくと、銀五郎の体が力なく外へ横仆れになった。さつき、多少の手当てを加えられたので、気はついていたが、奄えんえん々として苦しそうな息づかい。

「おツ、銀五郎ではないか」

弦之丞は、白い膝の上へ、その体を抱え込んで、二度ほど、耳

元へ口をつけて名をよんだ。

「あ……弦之丞様……」

「分ったか。気をたしかにもて」

「分りました……」ガツクリとうなずいて、「お助けなすつて下さいましたか」

「おお、蜂須賀家の者の手より取り戻したのじゃ。もう決して案じることはないぞ」

「せつかくですが……弦之丞様、そのお骨折りは無駄でした」

「な、なんと申す。この弦之丞がそちを取り返したのが無駄じゃというか」

「無駄です！ わ、わっしや、ちつともうれしかありません……」

…」

「うれしくない？」

弦之丞はせきこんだ。彼としてこれまでの力を尽つくして助けた者から、こんな情けない言葉を聞こうとは、あまりに心外しんがいであるに違ちがいない。

静かに鶉ひよが啼ないている。

万吉は、あたりの死骸を谷間に蹴くこんで、あつちこつちを見張つていた。

「弦之丞様……」銀五郎は、傷手いたでを忘れて改かまった。

「さだめしお腹が立ちましよう。命がけで助けた者が、うれしく

ないの無駄だのといえ、誰だつて、むつとするのが当り前です。……ですが、嘘の嫌いな唐草銀五郎、まったくうれしくございません」

「心得ぬことを申すではないか。腹蔵ふくぞうなく、そのわけを承ろう」
「申しましょう……これをいわないでどうするものか」

ほつと熱い息をついた。

こらえてはいるが、あれほど出血した銀五郎は、深傷ふかででよほど体も疲れているとみえ、眼の縁ふちには青い蔭くまが隈くまどつており、きれぎれにいう声にも、どこかしら精がない。

「わけというのは、この銀五郎が、失礼ながらあなた様にあいそをつかしているからです。早くいやあ見きりをつけてしまつたん

だ……法月弦之丞という方は、腕は優すぐれているけれど、泪なみだもなければ血もない武士だと……」

「待て。ではそちは、あくまでお千絵様のことをいうて、この身を責めるのじゃな」

「責めます！ 弦之丞様。わっしをこうして助けてくれる程なお心で、なぜ、お千絵様を救つて上げては下さいますかぬか」

「ウーム、いうな銀五郎！ そのことだけはいうてくれるな」

「いえ、い、いわなくちやなりません……」銀五郎は彼の手頸てくびを

固く握りしめた。怖ろしい力のふるえが感じられる。その眼は衰

えた中にもあらん限りの訴えを燃ねん焼しょうしている。唇かわが渴かわく、舌

がもつれる……しかもまだ烈々の俠きょうけつ血あふは唐草の五体に溢あふれ返

つて見える。

「先の晩にも、あの通り、諄くどいお願いを致しました。もうこれが最後のお言葉をきく時です。さ、おっしゃって下さいまし。江戸へ帰ってお千絵様を救つてあげて下さるか。それとも厭いやか……それを」

「無理じゃ……」弦之丞は良心の苛か責やくと、銀五郎の言葉の鞭むちに、顔まで蒼白になりながら身を悶もだえる。

「江戸へは帰られぬ仔細しさいがある。それはたびたびいうてあるではないか。おう！ この弦之丞の心も察してくれい」

「では、どうありましても？」

「……身に骨肉がないならば——父や母や兄弟や、そして家門や

徳川家の直参じきさんなどという家統いえすじがないならば……」

「わ、わかりました」いうかと思うと銀五郎、ガバと前へうつ伏した。いつの間にか、弦之丞が側においた刀を忍ばせていたらしい。びっくりして抱いだき起こしてみると、切きツ尖さき深く自分の手で脇わ腹きばらを抉えぐっていた。

こんこんと流れでる鮮血が、自分の膝へも温ぬるく浸しみ徹とおつてくるのを感じながら、弦之丞はなにもいわずに、ただひしと銀五郎を抱いだきしめた。

唐草は断末の朱あけに悶あえ苦しんだ。が、彼には、ふたたび起たてない自覚があった。多市が最期さいごをとげたこと、一八郎が捕えられたこと、すべての破綻はたんとともに、自分の終るのも当然だとは知って

いる。

恨むらくは、ついに、阿波の土を一足もふまないこと——そして法月弦之丞をついに動かすことができなかつたこの二つ。

この二つの恨事は、彼が白骨となるまでも、永劫えいごうに抱く心残りであらねばならぬ。

急に、抱かかえている腕へ重みがかかった。ガクリとときれた様子。

石のようになつて、睫毛まつげに涙なみだをさえ溜ためていた弦之丞。はつと吾に返つて、眼がしらの露を払い、銀五郎の頬へ自分の頬をピタとつけて耳に口。

「これ、銀五郎！ 銀五郎！」

声のかぎり呼びかえすと、さつきから始終を見ていた万吉が咄と嗟つさの氣転、手拭つぎに清水を湿しめして飛んできて、銀五郎の口へタラタラと注つぎこんだ。

ほかと、眸ひとみを開いたのを見て、弦之丞はきつとなつた。そして、彼の薄らぐ魂へも、はつきりとうなずけるような音おん声しょうでこゝろをいっただ。

「こりや唐草！ そちの最期さいごに一言の手向けたむがある。今日までは、大府大番頭だいふおおばんがしらの家名をけがすまいとおもい、また私の両親はや兄あにらから弟あにたちに憂うき目を見せたくないばかりに、恋を捨て武士を捨て、血なみだも涙もない懦夫だふとなり終つていたが、今こそ、岐路きろに立つた弦之丞は、自分の指して行く道あきらを瞭あきらかに思い決したぞ！ 臨終いまわのき

わによう聞いてゆけ！ そちの頼みはたしかにこのほうがひき受けた！ 必ずお千絵どのの今の境^{きようがい}界、骨身にかけて救つてとらす。また甲賀の家も支^{ささ}えてみせる。なおそのためには、この身の武運が尽きぬ以上、阿波の本土に入り込んで、世阿弥^{よあみ}殿の末路を見届け、蜂須賀家の内秘を必ず突き止めてみせるであらう。よいか！ 聞こえたか、銀五郎！ 法月弦之丞の今日の誓い、これを黄泉^{よみじ}の餞^{はなむけ}別として受けてくれい……」

銀五郎のなきがらを埋めた土の上に、淋しい山の花が手^た向^むけられたのは、それから一刻^{とき}ほど後のこと。

弦之丞は合掌して、しばらくの間^{めい}瞑^{もく}目した。万吉ですら、し

きりに涙がさしてきてたまらない様子。

そこは峠の道を横に入つた崖の中腹で、甲賀の山、河内平、かわちだいら晴れた日には紀淡きたんの海も望まれよう、風に鳴る静かな古松こしようと榛はんの木にかこまれている。

「じゃ弦之丞様、いよいよあなた様も御決心の通り、これからただちに江戸表へお立ちでございましょうか」

万吉はこう改まって、先ず一通り自分たちのいきさつから今日に至るまでの事情を話した後に、もし弦之丞がここから江戸へ向うならば、自分はお千絵様に会うことを一時思い止まって住吉村にある常木つねきこうざん鴻山へ、事態の急変を知らせたいという気持を述べた。

すべてを聞きながら、思案をしていたが弦之丞。

「いや……」と向きなおつて、

「その住吉村へは拙者がまいつて、一度常木氏うじにもお目にかかつておこう。ところで、江戸のお千絵殿や銀五郎の身寄りのほうへも、早くこのことを知らせねばならぬが……」と、また、小首を傾かしげて考え沈む。

「む！ 万吉」ハタと膝を打つて、「江戸表へは、そちが一足先へまいつてくれぬか」

「えつ、お千絵様のお屋敷へ？」

「そうじゃ。銀五郎のかたみとなつたこの髪の毛を持って、お千絵殿に会つた上、仔細しさい残りなく話してくれい。そして、いづれこ

の弦之丞も追っつけ江戸へまいるであろうとな」

「蔭ながらわっしもいろいろ伺っております。そう申し上げたなら、さぞお喜びでございましょう」

「しかし、それもごく密々みつみつに——本来江戸へは帰れぬ事情のあるこのほう、必ずとも他人ひとの耳には触れないようにな……」

「そこに抜かりはございません。じゃ、わっしは行きがけに大津絵師の半斎はんさい老人の所へ寄って、何かの詫わびや礼をすました後に、その足で江戸表へ急ぎます。ところで、あなた様と江戸で落ち合える段どりは、およそ何日ごろになりましたしやうな」

「まずふたつき一みつき月か三月ほど後であらう」

「たいそうお手間がとれるんですね」

「聞けば、近いうちに蜂須賀阿波守は、まんじ丸をしたてて徳島城へ
 帰国いたすとある。安治川尻あじがわじりの下屋敷の様子、その取りこみに紛まぎ
 れてザツとうかがってくるつもりじや。さもなくては、お千絵殿
 に会ったところで、充分この後の謀しめし合せがつかぬからのう」
 「へえ……」といったが、万吉は相手の顔をけろりと見ていた。
 十手を箸はしのように持って、この年まで目明しの飯を食ってきた自
 分でさえ、あの下屋敷の塀ふしあなの節のぞ穴のぞさえ覗のぞけずにいたものをと、
 少し片腹痛い気がしないでもない。

「ですが、ずいぶん危さかのうございませぬ」

「なんの、危さかなかつたら引き退さがるまで、あわよくば、俵たわら一八郎を
 救い出せるかも知れぬ」

「ああ、俵の旦那も、とうとう阿波の犠牲ぎせいになってしまった……」
ふと暗然とつぶやいたが、気を取り直すように立ち上がった。

「そう事が決まりましたら、一刻も早くお別れと致します。今度こそは、かけがえのねえあなたのお力、どうぞめったな足を踏みださねえように。また、常木様にお会いになりました節は、万吉はこうこうと、俵様のことのついでに、お伝えなすつて下さいまし」

「心得ている。それではもう出立するか」

「へえ、にわかせに気が急せいておりますので」

「銀五郎が、この土の下に眠っておるかと思うと、拙者は、何やらここが立ち去りにくい」

「ごもつともでございます。江戸であなたとお千絵様が、恋とやらに燃えていた頃は、ずいぶん世話をやかせたという話だそうで」

「その昔、お千絵殿の父世阿弥よあみ殿から、少しの恩義をうけたのに感じて、こうまで義理を尽くしたのは見上げた男。弦之丞が岐路きろの迷いを離れたのも、銀五郎の血と熱に染め揚げられたようなものじゃ」

「わつしも江戸へまいりましたら、偽にせむらさき紫むらさきに染まないで、その真まつ赤あかな男おとこ気きツてところにあやかりたいものでございます」

「おお……」と弦之丞は尺八を取り上げて、

「銀五郎の手向けたむに一曲吹こう、そちも別れに聞いてまいるがい

い」

「あ、そいつはご勘弁願います。でなくてさえ先程から、俵様の
 ご無念がおもわれたり、唐草親分の非業ひじょうな姿が目について堪たまらね
 えところ——。この上哀れなみだッぽい一節切ひとよぎりを聞いた日には、嬢かかあの
 ことまで思いだしやす。泪なみだのなの字も目明しにや禁物きんもつ、一足お
 先へ押ツ放してお貰い申します」

怖い物から逃げるように、万吉は、道中笠を西日へ傾かたげて、禅ぜ
 定寺んじょうじ峠とうげから江戸へ心を急がせて行つた——。

逢あい引びき

机が一脚、寂じゃく然ねんとしてある。

柿の木から洩れる秋の陽が、古畳の目に明るく射^さしていた。

あたりは草深い百姓家らしいが、その部屋の中は百姓家らしくなく、和漢の書籍だの、船^{はくさい}載のエレキテルだの、そうかと思うと、薬^{きざ}を刻^{やげん}む薬研が見えるし、机の上には下^{へた}手な蘭^{らんじ}字が書きかけであり、異人墓の石のかけらがその文^{ぶん}鎮^{ちん}になっている。

そして誰も人はいない。

ガランとして、明けツ放しになったまま、しばらくは日向^{ひなた}溜^{ただま}りの秋の蠅^{はえ}が、黒豆のようにジツとしていた。

「おほん……」

ややあつて、どこかで一ツ咳^{せき}払^{ばら}いがしたかと思うと、厠^{はばかり}の戸のさるがカタンといった。

薬研やげんあるじの主あるじであろう。
 廁の戸をギーと開けて、悠々ゆうゆうと出てきたのが、すなわち机と

誰かと思うと、久しぶりにその細い丁ちよんまげ鬚まげと細い顎あごを見せた、
 平賀源内なのである。

手洗鉢ちようずばちの水を、南天の葉へチョツチョツとかけて、手拭掛てぬぐい
 けに手を伸ばしながら、さて、おもむろに庭の秋色を眺め廻した
 後、机ひきだしの抽斗ひきだしから薬草の胚子たねらしいものを取り出して庭へ下り
 た。

長崎で手に入れてきた蚕種ばんしゆの薬草の胚子たねを蒔まいて、一つまた
 暢気のんきな漢方医者どもを、あつといわせよう下したごころ心とみえる。

縁の下から鋏くわを取りだして、それを杖のように突きながら、離り

々とした秋草の中を歩きだした。

そして、ここら辺りあたでと思う所で、サクリと鍬を入れたが、その鍬を土にさしたまま、源内はヒヨツと妙な顔をしてしまった。

——というのは垣の外に、胡散うさんくさい人影が、しきりに辺りをうかがっていたからであろう。

「また嫌な奴が立ち廻っているな……」

こう思ったので、平賀源内、障さわらぬ神に祟たたりなしというふうに、胚子たねの袋をそこにおいて、こつそり部屋へ戻ってきた。

「おれは医者だよ。天下が誰のものになろうとおかまいはない。

そう執念深くつけ廻さなくつてもよさそうなものじゃないか……。

常木こうざん鴻山と一緒にいたので睨まれたのだろうが、もうよい加減

にして貰いたいな。心煩しんぼんという病気になる、蘭方らんぼうでいえば神

経衰弱……」

煙管きせるへ一服つめてみたが、うまくないのでほうりだした。今度は薬研やげんを引きよせて、桂皮けいひか何かをザクザクと刻みはじめる。

「おれは医者だから漢薬蘭薬なんでも売るが、病気は薬なで癒ならない。まして心煩——神経衰弱なぞはてこずりものだ。罹かりたくないな、あんな病やまいには。他人ひとはかかってくれなければ困るが、おれは罹かるのはご免だよ」

手さえ動かしていればザクザク薬が切れて行く。空想をするにはいい仕事だ。

「——驚いたなあ、あの時は。あの時から心煩だ。常木鴻山がぬ

きや仲間の者を使って、阿波へ渡ろうと準備をしているのを、いつの間にか蜂須賀に嗅かぎつけられた——今考えてみると、あれは三次の密告だな。住吉村のぬきや屋敷へ、不意に覆面のやつが斬り込んできた。二、三十人はいただろう。堪たまったものじゃない。鴻山は浜から小舟で逃げだしたが、おれは異人墓へもぐりこんで、やっと命だけは無事にすんだ……。だが、どうもそれ以来、人を見るとびつくりしていけない」

小鳥の声が朗らかだ。

薬研の音が面白い、医者のはのんきな商売だとは、平賀源内、思っていない。

「一体おれが物好き過ぎる……」反省心が出てきたらしい。

「何も好んで、常木鴻山などと一緒に、ぬきや屋敷に潜もぐっていることはなかつたのさ。ここにこうして、百姓家の一間を借りて、小遣こづかい取りの病人も来るのだから、おとなしく、異人墓の文字でも写して勉強しておりやいいことさ。だがどうしたろう鴻山は？舟で逃げたから捕つかまりはしまい、紀州の奥でも隠れたかな、何しろおれは迷惑した。もう、天満浪人だの隠おん密みつだの、蜂須賀家だのツて、そんな物騒な渦の中へは飛び込むまいぞ。そうともそうとも、早く一つエレキテルや火浣布かかんぷでも仕上げて、大金儲もけをしなくつちや……」

動悸どうきがやむと、大分考え方が明るくなる。

その時、門垣根の外から、妙たえな尺八の音が静かに訪れてきた。

尺八の呂々りよりよはいつまでも門かどを立ち去らない。

源内は、耳うるさくなつたように、薬研の手も止めずに、

「お通とおなさい」と断つた。

在方ざいかたを徘徊はいかいする悪い虚無僧の中には、断れば断るほど下手へた

な尺八を吹き立てて、揚句あげくの果てには強請ゆすりだすような者もある

が、今のは源内の一言ひとことでピッタリ止んだ。

いい按配あんばい、蜂須賀家の探りでもないらしい、行ってしまった

な——と思つていると、また同じ所から、

「少しものを訊ねたいが」という声がある。

源内は、うんざりした顔で、

「なんですか」

「こちらに住まわれているのは、もしや平賀殿と申されはすまいか。間違つたらご容赦ようしやにあずかりたい」

「いかにも、源内ともうす医家でござるが……？」

「おう、やっと尋ね当てましたな」と虚無僧たすの者、木戸がある訳でもないので、垣の門から、ズツとそこへ入ってきた。

「どなた？ ……」医家の尊厳を保つために、机の前へ帰つて、片肘かたひじを乗せ、「ご病氣みでござるか、診て進ぜよう、さあお上がりなされ」ととぼけている。

「いや、薬餌やくじを求めに伺つた者ではございませぬ。拙者は法月のりづき弦之丞げんのじやうと申す者——」

「待たつしやい。言葉も江戸のようであるし……法月とは聞いた

ような」

「こうじまち麴町にすまい住居いたす法月一学のせがれ悴江戸ではかねて御高名を

承つておりましたが、お目にかかるのは初めてにござります」

「ほほう……麴町の法月一学殿といえ、おおばんがしら大番頭をお勤めに

なる七千石の旗本、その御子息であらうしやるか。ふうむ……」

と少し意外な顔をしたが、「そして私に何の御用がありますかな。だいぶ尋ね廻つたようなお言葉であつたが」

「実は」

いいかけると、源内、

「まず……」と蒲団を縁先へ出して、「お掛け下さい」

「いただきます。宗しゅうほう法でござれば……」

天蓋の会えしやく釈をして、ゆつたりと腰を下ろし、根瘤ねこぶの煙草盆に一服つけて、のどかに紫煙をくゆらしながら、徐々じよじよと訊ねたずだした話はこうである。

ぜんじようじとうげ

禅定寺峠から、万吉を江戸に立たせ、自分だけ大阪へ戻ってきた弦之丞。訊ねれば、すぐにも会えると思つていた住吉村へ行つてみて、思わぬ失望をした。

ぬきや屋敷は、住む人もなく荒こうはい廃して、そこには、以前のよ
うなやからも住んでいなければ、常木鴻山こうざんも源内もすでにいな
かった。

浜の者に聞きあわせると、なんでも四、五日ほど前の夜に、手が入って上げられたという話。これは理に合わないので、なおも

詮せん索さくしてみた揚句、どうも蜂須賀家の者に意図を知られて、姿をくらましたらしく思われた。

つい、一ひ月とつき余りの日が空しく過ぎて、いつか秋風が立ちそめた。

そういつまでも、鴻こう山ざんの所在を探しているゆとりもない身――弦之丞は阿州屋敷あしゅうやしきへそれとなく目をつけ初めた。ところで、今日も安治川尻あんぢがわしりから何気なく波除山なみよけやまの裾すそへ来たところで、偶然、源内の住居すまいを覗いた訳であつた。

かいつまんだ話を聞いて、

「そうですか、それはもう住吉村には誰もおりませんまいよ」といつてから、「では、いまだに鴻山殿の居所は分りませんか」

それを訊ねに来た弦之丞へ向つて、源内の方から訊ねている。

「皆かきもく目聞き及ぶところがございませぬ。拙者は、源内殿こそご承知ではないかと存じて、お見かけ申したのを倅さいわいに、こうお邪魔申した訳でござるが」

「いかさま、一緒にいた私がそれを知らねばならぬ筈だ。ですがな弦之丞様、何しろワツと来られたのが真夜中で、鴻山殿が浜から小舟に飛び乗つたのは見ましたが、それから先はお互いにちりぢりばらばら……もつとも、この源内はあなた方のもくろみに、何の関かかわりもないのでして……」

変なところで断りを付け加えた。するとその時、

「ご免下さいまし……」

優しい声の訪れがする。見ると、萩はぎの乱るる垣根越しに白い横顔——下婢かひを連れてたたずんだのが、細かい葉の間から艶なまめかしい姿をチラつかせている。

「お入り」

源内が机の側から細い顎あごを見せると、下婢かひを外へ残して、つましやかに入ってきた若い女は、病家びょうかの者であろう、
 「あの、先生、おさしつかえはございませんの？ ……」と、弦之丞の後ろでちよつと立ち淀よどむ。

「なアに、かまいませんよ。別に気のおけるお客人ではない。先にちよつと診みて上げよう……どうだな、寝汗の工合は？ 相変ら

ず寝られない？ それやいかん、グウグウ寝て、おいしいものをウンと食べて、心を明るく持つのが一番。お化粧つくりもせいぜいきれいになさるがいい、遊山ゆさんもいい、芝居も結構。こんな割のいい病気はない……だが一ついけない、男はな。いくら暇があつても、色恋だけは禁制でござるよ」

「あれ、あんな……」

「ははは、それは冗談、まずこちらへお寄んなさい」

ここで病家をとっているのは、長崎帰りのホンの旅りよちゆう中ちゆうの内

職だが、源内、医業にかけてもなかなかちよくで、殊に女には当りがよい。

まるで子供をあやすほどに優しい。人形のように前へ坐らせた。

弦之丞は少し退さがつて、その診察の手際てぎわを眺めていたが、女の後ろ形が、極めて瘦せていることから眼をみはつて、帯つきや肩の線や、※した襟えりの生はえ際に、おや？ ……という面持おももち。

「ありがとうございます」と、源内の前を離れた時に、女もチラと弦之丞の天蓋を正面から覗のぞいて、

「まあ、あなたは！」

びっくりしたような声である。

「や、お米よね殿であつたか。最前から、どうも見たようなと思いだされておりました」

「私はまたちつとも存じませんで——」お米の頬には白粉おしろいの下から桃色の血がボツとしてきた。蠟人形ろうにんぎょうの冷たい顔に灯あかりが映は

えたようである。

「こんな所でお目にかかろうとは思議なご縁でございます……
私はまさかあなた様とは思いませんでしたの」言葉の辻褄を失
つてゐるのは、お米の胸に、川長で初めて会つた時のことや、関
の山で死のうとまでした思い出が、いっぺんにこぐらかつてゐ
るのであろう。

川長のお米にそれほど思われているとは、夢にも知らなければ、
また素^そぶりにも気づかない弦之丞は、心もち天蓋^{てんがい}の頭^づを下げて
慇^{いんぎん}懃^{ぎん}に、

「ここでお目にかかつたのを倖^{さいわ}いに、何よりはこの夏の頃お世話
になつたお礼を申し上げねばならぬ。殊に大津の半齋殿には、き

ついでご迷惑をかけまして、蔭ながらお気の毒に存じている」

「いいえ、そのご挨拶は、万吉というお人が、あれから後江戸へ行く途中に寄って下さいまして、いろいろお話も伺いました。その時の様子では、弦之丞様がまた大阪へお戻りになったとやら……実は心の中だけで、もう一度ぐらいは、キットどこかで会いはしまいかと思っております。まアほんとにこうして……」

ほそぼそ
細々とした指と指を綾に組んで、前髪の蔭からじつと熱ッぽい流し眊めを向けた。もつと人目のない所で、しみじみと話したいようなふうも溢れている。

「ではお米殿にも、あれから後に、間もなく大津より戻られたと見えますの」

「はい、叔父に厳しく叱られました。気が進みませんけれど、こちらの先生へも通い始めました。私、ほんとにわがままなのでございますよ」

「ご病気であれば是非がない、近頃はどうぞござります、少しはおよろしいか？」

「ええ……」と眸ひとみを納めて、お米の顔は急に暗くなった。心に悲哀やひるみが湧きでる時には、争われぬ病のかげが目くぼただよに漂いだしてくる。

「病さえなければ——」とお米は血に渦を巻かせて考える。

「私は必ずこの人を自分のものにしてみせるのだけれど！」

ほんとにそれだけの熱がある。男というものの体験がある。病

さえなければ、お米の性格はもツと強く恋にぶつかって行くだろう。それを、己おのれも知る癆咳ろうがいといういまわしい病が邪魔をする時、お米は、その悪魔を飼っている自分の血と呪のろわれた身を亡ぼしてやりたくなる。

床の間の薬くすり 笥ばこに向つて、真しん 鍬ちゆうの匙さじをにゆう鉢に鳴らしていた源内は、様子を振りかえつて、

「ははあ……」と、お米の容体を診みてしまった。

源内の手前、永居もできず、お米は調ちよう 薬やくを渡されると、是非なく帰り支度をして、弦之丞に心を残しながらそこを出ていった。

「若い身なのに、癆咳ろうがいであるそうな。不憫ふびんな者でございますのう」

その後で、弦之丞と源内の話。

「あまりきれい過ぎますよ、あの縹緞きりようがな」

「ご丹精たんせいで、癒なほるお見込がござろうか」

「イヤ、癒なほりませんな。叔父御おじごにせがまれて薬は上げているもの

の、不治の病、ことにあの年頃——男恋しい盛りですから。蛇じ

精龜血やせいきけつを啜すすりましても、それ、一方の煩惱ぼんのうを煽あおるにすぎませ

ん。まことに可哀あはれそうなもので」

とまた、門口で弦之丞の名を呼ぶ者がある。

出てみると、お米の召し連れていた女中のお藤、弦之丞の手へ

蝶結びにした裸はだかぶみ文を渡すと、返辞も待たずに小走りに戻ってしまう。

何気なく解といてみると、そこらの茶店で、筆や紙を借りての走り書であろう。文辞ぶんじもそそくさと、是非お話ししたいことがある、待っています、九条村の渡舟わたしの前まで来て下さい。とある。

弦之丞はいささか当惑とうわくの面もち。

お米の方では、思いがけないよい機おりを、どうかして遁のがすまいと、九条安治川の渡舟小屋の側わきに立って、秋陽に縋よれる川波をまぶしそうにしてたたずんでいた。

「そして弦之丞様は、キット来るとおっしゃったかい？」

裸文を手渡して、そこへ帰ってきた女中のお藤に、こう念をお

すと、お藤は自分の恋のように顔を赧あからめる。

「いいえ、そこまでは何つてまいりません。だって、奥で源内様が、聞いておいでになるのですもの」

「気がきかないねえ、お医者様にはかかわりのないことじゃないか」

「けれど、やきもきなさいますな、きつとおいでになりますよ。

お嬢様のようなご縹きりよう 緻ようよしに思われて、心を動かさないお人なら、よッぽどどうかしております」

「あら、よいほどにお世辞をお言い……」

袂たもとでフワリと打ぶった時、楊かわ柳やなぎの黄色い枯葉がピラピラと舞

つて光る。

川口へ下つてゆく、高瀬舟や番所船、十反帆たんぼの影などが、ゆるゆると流れてゆく合間に、向う岸の四貫島しかんじまの森から白い鳥群が粉のように飛び立つのが見えた。

「もしやあなたは、川長の御寮人様ごりょうにんではございませんか」

渡舟わたし待ちの前から、こう話しかけてきた中年増ちゆうどしまがある。身装みなり

は地味、世帯やつれの影もあるが、腰をかがめた時下げた髪かみに、珊瑚さんごの五分珠だまが目につくほどない土佐とさだった。

「おや、お前は元、私の家の仲居きちをしていた、お吉きちやなかつたかえ？」

「さようでございます、ずいぶん久しくお米様のお顔も見ませんでした、大そうご成人せいじんなさいましたこと」

「お前も、家にいた頃と違って、すツかり堅かたぎ気のお内儀ないぎらしくなりましたね」

「いいえ、気苦労ばかりしているので、装なりにも振ふりにも構えなくなりました」

「そして今でも、家を出た時の人と、一緒に暮らしておいでなの？」

「はい、添い遂げているという名ばかりで……」

「それが一番倅せじやないか。私なんか、他人ひとには羨うらやまれるような身の上でも……」とツイ自身そへ反れるのを口くちごもつて「結構だよ、そういう苦労はね。で、ご亭主さんは、何を稼業稼業にしているのかい？」

お吉は、言いにくそうにうつむいて、

「いやな渡世とせいで、十手持ちなのでございますが、かんじんな東のお奉行所の御用はおツぽり放しで、この二ふた月程前に、パイと家を出ましたつきり、生きたものやら死んだものやら、何の便りもございません。それでこうして、四貫島の観音様へ、毎日お詣りまいしているのですが、お米様、ほんとに、人の女房となつてみると、うにいえない苦労があるものでございますよ」

「二ふた月も戻らないでは、さぞ心配なことだろうね」

「もうもう、どんなに思うた男でも、目明しの女房になど、決してなるものではございませぬ」

「いつも命がけの渡世だからね。そして、お前のご亭主は、何と

「う人だつたかしら？」

「万吉と申しまして、仲間なかま受けだけはよい人なのでございますが」

「あ、万吉？ その人ならツイこのあいだ、私が大津で逢つたばかり」

「えつ、お米様、じや万吉は、あの、無事でおりましたか……」

お吉は、観世音かんぜおんの靈験れいげんにでも会つたように胸をおどらせて問いつめた。

ピタ——と草履の音が止つた。四、五間先の砂利置場の蔭、そこから、じつとこつちをみつめたのは、この辺りに下屋敷のある蜂須賀家の森啓之助けいのすけ——例の素迅すばやい仲間ちゆうげんの宅助たくすけを後ろにつれて。

いきにんぎよう
生人形

「出るよう」

船頭の声に急せかれて、渡舟わたしの棧橋かけはしへドタドタと人の蹠あしおと音がなだれていった。

お米との立ち話で、良人おっとの万吉が大津の半齋はんさいの所へ立ち寄り、その足で江戸へ向つたと聞いたお吉は、わずかの消息にでも、ほつとした嬉しさを感じたが、渡舟の出るのに気忙きぜわしく、

「じゃお米様、いずれまたゆるりとお目にかかります」

いそいそと駈けだして、船の上からもう一度頭を下げた。

「お嬢様、こつちへ隠れておいでなさいませ」

「あれ、なぜだい、お藤」

「でも、これで渡舟をやり過ごすのが、幾度目だか分りませんもの。船頭や待ち合せていた者も、変に思つて、私たちを見ているじゃありませんか」

「そういえば弦之丞様げんのじょう、どうしたのだろうね」

「そろそろ日が暮れてまいりますのに、男という者は、水を向けるとこの通り、わざとじらすんでございますよ」

「じらされるのならいいけれど、もしかして、私を嫌っているのではないかしら、病氣のこともご存じだからね」

「いやですよ、またカーツとして、短気なことをなすつては」

「ああ、日が暮れる。お藤や……どうかしておくれなねえ……」
 「だって、困つてしまふじゃありませんか。こうなると弦之丞様も憎らしい。では、私がもう一度、源内様の所へ戻つて、いるか、いないか見てまいりましょう」

「じゃ、早くにね……」と、お米が振りかえると、女中のお藤は、もう小刻みの足になつて、砂利場の側を駈けだしていた。

と一緒に、石置場の蔭から、急に仲間ちゆうげんてい態の男が立つて、ドーンとお藤にぶつかつて行つた。

「あぶない……」

こつちでお米が声を筒つづぬ抜かせた。——ハツと思つて眼をみはるとお藤の体はグツタリして、仲間ちゆうげん間の脇の下に掻かい込まれ、声

も得立えたてずズルズルと川縁かわべりへ。

「あれッ！ お藤や、お藤や！」

夢中で走りだしたお米の眼の前にザブーンとすごい波音がして、雨のような水玉が、陸おかの上まで飛び散ってきた。

「助けて下さい——召使が突き落された！ あれ！ 流れて行きます。誰か来て——ッ」必死に人を呼ぶその口へ、何者か、大きな掌てを蓋ふたしてしまった。そして羽交はがいじ締めめに強く抱きすくめた。お米の指が離そうともがく、抱えた両手の力は強い。折も悪く、早おうま逢どき魔ま方ま刻どきに近い九条堤づつみ、人通りも絶えている。

「騒いではならぬ。こりやお米殿、案じた者ではないによつて、少しの間静かにしているがよい」

「オ！ その声は、ケ、啓之助様……」

「手を離して進ぜるが、逃げてはならぬぞ。逃げる影へは思わず刀が追いかけたがる」

「く、苦しい……」

「宅助、すまぬが、しばらくの間、向うの堤どてに立って、人通りを見張っていてくれ」

「切せつのうござんす……も、森様、逃げは致せしませぬから、この、この乳の上の手を早く離して下さいませ」

「そうだ、そなたの病気はここにあつたの。うつかり肺臓へ力を入れて、さだめし胸が苦しかったであろう。ゆるしてくれ。これというのも一念にそちを想う煩悩ぼんのう盲目、悪い心でしたのでは

ない」

「エエ、何ほ何でも、罪もない女中を河へ突き落して、その上こんなご無態むたいは、あんまりでございます」

「そう怨むうらのはもつともだが、いよいよ阿波への帰国も近く、待てど暮らせどそなたからの返事はなし。ここで見かけたを倅さいわいに、是が非でもあの話を取り決めたいと思うたからじゃ」

「……とおっしゃるのは？」

「もうそなたの胸には考えがついている筈！」

「阿波へ連れて行こうと、いつぞやおっしゃったあのことでございますか」

「折もよし、四、五日のうちに太守の御帰国まんじ卍丸の船出！ どう

にでも隠す工夫をしてそなたを連れてゆく所存。もう否応はあ
るまいのう……」

森啓之助が手離すとともに、お米の体は朽木倒れに、砂利場
の山へうっ伏ぶしてしまった。

「どうした？」

寄ってみると、ひどく息が切ないらしい。肺臓あえの喘ぎに背中は大
きく波打っている。しかし一度は真まツ蒼さおになった顔色が、その
時急に、反動的な紅こうちよう潮しほをさし、針で突けば血の吹きそうな耳み
朶みたぶをしている。

「拙者が、阿波へ連れて行こうというのは、恋ばかりではない。

そなたの苦しむ癆咳ろうがいにも、あの潮しおの香や山の気が、どんな薬よりも利きくであろう——、そう思うて勧すすめるのじゃ

「……………」

「な、お米、今が心の決め所じゃ、よもやいやではあるまいの」

「……………森様……………」

「うむ、得とく心しんがまいったか」

「どうしても私には、阿波へ渡る気になれませぬ」

「あの鳴門の渦うずの海、越えぬ者は怖ろしがる。だが、恋もそれに同じこと、渡ってみれば苦もないのじゃ。ましてや千石積ごくづみのお関せき船ふね、渦に卷まかるおそれもなし、楽しい彼岸ひがしは一夜のうちうちに迎えてくれる」

「そんな訳ではなく、どうしても」

「な、何ッ」ふるえを帯びた啓之助の声。

「いやだというのか！」お米の耳をつんざいた。

「……………」

「うーむ、ではとくからの量りょうけん見みであらう。なぜ、いやとあら

ば早くから、キツぱりといいきらぬッ！」

「お察しなされて下さいませ……素す気げないことをいいきれぬ、弱い客商売の娘でございます」

「だまれッ。客商売じゃと申すいいわけは、つまり、いろは茶屋の売女ばいた同様に、この啓之助を手玉に取ったという意味かッ！ よ

しッ、拙者もお船手の森啓之助、腕にかけてもつれてゆく。オオ、

きツと阿波へつれてまいるぞ」

「あ、ご無態むたいな……」

「逃してなろうか。宅助、宅助ツ、手を貸せい！」

帛きぬを裂くような悲鳴が流れた。

風が出た——いつかドツプリと深い宵闇。

大川の三角洲さんかくす、四貫島、うす寒い川風が、蕭々しょうしょうと苜あしを鳴

らしてやまぬ。

鬢びんを吹かせて走りだしたのは森啓之助。その小脇に引つ抱えら

れたお米は、あわれ悶絶もんぜつ、猿轡さるぐつわの無残な姿が、もがく力を

さえ失つて、ダラリと白い手を垂らしたまま……。

堤どてを下りて市岡新田いちおかしんでん、耕地の闇を四、五町走ると、道はふ

たたび大川の洲へ出て、そこに一艘の高瀬舟。

「旦那、わしの肩へお貸しなさい」

「ウム、さすがに疲れた……よいか、水へ落すなよ」

「生人形のようなもの、軽いもんでさ」

「よし、船は拙者が抑えている」

「おツと！」

お米を肩に引つ担いで、仲間間の宅助、ぽんと舟へ飛び移った。

続いて啓之助。

グンと棹を押すと、舟底をザラザラと折れ芦が撫でて、二つばかり舳が廻った。

藁わらぼうき 箒ほうきを取つて、櫓ろ臍へそへ湿しめりをくれた宅助、ツ―ウと半町ほど流れにまかした所から、向う河岸がしかすがで春日出がの、宏大な館やかたいらかの藁わらをグツと睨にらんで、

「旦那、お長屋ながやの方じゃありますまいね」

「違う！」

「じゃお船蔵ふなぐら？」

「水門へ着けろ」

「目付ひかが控ひかえておりますぜ」

「まずいな」

「生きものですから、バレた日には困りますよ」

「うむ……お下屋敷へはなお持ち込めぬし……」

「女一人のために、家断絶いえだんぜつなんぎ、ましやくに合いません」

「意地だ、どこかへ着ける」

「と、しますと、六軒家けんやの森ですね」

「お船蔵ふなぐらの外にあたるではないか」

「白状しますが、実は、仲間ちゆうげん部屋や船番ふなばんの下ツ端したばが、こッ

そり夜遊びに出る抜け道が一つあるんで」

「よしッ、そこへやれ」

「合点がってんです！」意気込んだ宅助、三角洲すを右に見て、腕ッ限りグ

ングンと櫓ろを撓たわめる。

この一伍いちぶしじゆう一什いっしを、源内の所から帰りがけに、ふと見かけてつ

けて来たのは、法月弦之丞のりづきげんのじょうであつた。やや暫し、芦あしの洲すに半は

んしん
身を没して、じつと行手を見定めていたが、何思つたか、俄かに
か
芦を搔き分けて走りだした。

はだかび
裸火

あし
芦の深みに隠されて、とま苦をかぶつた一艘そうの輕舸はしけがある。ザワザ
ワと搔き分けてきた弦之丞、苦をはねのけてそれへ跳とび移り、早
くも砂を崩して川底から離れだした。

ひ
退き汐時しおどきか水脚みずあしの迅はやいこと、満々たる大河へのぞんで、舟
は見る間に木この葉流はし——。

あなた
彼方の川面かわづらを水明りに透すかしてみると、さきに陸おかを離れた啓之

助の舟、櫓韻ろいんかすかに、今しも三角洲の先から舳へさきを曲げて、春日かす出がでの岸へと真一文字に漕こぎ急いで行く。

「おお、案たがに違たがわず……だが女をかどわかして、どこから屋敷内へ運びこむつもり？ ……どうして阿波へつれ行くつもり？ うむ、ことによると阿州屋敷にも隠し道が」

流れに任せた輕舸の中では、法月弦之丞の目と手足しゅそく、その時怖ろしく迅速に働いていた。

まず先に、顎あごの紐ひもを解いて、かなぐり捨てた天蓋てんがい、ヒラ——と河へほうり投げた。

鼠木綿ねずみの手て甲こう脚きゃ絆はんも、一瞬間まの間に解ときほぐし、斜かめにかけた袈裟掛絡けさけらく、胸むねに下げた三衣袋さんいぶくろ、すべて手早くはずしてしまふ

と、次には平紵ひらぐけの帯、白の宗服しゅうふく、そツくりそこへ脱ぎ捨てる。

と、思うと。

かねてから三衣袋ひそに潜ひそませておいた黒奉書くろほうしょの袷あわせ一枚、風をはらませてフワリと身にまとい、目立たぬ色の膝行袴たつつけをりりしくうがち、船底の板子を二、三枚はねのけた。

取りだしたのは藁苞わらづとである、グイとしごいて、苞からむきだされたのは、蠟色靴ろういろざやの滑なめらかな大小。

蜂須賀家の下屋敷を探る上に、これらのことは、疾とくから用意ろじたてのあつたこと。かくて、軽快な武士姿と変つた弦之丞は、櫓仕立ろじたてをしてグングンと先の船を慕い始めた。

一方は、森啓之助もりけいのすけ。そんな者がつけてくるとは夢にも知らな
い。

舟は矢の如く安治川を横切つて春日出岸、蜂須賀家のお船蔵ふなぐら
や下屋敷の下をさかのぼり、六軒家の真まつ暗くらな藪岸やぶぎしへ着いた。

「さ、旦那、女を下から抱き上げて下さい」

仲間ちゆうげんの宅助は、先へ這い上がつて両手を伸ばした。闇にも

艶えんな姿がズルズルと引きずり上げられる。

川長のお米よねは、猿轡ざるぐつわをかけられて藪やぶの中に横伏せとなつた

まま、もがき疲れたか、脛はぎも露あらわにグツタリとしていた。

もしかして、こときれては玉たまなしだぞ、と啓之助、そつと猿轡

へ手をやってみたが、大丈夫、温ぬるい涙が指先へ触れた。

「宅助、そちのいった抜け道とはどこか」

「向うに見える森を抜けると、お屋敷堺ざかいの高堀たかべいがあります。そのどん詰づまりの藪やぶだたみだたみで」

「家中の者の眼に触ふれるようなことはあるまいな」

「さつきも申し上げた通り、仲ちゆうげん間げん部屋の者が夜遊びに出るだ

けで、めったにお見廻りが来る所じゃありません」

「そうか」

「ところで女は、どこへ押し込んでおくおつもりですかい」

「お船蔵の綱部屋はどうじゃ。あの部屋の鍵かぎは拙者が預り役だによつて、余人に開けられるおそれもない」

「なるほど、そいつあいい所へお気がつきました。綱部屋へほう

り込んでおけば、いざお関船が出るつていう場合にも、ほかの荷物に紛まぎらわして、卍丸まんじの船底へ積んでしまうのは、何の造作ぞうさくもございませぬ」

「なにしろ、ここ三、四日がかんじんだ。無事に阿波へ着いた上は、幾らでも褒美ほうびをつかわすから、ずいぶん骨を折ってくれ」

「ようがすとも！」宅助は再びお米を肩にかけてドンドン走り出した。如法にょほう闇夜あんやの梟ふくろの森は、たちまち、その跫音あしおとと三人の影を吸ってしまった。

と——安治川の中ほどには、弦之丞の輕舸はしけが、ギツギツとこつちへ向つている。

さかのぼるので舟脚ふなあしが遅い、面おもてを掠かすめる飛沫しぶきの霧！ 息づま

りそんな川風に鬢髪びんぱつが立つ。

「おお、六軒家の藪岸へつけたな！」弦之丞は、さらに必死と漕ぎだしたが、岸が近づくに從つて、思わず櫓音ろおとを偷ぬすませた。

蜂須賀家の船蔵ふなぐらが、すぐ目の前に横たわっているからだ。百本杭ぐいの柵さくが見え、掘割が見え水門が見える。乱松らんしょうの間から高く聳そびえているのは汐見櫓しおみやぐら、番所の灯ひがチラチラと水に赤い影を縊よらせ、不寝ねずの番が見張っている。

そこから続いて川下へ数丁、堀へいの別廓べっかくをなして、宏壮な棟を望ませている所は、阿波守重喜しげよしが大阪表の別荘——いわゆる安治川のお下屋敷。ここ須臾しゆゆの間に、法月弦之丞が、探りまなこの眼をつけ初めた目標の建物である。

六軒家の梟ふくろばやし 林やしに、荒れはてた誓文神せいもんじんの祠ほこらがある。この辺
 一帯、梟や渡り鳥の巢をかけるのが多く、冬になると綿屑わたくずのよ
 うなものかどの梢こずえにも絡からまって見えるそうなの。

今は秋。林の中は芒すすき明あかりといいたいくらい、ボウと白光はっこう
 の花叢はなむらがほのかである。

川から上がった弦之丞、草を分けて奥へ奥へと入ってゆく。そ
 こで、誓文神せいもんじんの狐格子きつねこうしをふり仰いで、はてな！ と少し立ち
 迷った。

「たしかにこの辺へ来た筈だが？」

森啓之助らの姿を、ここまでつけてきたところで、皆目見当が

つかなくなつてしまつた。と——狐格子の前に、何やら光る物が落ちてゐるのに眼を止めた。

拾つてみると、滑かな瑠璃なめらかな たいまいの笄こうがい。お米のものと判定するよりほかはない。

「あ！ ことによると」と誓文神せいもんじんの狐格子をポンと押しのぞて覗きこんだ。

はたして、その中は抜け道の口であつた。

ほこら 祠の内は床板ゆかいたもなく洞然とうぜんとして、六尺ばかり掘り下げた

る。そこを下りて、しばらく横へ歩いて行くと、案のごとく、仲間ち間部ゆうげんべや屋の者が博奕ばくちや夜遊びに出入りする隠し道、弦之丞は、まんまと蜂須賀家の囲い内へ出た。

「しめた！」と胸がおどる。

物かげに潜ひそんで、一応辺りを眺め廻すと、船手組ふなてぐみのお長屋や

役宅の棟が鉤かぎの手なりに建てならび、阿波守の住む下屋敷の方へも、ここからは何の障壁しょうへきもなく、庭つづきで行かれそうだ。

「いよいよ重喜しげよしの身边に近づいて見る事ができた。これも銀五郎の導きであろう」

弦之丞は、四囲鉄壁のこの屋敷内へ、あまりやすやすと入れたことを奇蹟に思った。

この隠し道を知ったとたんに、かれの心は、片恋のお米を不憫ふびんと思うことすら忘れていた。燃えているのは功名心、探秘心たんぴしん、それはお千絵様ちえのためである。

広い屋敷の中はシンと寝静まっていた。弦之丞は、物の影から影へ移つて、下屋敷へ近づこうとしたが、道に迷つたものか、思わぬ所へ出て、思わぬ物の影を見上げた。

それは、安治川から水を引いて水門のうちへ諸船を繋いでおくお船蔵——。荷船、脇船、色塗の伊達小早などが七、八艘みえる中に、群をぬいて大きな一艘のお関船は阿波の用船千石積の卍丸。

寛永このかた、五百石以上の船は、幕府の禁令なので、表積みは半分に称しているが、長さ十八間、幅七間、二十四反帆、二十四挺櫓、朱の欄干を立てめぐらし、金ちりばめの金具や屋形の結構さ、二十五万石の太守のお座船だけあつて、壮麗目を奪

うばかりである。

「さすがに裕福な阿波の楼船ろうせんだけあつて、將軍家の安宅丸あたけまるにも劣らぬものだ」と、弦之丞も思わず物蔭からしばらく見とれていたものだった。

そして、何かの物音に、ひよいと後ろをふりかえると一軒の綱つ倉くらがある様子。

金網を張った白壁の切窓きりまどに、かすかな灯影ほかげがゆらめいていたので、何心なく覗のぞいてみると、さっきの二人が、ここへ入り込んでいた。

「やいッ」という声は仲間の宅助たくすけ。

蝋燭ろうそくの裸火はだかびを前に置いて、

「これほど俺や啓之助様が、ことを分けての親切なのに、いい加減駄々をこねやがれ。旦那はとにかく、この宅助が承知しねえぞ」
 優しい言葉に乗らないので、今度は脅おどしにかかっているらしい。すすり泣きの声がする……。お米の姿が裸火にてらされていた。蛇のようにとぐろをまいている船綱ふなづなのなかに身を埋めて、

「嫌です、嫌です！ 阿波へなんか……」

「ちえツ」と、宅助は舌を鳴らして、「旦那、とてもこいつア諦あきらめものだ。疋丸まんじが出るまでに、お目付へ知られては一大事、いつそのこと今のうちにバツサリ斬やつて、煩惱ぼんのうの根を断たつておしまいなすつたほうがようがすぜ」

ただし、脅かしに——と目ませに知らせていうと、森啓之助も

心得ている。大刀の鞘さやを払はつて、お米の頬ほへ切きツ尖さきを突きつけた。
 「あ、不愼ふびんな……」と外ぐわいにいた弦之丞げんしやう、助けてやる工夫くふうはないかと、綱倉なづかの戸かどへ拔ぬき足あしさしてゆくとまた、それに添そってよれてゆく一つの影。

不寝ねの番ばんの武士ぶしであろう。ジ——と隙ひまをうかがつて、

「うぬ！ 曲く者せものツ」

氣殺きころの声こゑと早はや技わざ。

弦之丞げんしやうの脾腹ひばらを狙ねらつて、りゆうツと突きだした手槍てしやうのケラ首くび！

対手あいてをはずしたか、ぶすツと白壁しろかべへ刺さし込んだなと思うと、法はふ

月弦之丞げんしやうの姿すがたは、時ときすでにそこにあらず、どう切きられたものか藩はん

士しの侍さむらい、槍やりをつかんだまま肩かた口ぐち柘榴ざくろなりに割われている……。

血祭り

パチツ……と一石^{せき}。いい音だ。

櫃^{かや}の碁盤へ那智黒^{なちぐろ}の石。

ここでしばらく間^まがあるう、というふうに、竹屋^{たけや}さんみきようありむ

村^ら、扇子^{せんす}をとって肘^{ひじ}をのせ、

「まず、ごゆるり……」と、余裕^{じゆう}の綽^{しゃく}々^{しやく}さをみせたものであ
る。

局^{きよく}に対している人は阿波守^{あはもり}重喜^{しげよし}。

「なんの」

といったが、指に挟んでいる朝鮮貝の白一石、盤面の宙をさまようことやや久しく……。

パチリ！ やがての音である。

「いよいよ本丸火の手と見えました」

「猪口才」

白、電瞬でんしゆんに打ってゆく。

「こうまいる」

「はて、きたなき敵でありつるわよ」

「孫子九變の伏手ふせてと申し、すなわち兵法の一手でござる」

「あな笑止しょうし、苦しい言い訳」

パチリ、パチリ、たちまち戦雲漠々ばくばくとしてきた。

碁盤碁石は立派だが、阿波守も有村卿も、やはり衆にもれぬザル組でおわすらしい。

しかし、負けぬ気の殿と、慷慨こうがい家で壮年の公卿くげ様との対局は、技わざを別にして興のある碁敵ごがたきだ。

ここは下屋敷の一部、名づけて隣帆亭りんぼんていという茶席。

初更しよこうながら深沈とした奥庭、秋草や叢竹むらたけが、程よく配られた数寄屋すきやの一亭に、古風な短檠たんけいに灯をともしして。パチリ、パチリ、と鬨とうせき石の音……そして、あたりは雨かとはばかり啼なきすだく虫。

その虫の音がフトやむと、

「殿……」

庭先の踏石へ、一人の家臣がうづくまつた。

「何じゃ？」

阿波守は盤面から目も放たない。

「明日お出船に相成ります、あす 卍丸まんじのことについて、ちと御意ぎよいを得たいと存じまして」

「何じやと申すに」

「船中お屋形の御調度の物」

「ウム」パチリ！ と打って、「ウム……」後の手を考えている。

「例年の通りにてよろしゅうござりませうか」

「啓之助けいのすけに任せておけ、森に」

「は、京都よりのお荷物は、あれだけで余よの物はござりませぬか」

「ない」

「それから、汐の都合で、まんじ卍丸は明日のあかつき暁にともづな纜綱を解きます。これは森様よりのお言葉、殿にも何かのお支度、今宵のうちに願わしゅう存じます」

「ウム……。分っている」

家来の者が、礼をして立ち去りかけると、

「あ、待て！」と呼んで、阿波守初めてたんけい短檠の光を顔にうけてこちらを向いた。

「京都よりおしのびの方達はまだ見えぬか」

「は、まだ御着邸なさりませぬ」

「申しつけてはあるが、見えられたらすぐここへ」

「心得ております」

しばらくするとまた虫の音と碁石ごいしの音。

竹屋さんみきよう三位卿は、年まだ十八の頃、かの宝曆ほうれきへん變の陰謀にくみして、徳川討つべしを熱ねつきよう叫こゝろしたため、真ツ先に幕府から睨にらまれた公卿くげである。けれど時の桃園ももそのてい帝からは、いたく頼たのもしく思おぼされていた一人である。

他の十七卿の堂どうじよう上じやうが、問罪もんざい謹慎きんしんをうけるはめとなるや、有ありむら村こつぜんは忽然こつぜんと姿を隠した。

自殺したという説——その頃、もつぱらであつた。

「幕府などの手に、自由を縛られて堪るものか」

という気概の有村、自殺などをする筈がない。コツソリ蜂須賀家の奥に隠れ、長々と寝たり起きたりして垂加流すいかりゆうの神学書、孫そ

子呉起んしごきの兵書などを耽読たんどくしていた。

重喜しげよしとよく議論もやる。

兵学、弓術、馬術、邸内さんみきようでできることなら何にでも対手あいてになる。居候さんみきようのくせにして三位卿有村、妥協が嫌いだから時々こうぜつ口舌火を発し、ひいては、ただちに、幕府討つべし！ ということになる。これには阿波守もてこずるらしい。

一兵一矢しの蓄えもなく、居候すかんびんをしている素寒貧わかくげの若公卿には、どんな過激な議論も吐けようけれど、重喜には、譜代ふだいの臣、阿波二十五万石の足枷あしかせがある。そう、滅多に動けたものではない。

たとえ、尊王の赤心、反徳川の意気、胸に炎々たるものがあつても、下手なことをしたひには、藩祖はんそまさかつ正勝以来の渭之津いのつの城の

白壁に、やだま えんし ゃうだま矢玉煙硝玉の穴があくはめとなる。

「殿！ おしのびのご来客、ただ今お着きになりました」
さつきの家臣が報しらせてきた。

庭伝いに、数寄屋へ通つた客なる人、京浪人と称しているが、
まことはしちじょうさまのかみ七条左馬頭、うめたにうししょうしょう梅溪右少将、かたのさきょうだゆう交野左京大夫の
三卿で、歴々たる公卿たちである。

一様にしのびの目立たぬ身装みなり、茶室であるから仰ぎょうさん山な会釈
はなく、たんけい短檠の灯もほの揺らがぬ程、もの静かに席へつく。

「お待ちうけ申しておツた」

盤面の石をサラサラと掃はいて阿波守が座に直ると尾おについて、

「ずいぶん遅いお見えでありました」と、居い候そうろうの竹屋さんみき三位さんみき卿よう主人しゅじん顔かほして不平ふへいをいう。

「例れいの京町奉行きやうちやうの目めが、うるさく見張みはりつておりますために……」
右少将みぎしやうがおとなしく言い訳いげする。

七条左馬頭しちじょうさばとう、改かへまつて、

「阿波侯あわにおかれては、いよいよ明日あした、卍丸まんじでお国表くにうらへお引揚ひきあげなされる由よし、何なにやら盟主めいしゅを失うしなうような寂寥せきりようを覚おぼえまする」

「されば、そのほうが、策さくを得たものではないかと存ぞんじまして」

「無論もちろん、異議いぎなくよろしゅうござりませう」と、賛同さんどうしたのは

交野卿かたのきやう。語かたを次つぎいで「宝曆たからの大變おほより、早八年はやはちねんの星霜せいそうを経てお

りますゆえ、幕府ばくふそのものには、近頃ちかごろ油断あぶらだんのふうも見えてまいり

ましたが、かえつて、天満組てんまぐみの一部の者や、また江戸方の隠密おんみつ中に、執念しゅうねんく目をつけている輩やからがありますとやら」

「あるどころか、彼らの暗中飛躍こそ怖るべきで——」と竹屋三位が、這個しやこの消息通をもつて任じながら、

「第一に、吾々たちに御当家という後ろ楯うしろだてのあることを観破した者は、江戸方の隠密甲賀世阿弥よあみ。これは、御本国劍山つるぎさんの山やまろ牢うらうに、終身押しこめてありますゆえまず安心。ところがここに

また、天満浪人の常木鴻山こうざん、俵一八郎などと申す者あつて、江戸の隠密どもと結託けつたくなし、御当家の内秘を探りにかかつております」

「すりや大事おほごと、また宝曆の轍てつをふむことにならうも知れぬ……」

右少将は色をかえた。

「しかし、御安心なさるがよろしい」

竹屋三位卿、わが手功てがらのように、

「鴻山は住吉村から追つ払い、また一八郎はすみやかに召し捕りました。やがてこれも剣山へ送つて、世阿弥同様、終身かんじやろう間者牢の住人となりますわけで……」

「やれ、それは何よりな」

「水も洩らしは致しませぬ。御明敏な重喜公、それに、不肖ふしょう三位有村が帷幕いばくにあつていたしますこと」

「ははははは……」と、それまで黙っていた阿波守は、いじけずにして潤かつたつ達で、若々しい居候の言葉が気に入ったらしくこうしよ哄

笑うした。そしてすぐに真顔になり、

「余事よじはおいて三卿の方々、かねて、諸方へつかわしました密使の模様は？」

「即答、または評議中、御返事まちまちではありますが、今日まで内ない諾だくあつた諸国諸侯の御連名……」と年長の交野かたの左京太夫、ふところを探つて細長い包みを解き、帛紗ふくさを敷いてその上へ、スラリと一巻の連名状を繰り展ひろげた。

「三位殿、御苦勞ながら」

阿波守が目くばせすると、

「は」立ってあたりに人なきやをたしかめ、縁の端に坐りなおして見張役となる。

世が世なら竹屋さんみきよう三位卿も、九重ここのえの歌会うたげ、王おうびよう廟まつりの政治まつりに
 参じる身分、まさか、見張番まで勤めるのでもあるまいが、朝廷
 の御衰微ごすいび今より甚しきはなく、公卿くげの無視むしさること幕府の小役
 人にも劣つてきた今の世が世である。是非がない時勢なのである。
 「食しよつかく客だからと思えば癩しやくにさわるが、これも一天の君の御おんた
 為ためと思えば……」

三位卿は、かこち顔な見張の端居はしい。

「おお……」と乗りだして扇子せんすをつき、連名状へ眼を落した阿波
 守、三卿とともに息をのんで、ズーと血判をたどりながら、

「盟主とくだいじきんたか、徳大寺公城かたず公！」固唾つづやをのんで呟つぶやいた。

「堂上お味方二十七家け、事いよいよに迫りますれば、京方すべて

を含みます」と左馬頭がそれに応じる。

「宇治おわに在す竹内たけのうちしきぶ式部先生！」

「ぐんし軍師と仰ぎますつもり」

「江戸表は山やま県大た貳、まッ先に火を放つて、箱根の嶮けんに王軍を

待つまちの計か」

「しかとちよう謀じあわせてあります」

「して、大義に呼応の諸大名は？」

「筆頭！」かたの交野卿、扇子の要を文字について、

「はちすかあわのかみしげよし蜂須賀阿波守重喜公。すなわち御当家」

「ウム！」

「肥前、久留米の有馬ありまただよし忠可公」

「オオ」

「大洲おおすの加藤家、柳川やながわの立花家」

「ウム」

「佐賀の鍋島なべしま、熊本の細川、濃州のうしゅう八幡やわたの金森家……」と言いかけた時、

「やッ、怪しい気配！」見張の三位卿が手を振った。

怪しい者！ と聞いて、三卿の面々、あわただしく連名状を巻き納めた。

阿波守もきつとなる。

短檠たんけいの灯がボツと燻いぶつて、一抹まつの不安しよくが燭しよくをかすめ、なんと

なくいやな空気がみちた。

「誰だツ——、何者じゃ！」

若氣わかぎな三位卿は、もう庭手へ降りて木立の闇へどなっていた。

ザワツと奥の方で樹木が揺れた、つづいて人の足音がする——
と思うと、不意に姿を見せた一人の武士、六尺棒を搔かい込んで、
血眼になりながらバラバラと飛んできた。

「あッ、止まれ」

「はっ」

「控えろ！ 阿波守殿がおいででの場所じゃ」

屋敷の者らしいので、三位卿がズカズカ寄ってみると、六尺棒
を持った男は、数寄屋のうちにいる歴々の姿をみて、びっくりし

たように両手をついた。

「無礼なやつめ！」有村ありむらは叱りとぼして、

「今宵は、この亭ちんの近くへ、何人なんびとたりとも近よるなど申しつけてあるのに」

「はっ、私は、その庭番の者にござります」

「いよいよ不埒ふらちではないか、警固すべき者自身が、お席を騒がしては何もならぬ」

「重々恐れ入りました」

「退さがれ退れ。御前へは身みが取りなしてくれ」

「しかし、なおもう一応、お庭内うちをあらためませねば、そのお役目が立ちませぬので」

「何故!?!」

「先頃から、奥牢へ入れてありますたわら俵一八郎というてんま天満浪人」

「ウム、大津より差し立てきた一八郎。それがどうした」

「いや、その浪人は牢舎中も、きわめてしんみょう神妙に致しております

すが、外よりして、しきりに牢へ近づこうとする者がござります」

「奇怪なことを申す、すりやまつたくか」

「今も今とて、何気なく見廻りましたところ、吾々の眼をぬす偷んで、

怪しい影が奥牢の戸に近づき、何やら声をかけようとしておりま

すゆえ、思わず、待てツ! ときび厳しく追いかけてましたが、たちま

ち影を見失い、ツイ御座所近くになるのも忘れて、この不始末を

つかまつりました」

「役目の忠実、こりや咎める筋はなかるう」と、三位卿は数寄屋の縁から阿波守のほうへ向いて、

「お聞き及びの通り。どうやら、この邸内にも、一八郎へ気脈を通じる者がある様子でござりますぞ」

「心得ぬことじゃ。番士！」

「はッ」

「すすめ、もつと近く」

「は」六尺棒を置いて夜番の侍、おそるおそる沓ぬぎの前へきて、墓がまのようにつくばった。

「只今の申し条、偽りはあるまいの」

「なんで！ 畏れ多うござります」

「では訊くが、しきりに俵一八郎の身に近づこうとする者は、一体、どのような風采、また面貌おもてしなど、しかと見届けておいたかどうかじゃ」

「手抜かりのお咎とがめある節は、申し開きもござりませぬが、前の夜も今夜も、チラと見た影を追い失いましたばかりで、その辺、残念ながら突き止めておりませぬ」

「そうか……」と阿波守の顔は暗い。三卿の人々も首をひねって聞いていた。

「しかし、ただ一つ瞭あきらかなことがござります」

「フム、それは？」

「くせもの曲者はたしかに女であるということ——。これは夜目ながら

見受けました」

「なにツ？」

阿波守は眸をキラリとさせて、

「その怪しい奴が女じゃとは、ますます不思議な沙汰さた、さては、女中どもの中に、一八郎と同腹どうふくのやつが住み込んでいるのではないか」

「にわかには申しきれませぬが、前後の様子から推しましても、やはり御邸内にいる者の所為しよゐらしく考えまする」

「不覚な訳じゃ！」重喜は、それを自分に向つていった。緻密ちみつにかがっておいた秘密の目を、何者かに乱されている不快がこみあげていた。

「では……」と、しばらく重苦しい考えに落ちていたが、何か一策を案じたらしく、気をかえて、

「番士！」

「はッ」

「森啓之助もりけいのすけを呼べ！ すぐに。そして別の広間へは、明々あかあかと

燭の数をつらねて、この下屋敷の女中どもを一人残らず居並べて
おけ！ 酒肴しゅこうの用意手早くいたせよ！ よいか！ 明日あすは正丸まんじ
の船出ゆえに、別れの宴を酌くむのである」

晴々としていいつけた。

白々とした粉黛ふんたいの顔に、パツと桃色の灯をうけながら、十四、

五人の侍こしもと女たち、皆一つずつの燭台をささげ、闇を払って長廊下から百畳じょうじき敷の菊の間へ流れこんだ。

まもなく阿波守重喜しげよし、茶亭さていからここへ席を移し、京浪人と称する三卿を初め、食客の竹屋三位卿さんみきようもついてくる。

明日は船出の別れの宴、ここに大名らしい大まかな歓楽の夜となつて――。

「方々かたがた、心ゆくまで酔えいませうぞ」

まず、阿波守から盃を上げてこういう。

「長夜の宴！」右少将が即興に答えた。

「されば、名残の宴でもある。藩祖はんそが阿波の国を賜うて以来、上じ府ようふ帰国の船中では、太守を初め水夫楫主かこかんどり、一滴の酒をねぶるこ

ともゆるさぬ家憲かけんでござりますゆえ」

「得かたり賢しこし、飲かみましよう！」常に無ぶ聊りな食客しょくの三位卿、こ
ういう晩は大好きである。

阿波守もそろそろ微醺びくんをおびてきた。

「おえお酔えおうぞ、謡うたおうぞ」

「舞まいましょう！ 何なになりと」

「よつづかろう。鼓づみを——」と、すぐこに侍女しもとの手から受けて、阿波
守おが緒おを締おめるのを、

「いいけません」

と、三位卿が横から奪うばつた。

「小鼓はかくなん申ありむらす有村ありむら、大倉流おおくらりゆうの鍛きたえを以もつて打うちます

る。まいて舞人は殿、いぎ——」

「では舞おうか！ 鳴門舞！」なるとまい

「一だんと見ものでござろう、阿波守殿の鳴門舞——」と、七条

卿、うめたにきよう梅溪卿、かたのきよう交野卿、みないい色になつてやんやと興がる。

こしもと「侍女どもも見ておけや」

ふすまぎわ襖際おくづかに居並んでいる奥仕えの女たち、ホホと笑えんで珍し

い殿の舞振りに眼をあつめた。

「打てや三位卿、秘蔵の小鼓撫子なでしこを——」

「あつ」と有村かたちは容を正してポーン！ 打ったり、撫子！

津の名人大倉六蔵おおくらろくぞう、それには及びもないけれど、どうやら

居候の芸達者。

ポン、ポン！ ……音^ね冴えをみすまして阿波守、白足袋^{たび}の爪^{つめ}さき静かに^{すべ}迂り出る……。

「おおウ鳴門、大鳴門！」

舞えば三卿も声について、それに合せて謡^{うた}いだした。

「大——鳴門！ 大鳴門！」

「濁^{じよくせ}世無限の底に鳴るウ——大鳴門！ 大鳴門！」

「流せや濁世、侵^{おか}せよ鳴門！」

「濁^{にご}り世の底に、鳴るわ鳴るわ」

「怒^{いか}るわ怒るわ——鳴門の渦！」

「洗えや鳴門——」

「澆^{ぎようき}季の濁り世」

ポーン！ と三位卿、吾を忘れて、

「討てや徳川ツ」

はツと驚いて三卿が、謡うを止めた時である。長廊下をツツツと小走りに来た近侍きんじの者。

「殿様——」と、両手をつく。

「なんじや！」

「お召めしになりました森啓之助殿」

「ウム、最前から待ちかねているのじや、なぜ早く姿を見せぬ？」

「まんじ丸御用意のため、川口の脇船へ何かの謀しめしあわせにおいでになり、只今、お船蔵ふなぐらにはおいでがないそうでござります」

「なんじや今頃——、きやつ、近頃どうか致している」と、舌打

ちして眩つぶやいたが、

「是非がない。では天堂一角を呼べッ」

「はっ」

退ひこうとすると、阿波守、またあわただしく呼び止めて、

「待て待て、ここへ参るついでに、奥牢へ入れおいた俵たわら一八郎、

庭先へ曳いてこいと申せ」

近侍が立ち去るとともに阿波守、また朗々たる音おんじよう声こゑで鳴門

舞を舞い出した。だが、舞いながらその眼まなざし、襖ふすまぎわに居流れ

ている女中たちの数をスツカリ読んでいた。

と、庭先へ動いてくる人影がみえた。

「一角、まいったか！」

舞い納めて、阿波守がこういうと、

「はっ」天堂一角の答えがして、

「俵一八郎をここに召し連れしました」

「ウム、早かった」

強くうなずいて、さて、大きく、

「あらぬ疑惑ぎわくをもつて当家の内秘のぞを覗かんとする天満の瘦浪やせ人、

船出の別宴さかなによい肴さかなじや、重喜がみずから血祭りにしてくりよう

！女中おんなども、誰かある！ 佩刀はかせを取れ」

と、居流れた侍女こしもとたちを、鋭い眼で見廻した。

「お佩刀はかせ」

すぐに小姓が差し出すのを、

「ウム」と左手へ引つ提げた重喜しげよし。「その燭台しよくだいを廊下へ出

して、女どもも余よが血祭りを見物せい！」

自慢の銘刀、ほたる斬りぎ信国のぶくにの柄つかに手をかけてギラリと抜く。

「阿波殿、少し酔つてまいられたかな？」と三位有村は、腑ふに落

ちない顔をして小鼓こつづみを片寄せたが、ほかの三卿は、血を見るこ

とを珍しげに端はしちか近くしとね褥を進めた。

女中たちは命じられたまま、燭台の幾つかを廊下へ出して花の

ごとく居流れたものの、一脈の殺氣、殿の眉宇びうから流れて、なん

となく恐ろしい。

「こやつか、血祭りの生贄いけにえは！」

鳴門舞の謡声うたごえより、なお太やかな音おんじょうをして、阿波守重喜ハツタと庭面にわもを睨にらみすえた。

そこには憔悴しやうすいした俵同心、一角に縄尻をとられて控えている。

関の時雨堂しぐれどうから、ここへ囚とらわれて来てより早百日、肩骨張つて色青白く、めつきり瘦せ衰えてみえるが、意気は軒昂けんこう。

晃々こうこうたる菊の間の燭まへ正面を切ツて、臆おくする色もなく重喜の面おもてを見上げた。

見下ろす眸と一八郎の眸、カチツと絡からみ合つたまま、互いに睨にらみすえながら無言の争鬪ややしばらく……。やがてのこと阿波守、「その面構つらがまえでは、問うても容易に口を開くまいが」と、前置

きしてほたる斬りの切ツ尖を、廊下の上から突き向けた。

「余が下屋敷へ、汝の手から住み込ませた同腹の女があるう。ここに居並んだ奥仕えの女の内にその廻し者が潜んでゐる筈。有ありて態いに名を明かさば、命だけは助けてつかわそう」

耳うるさし、というふうに、一八郎は眼を閉じたが、その時、廊下に並んだ侍女こしもとの三人目に、十六、七かと見える丸顔の少女、首を垂れてブルブルと肩骨をふるわせた。

「面倒めんどうじゃ！ 瘦浪人やせを荒あらむしろ塵へあのせて水の用意つ」阿波守が呼ばわると、「はっ」と庭先にいた天堂一角や番士たち、あわただしく働いて、瞬間に成敗せいばいすべき死の座を作る。

「御用意、整ととのいました」

一角が庭下駄を揃えると共に、ほたる斬り信国を引つ提げた阿波守、ズカリとそれへ足を進ませるかと思ふと――。

ふいと側の女中へ眼をつけた。

十六、七の愛くるしい小間使、ハツとして手を袖の裏へ隠したが、帯の前から懐劍の袋の紐ひも！　タラリと解けて下がっている。

「天満浪人の廻し者ッ！」

咄嗟とつさにうしろへ寄るや否、阿波守重喜の片足が、ポンと女の帯を蹴った。

「あッ！　……」と優しく魂切たまぎった声――と一緒に、蹴落された少女の姿は落花微塵みじん、隠し持っていた懐劍をほうり投げて、一八郎の側へ仆れるとともにワツと泣き崩れた。

声を揃えて朋輩ほうばいの女たち、

「オツ、お鈴殿！」と意外に衝たれて眼をみはる。

鳩の密使を飛ばして、常に佯同心の手へ、屋敷の内事を洩らしていたのはこのお鈴。

「泣くな！ うろたえ者めがッ」

一八郎は激越げきえつな声で叱りつけた。そして思わず側へ仆れた妹を、抱き寄せようとしたけれど、両手の自由はきかないのである。「ああ、すべてこうなる世であるのだ、泣くな、妹よ！ よいか、兄の側で死ぬるを嬉しいと思うがよいぞ」苦しい声を唇で噛みしめた。

ところへ、一人の近侍が、森啓之助の来たことを告げた。阿波

守は、一八郎を血祭りにすると称して、思う壺に女中の中から諜ち
者ようじやを見出した満足につこととして、

「啓之助、啓之助」

呼び立てながら信国の太刀を鞘さやに納める。

「はっ」と一角の側へ、頭ずを下げたのは森啓之助。「明日の御用意のため駈け廻っておりましたゆえ、ツイお召しも知らず遅うなりました」

こう言い訳したが、実は、密かに公務の暇を偷ぬすみ、お米よねを隠し
てある綱倉むぐに潜り込んで、何をしていたか分らない。

「明日あすまんじ、卍丸の脇船へは誰が乗るの？」

「石田十太郎殿の組手くみてが乗ります」

「そちが代れ、都合がある」

「はッ」

「そして脇船の荷底へ、この一八郎とお鈴の二人、積み込んでまいるのじゃ」

「心得てござります」

「撫養むやの浦へ着船の節は、渭之津城いのつじょうへ寄るには及ばず、すぐ吉野

川をさかのぼって、劍つるぎ山さんの間者まわらひ牢ろうへ二人の奴を送りこむよう。

この大役、しかと申しつけたぞ」

欣よろこんだのは啓之助、お米を阿波へ連れこむには、本船正丸より

脇わき備ぞなえで行く番船の方が何かにつけて好都合え。得えたりや応おう、と

いう色は隠して、俵一八郎とお鈴を番士に引つ立てさせお船蔵へ

急いで行つた。

お船歌ふなうた

お鈴と一八郎の兄きょうだい妹いを、啓之助の手へ渡して、阿波守が席へ戻ると、三位卿は物足らぬ顔だった。

「常にご自慢のほたる斬ぎり信国、とうとう血祭りの御用に成りませんでしたな」

「もとよりあれは重喜の手策てだて……」

ほほ笑えんで盃を取り上げたが、ふと苦い味を覚えて下へおく。

「御炯眼けいがんのほど恐れいった。しかし、あれまでにしてなぜ御成

敗なさらぬのか、この左馬頭には少し腑ふに落ちかねまするが」

こんどは、七条卿の疑問が出た。

左京太夫や梅うめ溪たに卿きやうも同感らしく、

「密事を嗅かぎつけている輩やから、剣山に封じおくのも無事であろうが、
いッそ、断だん刀とうの錆さびと致したほうが、安心でもあり、お手数もな
いことと考えまするが……」

「その儀、重喜も承知しておりますが、当蜂須賀家の掟おきてとして、
捕えた隠密は、昔から必ず剣山へ差し立てることになっている」

「ほう、それはまたいつ頃から？」

「今より百二十余年前、蜂須賀三代の国主は義伝公ぎでんこう、当時南に
は天草あまくさの乱らんが起っておりましした」

「フム、義伝公。蜂須賀至鎮とおおせられて、非常に英俊えいしゆんご豪邁うまいなお方、巷間こうかんの伝えによれば、眼点がんでんの瞳ひとみが二ツあつたとか承る」

「さよう、とにかく、群臣ぐんしんも懼しやうふく伏する威風がござつた。その頃江戸に將軍たる者は三代家光、この義伝公を怖るることひとか一方たではありませんでした」

「なるほど、大いに領うなずけます」

「折も折とて天草の乱には、戦に破れた落おちゆうど人どもが、阿波こそ頼るべしとあつて、海伝いにおびただしく紛れまぎこみ、また義伝公は、左右そくうなくそれを劍山かくまに匿かくわれた」

「では当時にも、天草乱後の虚きよをうかがつて、徳川討伐の壮図そうとが

あつたのでござろう」

「いや、その辺は分りかねる。しかし、今日なお渭山いざんの城たぐわに蓄えある、武器、船具、楯たて、強薬ごうやく、鏃やじり、金銀の軍用は、みな当時、天草より持ち込んだ物や、義伝公の御用意であつたことはたしかでござる」

「ウーム……それが百二十年後の今日になって、皇室の御おんため為ために、役立ってまいるとは思議な訳」

「少し話がそれましたが、さてその義伝公、泰平の豪傑はとかく不遇で、遂に毒殺されました」

「ア、誰に？」

「家光の廻し者」

「隠密でござるか」

「イヤ、義伝公の奥方であつた。それは家光の姪めいで、幕府より義伝を毒殺せいという旨むねをうけて、阿波へ嫁とついできた美女でござる」
 「己おのれが殺そうとする者へ嫁いでくる花嫁の心。それは思いやらるるが、徳川の陰険政治、よく現れておりますのう」

「記録によれば正月の末、城下千光寺の徳命とくめい観梅かんばいの日でござつた。義伝公の梅見の酒へ毒を盛りました。それは世にも恐ろしい鳩毒ちんどく、さすがの豪傑ほりも濠の石橋まで馬を返して斃たおれました。徳川家より嫁いできたその奥方、また毒を仰いで助任川すけとうがわに身を投じた。すわ、城内城下は申すに及ばず、阿波一国の騒動かなえ、鼎かなえのわくがごとしでござる」

「徳川討てと叫びましたろう」

「無論、浦々軍船の仕立てをなし、城下は甲冑かっちゆうの騎馬武者で埋めたと、今も古老の話でござる。しかし、当時四囲の情勢では、まだ若い幕府の力、所詮しよせん、仆すことはできません。恨みをのんだ家中ども、ここにすさまじく結束して、江戸より奥方に従ついてきた腰元こしもとようじん用人は申すに及ばず、到る所の徳川に縁ある者を隠密と見なし、日ごと夜ごと、これを助任川すけとうがわの河原にだして斬りました。ために、富田とんだの浦は血に赤く、河原は鬼哭きこく、哭ゆう々しゆうとして、無残むぜんというも愚かなこと、長く、渭之津いのつの城に怪異かいい妖聞ようぶんやむことを知らず、という結果になりました」

「才さい才さい殺戮さつりくの崇たり！ それで」

「一種の迷信を生じたものか、四、五代目の太守の世より劍山の^{さんろう}山牢制度ができたのでござる」

女中や小姓は遠ざけられて、その時、菊^{きく}の間^まには阿波守そのほか四人の影だけ……。

白い襖^{ふすま}という襖一面、伊藤^{いとう}藤若^{とうじやくちゆう}冲の描いた乱菊の墨色あざやかに、秋の夜は冷々と冴^さえ更^ふけている。

と……、床わきの書院窓の外へ、スルスルと蜘蛛^{くも}這^もいに寄つてきて、ジツと、中の話を聞いていた者があつた。

頭^{かしら}は切^{きり}下げ、無紋^{むもん}の黒着^{くろぎ}、腰から二本の蠟^{ろう}色^{いろ}鞆^{ざや}がヌツとうしろへ立っている。

それはのりづきげんのじょう法月弦之丞であつた。

書院窓に耳をつけて、なおも、菊の間の話をジツと聞いている

……。

お米がよね、綱倉へかどわかされてきた晩——。彼は、番士の手槍を引っぱずして一太刀に斬ツて捨てて、もとの誓せいもんじん文神の抜け穴から姿を隠した。

そして四日目。

いよいよ明日あすまんじは丑丸が出るといふ今宵。お船蔵の混雑にまぎれて、大胆にも、この下屋敷いぎの域まで足を踏み入れてきた。

宵のうちに、隣帆亭りんぼんていの方で、阿波守初め四人の公卿くげが、密議をこらしていた様子も樹立こだちの中からうかがっていた。

しかし、そこでは、容易に近づけなかったが、やがて、広間の方へ席を移して、別宴になった隙を計り、彼は用部屋の床下から奥へ匍はい進んで、ムツクリ、ここへ姿を現したのである。

足あし拵ごしらえはわらじ膝た行つ袴け、身み軽かにしたのはイザという場合の用意だ。

劍山かんじやろうの間者ま牢ろうの由来——天あま草くさ当あ時まのいきさつ、また義伝公毒害のことから徳川家へ根強い怨恨をふくんでいる訳——。それらの話をきくにつけて、弦之丞は心の裡うちで、

「ウム、いよいよ阿波の密謀はたしかだ」と信じた。

さらにまた、それが一朝一夕せきの陰謀でなく、義伝公以来歴代の太守が、幕府に隙さえあらばと、常にやじり鑢とを研いでいたことに違い

ない、とも思つた。

およそ、一国の民心に彫りつけられた程の怨みは、必ずその子に伝え、その孫に語られ、報復の遂げられるまで、世々、代々忘れぬものだ。ましてや、一代の英君と仰いでいた義伝公を、徳川家の詭策きせやくに害せられた阿波の怨みうらみというものは、弓取の子孫は無論、半農半武家の原土はらしの胆きもにも銘じ、野に働く藍取り唄うたにも現れたらう。

してみると、阿波の反徳川思想は、今日や昨日きのうのことではなく、永い歴史と根深い宿怨のある所。

それかあらぬか、蜂須賀の子女は、当時すこぶる貧乏で幕府からは好まれぬ公卿堂上くげへ多く嫁いでいる。重喜のすぐ先代をみて

も、一女は花山院大納言だいなごんの正室に、また鷹司家たかつかさけ、醍醐大納言だいにご、中院ちゅういん中将ちゅうじょうなどとも浅からぬ姻戚いんせきの仲であつた。

そこへ宝暦の氣運が芽ざし、尊王皇学の風が起り、倒幕の風雲がわずかながら動いてきた。

公卿くげしんしん縉紳と密接な結びがあり、しかも如じよじょう上の歴史をもつ蜂須賀家が、その裏面に策動するのは、あまり、当然すぎるほど当然なこと。

今——菊の間の話をきき、それやこれを思い合せて、法月弦之丞、思わず、慄然りつぜんとせざるを得なかつた。

「ああ、幕府は遂に仆たおされるのかもしれない」
 フイト、そんな氣持がした。

これほどあきらかな、危ない氣運が芽ざしつつあるのに、何と
 いう江戸城ののんきさだ。前將軍家重いえしげの遊惰ゆうだなこと。今の十代
 家治いえはるの悠々逸樂いつらく。

義伝毒害の宿怨を忘れぬ阿波や、塩を舐なめて皇学を起さんとし
 つつある公卿とは、その意気なり境遇なりが、あまりに雲泥うんでいな
 相違である。

しかし、弦之丞一箇の立場はまた別だ。

幕府が危ないと感じたら、未然に救うのが彼の立場だった。

あぶないのは江戸城のみか、恋人お千絵様の前途はなお暗い—
 |。その禍わざわいは、彼女の父世阿弥よあみが、阿波に入って帰らぬことが

第一の原因だ。

おお！ 甲賀世阿弥といえば。

ことによると彼はまだ生きている。いや！ きつと生きているに違いない。

どこに？ それは劍山のかんじやろう間者牢だ。彼はとら囚われて十年の月日を、おそらく間者牢の中に送っているだろう。

もはや、疑うべきもないことだ。今も、阿波守自身が、菊の間で話していたではないか。

「——で、囚えた隠密は必ず、劍山の山牢へ送って、終身封じこめるのがおきて掟でござる」と。

彼は、心の奥で叫んだ。

「今夜の忍びはムダでなかった！」

そこで、書院窓の明りを避けて、ソロ……と四、五尺身を退ひいた。——と思うと長廊下、忍しのび者ふせぎの仕掛張しかげはりが、キキキキ……と鳴くかのように軋きしみだす。

はツとしたが弦之丞、甲賀組の者ではないから、浮ふたい体とか音伏ねふせとかいう忍にんぼう法を知らない。思わず片膝を立て、一足跳びに廊下から庭先へ飛ぼうとした。

途端すぎとに、杉戸を蹴すつて駈かけ寄よつた天堂一角。

「おのれツ！」とばかり、うしろから組むが早いか、腕を輪わ締じめに喉首のどくびを引ひつ掛かけて、タタタタと大廊下を五、六間引き戻もした。

うしろから咽のどを巻き込んだ一角の腕、荒木流のやわらで首くびかん
門ぬきという必殺の手である。

この際、声をだすのは自殺するのと同じわけになる。自力をし
ぼつてもがくのはなおあぶない。といって、連つれ拍びょうし子しに五、六
間あとも後へ持つてゆかれれば、グツタリとして顎あごの下が紫色になり
おわるのは必然なこと。

不意であるから、弦之丞もハツとしたには相違ない。

まず呼吸に気力をあつめたるう。

無論、心得のある彼、声もださず力もこめず、一角の引き戻す
まま大廊下を逆に歩いた——いや、よろけた。

そのまに、左の肩を探つて、対あいて手の拇おやゆび指びをギュツと握る。い

わゆる技わざの手懸り、一瞬の妙機である。

気当きあての一喝かつ！ 対手あいての耳をつんざいたかと思うと、エエイツ、
たすき襷を切つて払つたよう。

身を沈めた弦之丞の肩越しに、天堂一角の体は斜めに飛んで、
 大廊下から庭先へと、見事もんどり打つていた。

——と思うと一閃せんの剣光、シュツと走つて弦之丞の毛を斬つた
 かと思われる。

一角とてさすがである。櫓やぐら落おとしに投げ飛ばされた咄嗟とつさには、
 空間に腰の大刀を払つたのみか、トーンと猫がえりをして庭先へ
 立つていた。

「くせ者！」

と、この時初めて呼ばわつた。

同時に右手のめて大刀を、颯然と横に払つてきたので、彼はすばやく後ろへ身を開いた。その弾みに塗ぬり枿わくの襖障子一、二枚を煽あおつて菊の間の中へドツと仆れる。

と見れば、広間は暗澹あんたんたる暗闇。

いつのまにやら一点の燈とも灯しびもなく、阿波守を初め三卿の人々は、物音と同時にすばやく奥へ退座たいざしてしまつたらしい。

倒れた襖を踏みつけたので、弦之丞は菊の間の闇へよろけこんだ。その影こそ、不敵な曲くせ者ものにまぎれもあらずと、胸を躍らしたのは衝つ立たてのかげに身を潜ひそめていた竹屋三位。いつのまにか切き目長押りめなげしに掛かけられてあつた小薙こなぎなた刀を引き抱えている。

壮気はさかんだが、世間見ずの有村は、この屋敷のかかりゆうど懸人になつてから、いっぱしの武芸者となつた氣でいる。だがかんか轆轤不遇とやらで、まだいっぺんも真劍の場合にのぞんだことがないのを常から嘆じていたところだ。

折から今の曲者という声！ よきえもの獲物、ごぎんなれと息まいたものである。日頃のたんれん鍛錬をなきなた薙刀の柄にこめて、そこへよるけてきた弦之丞の影を見るや否や、がっさんりゆう月山流の型どおりにそのこしぐるま腰車を手強く払つた。

だが人一人、そうたやすく斬れないこと無論である。

弦之丞の身はひえん飛燕のごとくかわつていた。そして三位有村はな薙ぎなた刀の坂刃さかばに風を切らせてのめりこんだが、ウム！ と踏み止ま

つて左手の一本延ばしに切り返すと、一緒に薙なぎ刀なたは、空を躍つて天井からはね落され、三位卿その人はと見れば、はるかなる床の間の花瓶かびんと共に仆れて、花と水を狼藉ろうぜきに浴びていた。

「ちツ！ ……残念」

起き上がって薙なぎ刀なたを拾った時、次の間の襖ふすまがサツと開いた。

甲斐甲斐しく装立いでたった近侍の者、三人、五人、七人、十人ずつ――

―得物を取って続々と八方へ駈け散つてゆく。

「初太刀しよだちをつけたのはこの有村、余人よじんに功を奪われてなるものか」
腰の痛みを忘れて自分も一緒に走りだすと、

「三位殿、三位殿」

後ろで呼び止める声がする。

ふりかえつてみると阿波守、微笑を含んで立っていた。

「どこへまいらるる？」

「どこへといつて、今の騒ぎ、殿にもご存じでおわそうが」

「知っております。それゆえ、すばやく次の間へ逃げ退いたのじや」

「日頃の口ほどにもない殿じゃ！」三位卿は齒がゆそうに、

「この奥深い所まで、入り込んでまいった不敵なやつ、逃がしては一大事でござる。この有村が引つ縛^{から}めてまいる所存」

「はははは」重喜は愉快そうに笑った。

「さようなことは家臣どもに任せてお置きなさるがよろしい。あなたの月山流^{がつさんりゅう}ではちとむずかしい曲^{くせもの}者、手配は天堂一角が

常から残りなく固めているゆえ、おおかた、今にどこからかここへ捕えてまいるであろう」

築つきやま山の辺からお船蔵境ふなぐらざかいの木立——または大殿の屋根から床下に至るまで、弦之丞を尋ねるたず武士が、今や、右往左往に入り乱れて見える。

下屋敷の騒音を後にして、弦之丞は今、脱兎だつとのごとく船蔵の方へ走ってきた。

ほつと、息をついて、あたりの闇を透すかしてみると、ここはいつかの晩、綱倉の窓からお米よねの噉すり泣く声をきいた記憶のある掘割岸。

翌日は、安治川を出る筈の卍丸も、岸をかえたとみえてそこには影なく、ドボリ、ドボリ……と掘割へ揺れこむ波の音があるばかり、無月の秋はことさらに暗い。

「オオウーイ」

不意にすぐ近くの闇の中で、こう呼ぶ者の声の水へ響いて行つたので、弦之丞は陸へ引き揚げられてあつた過書舟の底へ身を退いて、その陰から様子をうかがっていた。

「オオウーイ」

続いて別な声がまた呼ぶと、木魂返しに向うからも、応ーツと答える声がある。

と、掘割の水門から、ギイツ、ギイツ、と櫓を押ししてきた一艘

の見張舟がある。黒い波紋を大きく描いて人影の立っている棧さんば橋しへ漕ぎ寄せてきた。

「ご苦労だった」

という声は森啓之助。

続いて繋綱もやいを取る者、舟へ飛びのる者、しばらくドカドカ騒いでいる様子は、下屋敷から引つ立ててきた俵たわら一八郎とお鈴を、脇わ船きふねへ移すためにこの見張舟を呼んだものらしかった。

「縄目は大丈夫か」

啓之助がしきりに聞いている。

「脇船へ積みこむまでに、川の中へでも飛びこまれては身の失策になることじゃ」

「横杭よこぐいへ縛りつけておきました」

「ウム、それならまず間違いはあるまい。念のため、その帆布ほぬのを二人の上からかぶせておけ」

「はっ、こう致しますか」

「よかろう！　ところで方々にはもう御用がないゆえ、ここをお引き揚げなさるがよい」

「でも、森様お一人では」

「いや、ご配慮には及ばぬ。まんじ卍丸の方も手不足であろうし、やがて殿のお座ざがえも仰せだされるであろう。これまでお手を貸していただければ、あとは拙者が仲ちゆうげん間相手に送りこみます」

「では」と、番士ふなて船手の人々は、そこを去つて各の持場へ分れ

て行つた。

その人々のいなくなるのを見澄ますと、啓之助はヒラリと陸おかへ上がつてきた。なお念入りに前後を見廻し、足早に飛んできたのはすぐ前の綱倉。

「宅助、宅助」

戸を叩くと、用心深く四、五寸開あいて、

「おお、旦那でしたか」

「どうしたお米は？」忙しく中へ入つて見廻したが、少し色をなして、

「見えないではないか」

「あわてちやいけませんぜ、夜半よなかになつたらまんじ丸へ運びこむから、

支度をしておけと旦那がおつしやつたんで、たつた今女をこの長なが櫃がびへ押し込んでいたところでき」と、仲間の宅助、意味あり気に側の長櫃を指さした。

「ア、それがにわかの様様変えでな」

「えッ、手違いに？」

「なにさ、こつちにとればなおさら都合のいい話。 劍つるぎ山さんへ送

る者があるので、急に脇船の方を承つて行くことになった」

「おお、そいつア旦那、お誂あつちえじゃありませんか」

「されば、今すぐに俵一八郎と一緒に積み込むつもり、その長なが櫃がびをあれまで持ちだしてくれと申すのじゃ」

「オツト合点、と言いてえが、旦那、こいつア一人じゃ持ち切れ

「ませんや」

「よし、身どもも手を貸そう」

「そうまでお惚れなさいましたか」

「ばかを申せ。ウーム、これや重い！」

「恋の貫目めかたでございますもの。わっしのほうがなお重い！」

「つまずくなよ」

「まッ暗だア、色情いろの闇路やみじ」

「ソレ、そこに繋つないである見張舟へ……」

「旦那、わっしが先へ下りますから、手をはずさないでいておくんなさい……はずしてドボンと沈めたところで、この宅助は元々だが、旦那が浮かばねえでしょう」

小舟の中へ、ドンと長櫃を下ろした時だ。

物蔭から走りだしたのりづきげんのじょう法月弦之丞。

「待てツ」

繫綱もやいを解きかけている宅助をほうり投げ、驚く啓之助を突きつけて、舟の中へ躍りこもうとした。

かねて、目明し万吉から仔細しさいを聞いていた俵同心とその妹、また片恋ふびんの不愜な女も、事のついでに救って行こうとしたのだが、人の運命はともあれ、彼自身の危機が、すでにそこへ迫っていたのは是非もない……。

闇を、低く流れてくるのは槍である。閃々せんせんと横に光を刻んで

くるのは白刃である。

はちすか蜂須賀名物の猛者、はらし原土の者や若侍の面々。くせもの曲者がお船蔵の

方へ駆け抜けたときいて、天堂一角をまッ先に、今、ここへ殺到した。

先の一角がピタと足をとめて、

「おおあれだッ——法月弦之丞！」

指を指し示すとともに、

「それッ」

浪がしらがかぶったような勢いで、槍や刀、入りまじった二、三十名の武士が、ドツとその人影の後ろへ衝いて行つた。

あやういかな、法月弦之丞。

前は満々とみなぎる水。

うしろは刀を植えならべた殺陣^{さつじん}。

唐草銀五郎の遺志をついで、今宵^{こよい}初めて望む所の秘密境へ、一歩の足跡^{そくせき}をつけた彼も、それをわずかの思い出として、ここに進退きわまるであろうか？

と思われたが……。

ハツと振りかえった途端に、弦之丞、案外落ちつきすまして、刀の柄^{つか}をソロリと握った。

果たして凄^{こわ}い意気ごみで来た若侍たちも、六尺以上は近寄つてこず、自然と、そこへ半円の陣を作つて、

「神妙にしろッ」

「のがれる道はないぞ」

口々に、からきあ空気合いの声ばかりが激しい。

彼がここでユツタリと構えたのは、充分な理由があることで、弦之丞には尊い一つの体験がある。

その話は――。

江戸雁木坂がんぎざかにいる戸ヶ崎夕雲とさきせきうん。当代の名人であり、弦之丞

の師であつた。かみいずみりゆう上泉流こはくの剣法に虎白和尚の禅機を取り入れ、

称して無住心剣夕雲流せきうんといつてゐる。彼はその夕雲門で、まず第一の使い手だつた。

ある年の春である。おぼろよ朧夜だつた。

何かのことに夜を更ふかして、護持院ごじいんヶ原はらを帰るさ、怨うらみを含む

他流の者が、三十人余り党を組んで待ち伏せ、いわゆるやみうち闇討を食った。

追い散らして血路をひらき、無事に屋敷へ帰ったものの、五、六カ所の薄傷を負ったので、うすで数日床にしていると、やがて様子を見にきた夕雲先生、それを見て、

（大たわけ者！）

見舞いでなく、叱りつけた。

（夕雲流の名を汚し召された。一体その夜の敵は何人か？）ときか
かるるまま弦之丞は、むしろ得意に、

（三十人）と答えると、夕雲、

（三人か？ ……）

(イヤ三十人程で)

(違うであろう、三人であろう)

(イヤ、たしかに三十人で)

(はアて！ 会得えとくの悪い！) 不機嫌にいったがまた面おもてを和やわらげて、

(およそ一人が数人に取り囲まれる場合、敵は三人よりないもの
じゃ。どんな場所にも必ず背を守るたて楯はある。右敵うてき、左敵、前敵、

これ以上に敵はない。対手あいての数はあつてもただ一人へこれ以上の
剣が一度にかかれる理由がない。さすれば三十人も三人の敵と同
じ、四十人も同じこと。要は身しんと心しんの据すえ方かた一つ。どうだ、分つ
たか)

この時、口伝くでんをうけたのが獅子刀ししとう、虎乱こらんの剣けん。二つながら衆を

対手あいてとする時の刀法である。弦之丞はそれを味得みとくしていた。

今——。

彼は、無銘むめい二尺七、八寸の大刀を静かに抜かんとしている。一人と一人との立ち合いなら別だが、衆に囲まれてしまった時は、この抜く時があぶない！ いかなる居合いあいの達人にしても、ここは毛ほどの隙——隙といい得なければ手塞てふさぎが生じる。

両面の剣が、その虚につけ入ってくるのは必然だ。こう張りつめた殺気というものは、瞬間、そこに剣もなく人もなく音もなく、ただ悽せい愴そうな鬼気だけがシートと凍りつめてくる。

ブルツと動く太刀尖さきは見えても、容易に手元へ斬りこんで行かず、キラリと光流を閃ひらめかす槍の穂も、無碍むげにはさつと突いてこ

ない。

一つは弦之丞が、けいけい熒々たる眼くばりのみで、つか柄に手をかけたまま抜かずにいるのが、かえつて無気味であつたかもしれぬ。

こうして、五ツ息六ツ息する間がたつ……。

と、後ろの船で、ながびつ長櫃のふた蓋を四、五寸持ち上げ、

「げ、弦之丞様——ツ」

と、お米がしにみ死身で声を揚げた。

弦之丞様——ツ、とお米が助けを呼んだのと、天堂一角の構えていた槍が、ダツ——と彼の右へ向つて突き出されたのと、ほとんど同時。

だが、その槍の穂がくるより早く、弦之丞は刀の柄をつかんだまま、踵を蹴つて左へ跳び、同時に鏗鳴りさせて一刀を抜き払った。

と思うと姿が見えない！

相手の姿は見えないで、そこには濛とした血煙だけが残っていた。衆は渦を巻いて混乱し、一人は真一文字に走っているのだ。

「のがすなッ」

タタタタツと、八、九人は駈けつづけたが、それも、追いつくたびにただ一刀で薙ぎ伏せられた。虎乱の太刀風、獅子刀の切っ尖、寄るべくもない鋭さで、彼の行くあと行く跡へ、幾人かの若侍が苦鳴と血煙をあげてぶっ仆れた。

「ええ、これほどの手配りを破られたか」と、齒軋はぎしりをした天堂一角、檜柄かしえの槍を抱えなおして、疾風のごとく追いかけたが、その寸隙すんげきに十間けんほどの隔りができていた。

弦之丞は、一八郎を救うこと、またお米のことも諦あきらめてしまつた。今はこの屋敷から身を脱するだけが容易でない。しかし、綱倉から例の誓文せいもん神じんの祠ほこらへ出る抜け道までは、さほど遠くなく、充分地の理みきわも見究めてあるので、やや窪地くぼちになつた藪やぶの中へザツ——と姿を隠してしまつた。

途端に、彼の隠れた所から、ものの四、五尺と離れていない銀杏ちようの幹へ、プーン！と凄ひそい音がして一本の飛槍ひそうが突き立つた。刺さつた檜柄かしえの震動が止まらぬうちに、駈けてきたのは、それ

を投げた天堂一角。

「しまつた！」といつて、すぐ藪の窪へ走りこんだが、そこに意外な抜け道の口を見出して、

「オーツ」ぼうぜん 呆然として立ちすくんだ。

「天堂一角！」するとまた彼の姿を追ってきた者が、藪の外から呼びだした。

「誰だ」

「竹屋三位みじゃ」

「才才三位卿様で？」

「阿波守殿がすぐに来いとぎよいの御意であるぞ」

「ただいまの曲者くせものが、この抜け道より屋敷の外へ逃げ出しまし

た。せつかくながら一角、それを追つてまいりますゆえ戻られませぬ」

「いや、曲者の逃げたこと、殿も御承知。何せいまんじ卍丸へお座がえの時期が迫つた。早く早く！」

才才、そういえば、夜は疾とくに子ねの刻を過ぎ、やがて八刻半やつはん（午前三時）にも近かろう。

あけ暁の七ツから六ツ半刻ときの間がその日の満潮。浅瀬や洲すを交かわす都合の上に、ぜひ卍丸はその時刻ともづなに纜を解かねばならぬ。

とすると——一角もあわてざるを得なかつた。

彼はぜひなく三位卿について足を早めた。

卍丸は下屋敷の裏庭——安治川あじがわの横について、阿波守はすでに

楼船ろうせんの屋形しとねへ褥しとねを移うつしていた。

支度は一月も前から手廻てまわしされているが、重喜しげよしの身の廻りの物を運ぶ侍こしもと女たちや、潮除しおよけの幔幕まんまくを張りめぐらす者や、櫂かいをしらべる水夫かこかんどり楫主かこかんどり、または朱塗しゆぬりの欄らんの所々に、槍やぶお船ふなじるし印いんの差物さぶつを立てならべる侍さむらいなどが、事こと俄にわかのように目を廻まわしている。

その混雑こんさつの中を通とおつて、天堂一角てんたういっかく、おそろおそろ船屋形ふなやかたの座ざ所しこへ伺候しこうした。そして弦之丞しげのぢやうをとり逃にげがしたことを首尾しゆび悪わるそうに言い訳いげするのだつた。

阿波守あはもりは、別に不機嫌ふきげんな様子ようすもなかつた。その代りに、一角の足あしがしびれのきれる程ほど黙然もくねんとして考えかんがこむ。

やがて、明快な言葉が出た。

「ぜひがない！ 昨夜の混雑をつけこまれたのじゃ」

そういつたのはよかつたが、次に突然、

「一角、そちは帰国を見あわせい、しばらく暇をとらすであらういとま」

「あつ、お暇を？」一角は冷やりとした。しばらくを、永ながのと、

聞き間違えたのである。

「ウム！ まず一兩年遊ゆうれき歴する気で、思う所を歩いてこい。た

だし、その間にも役目があるぞ。ほかでもない、法月弦之丞、き

やつをつけ廻して必ず討って取ることじゃ！ 彼こそ昨夜の密話

を残らず聞きおつたに相違ない、生かしておいては後こうと凶きまたの妨げ、

大事の破綻はたんを醸かもそうも知れぬ。よいか！」

「はっ」

「充分、そちに討てる自信があろうの」

「身に代えて刺止めまする」

「それで、余の船出も心安い。何かのことも、江戸表へ立ち廻つた節上屋敷かみやしきの重役どもに、計ろうて貰うがよい」と座を立つて、三位卿と共に船楼ふなろうの欄おぼしまに立つ阿波守。

「才才、ちぬの浦が明るくなつた」と眩つぶやいた。

霧の底から海があらわれ、霧の上から朝の陽ひがさんさんと射る。一の洲す二の洲の水尾木みおつくしも、順に点々と明け放れて、潮の満ち満ちてきた安治川一帯、紺の大水たいすいに金泥こんでいを吐き流したよう。

高いところで法螺ほらの音が鳴った。

蜂須賀家の水見櫓みずみやぐら——。

阿波へ出るべき正丸まんじは、今、ともづなを解いている。

上の過書船かみやぶね支配所でも、それに答える川合かわあひをする。と、半は

んとき

刻ほどは舟止めとなり、ウ口舟、物売り、石垣舟、すべてが影をひそめてしまうところは、ちようど陸における大名行列が下座げざ先触さきふれの法式と変りがない。

もりけいのすけ

森啓之助の乗りこんだ脇船は、一あし先に川口へ漕ぎ出していた。

ところで、お米はどうしたろう。

今朝は彼女の船出ともいえる。だが、ああ、それはなんと暗い

運命の船出だろう。

脇船の底——長櫃ながびつの中——そこにあるのは永遠の悲恋と恐怖

の闇ではないか。このかがやかしい光明ひかりの微塵みじんもないのである。

やがて着く彼岸ひがんで、その泪なみだと闇の長櫃の中から、どんなお米の

運命が生まれることやら……？

それは知るよしもなく、知る者は、今船やぐらに立っている啓之助のみだった。

「才オ……よく凧なぎた、よく凧なぎた。潮の色あい風都合も上々吉だ」

自己の幸運を祝福する言葉とも聞こえる。

彼には溢あふれる光明があつた。

ニヤリと、いやな思い出し笑いを洩らして……また役目の水見
 八方へ小手をかざした。

ボウ——と川上から二番貝。

卍丸まんじは徐々じよじよと川口へ向つて迂りすべだしてくる。そして、やや取と
 舵りかじに一の洲すの杭くいとすれすれに鏡の海へ泛うかみかけた。啓之助の
 船は、脇備えの形をとつて、その後から漕ぎ従う用意をする。こ
 れも渡海の際の常例である。

阿波守の乗っている卍丸——その舷ふなべりに立てつらねた船印の差さしも
 物ものには、桐のかけ紋と卍まんじの紋、朝の潮風をうけてへんぽんとひ
 るがえつた。

檜ひらしやの緋羅紗は太陽より赤く、燦さんとして波に映はゆる黄金の金具は

魚群も遠ざける威風がある。艦幕ともまくいッぱいに風をはらむかと思
うと、やがて、颯さつ！ 颯！ 颯！ 二十四挺ちようの櫓拍子ろびようしが、音頭おんど
と共に快こころよく波を切った――。

「有村殿！ 有村殿！」

こう呼んだのは船上の阿波守である。

「はっ、御用で！」と、胴どうの間梯子まぼしごを駈け上がってきたのは元氣
な三位卿。海をのぞむと誰しもが自然と大きな声になる。

「お召しでございましたか」

「されば、あまりに好い眺め、一人でほしいままにするのは惜し
いと存じてな」

「一天晴朗せいろう、今日のお船出祝しゅうちやく着やくに存じます」

「不吉な昨夜の騒動も、これで清々すがすがしく拭ぬぐわれた」

「ちようどこの船が、沖から浦曲うらわを見るころには、お別れにみえた、三卿のかたがたも、京都へお帰りある時刻」

「あつ……」阿波守は不意に、屋形の鯨くじら幕まくをパラリと下ろして、三位卿の眺めを塞ふさいでしまった。

その時船はちようど、川口の左岸にある目印山めじるしやま（後の天保山）の裾すそから遠からぬ辺にあつた。丘には、松の間から黒い燈明とうみょうだ台たいがそびえている。諸国廻船の目印となる丘だ。

臥龍かりように這つた松の木に足をふみかけ、その丘の上から卍丸の船影を見下ろしていた武士がある。それは法月弦之丞であつた。

「やがて見よ、阿波守」

彼は梢こずえに手をかけながら、心のうちで声をあげた。

「いかに関を封じておくとも、弦之丞が、きつと一度は汝の領土を踏みにまいるぞ！ うごかぬ証拠をつかみに行くのじゃ。——才才、一度江戸表へ立ち帰った上に、改めて、阿波二十五万石の喉のどぶえ笛へ、とどめを刺しに出なおそう！」

見送つていると、その一刹那。

どこからか、風を切ってきた妻つまじろ白の矢が一本！ 危なくも弦之丞の耳を掠かすつて、ぷつん！ と後ろの幹へ刺さった。

「さすがは重喜しげよし、油断なく自分の姿をもう見つけたか？ ……」
と、弦之丞も先の用意の周密なのに驚いて、矢柄やがらを見ると切銘きりめいにいわく、

——竹屋三位みふじわらの藤原之有村。

のどかな音頭に櫓拍子ろびょうしの声——そして朗らかにあわせるお国くへ
口調にくちようのお船歌ふなうたが、霧の秘密につつまれている秋の鳴門の海へ
指してうすれて行つた。

青空文庫情報

底本：「鳴門秘帖（一）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年9月11日第1刷発行

2004（平成16）年1月9日第20刷発行

※副題は底本では、「上方《かみがた》の巻」となっています。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2013年1月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鳴門秘帖

上方の巻

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 吉川英治
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>